

---

# 悪魔部へようこそ！

AAA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔部へようこそ！

### 【Nコード】

N0297V

### 【作者名】

AAA

### 【あらすじ】

何でも願いを叶えてくれると噂の部活があった。

誰が呼んだか、その名は”悪魔部”

これはひよんなきっかけで悪魔部を知った高校生達の物語である。

タイトル：質問

差出人：悪魔部

本文：喜劇の願い

舞台は現代、役者は高校生と悪魔、魔法や超能力はない、唯の人間

がつくる喜劇

この喜劇の結末は誰のどんな願い？

\* 本作は非常に黒いです。人の悪意や嫉妬、憎悪等、負の感情が苦手な方は読まない事をお勧めします。

\* 本作は実在する事件を参考にしておりません。

\* 本作の模倣事件が起きたとしても、作者は一切の責任を負いかねます。駄目犯罪！

## 六月十日（前書き）

\* 本作は非常に黒いです。人の悪意や嫉妬、憎悪等、負の感情が苦手な方は読まない事をお勧めします。

\* 本作は実在する事件を参考にしておりません。

\* 本作の模倣事件が起きたとしても、作者は一切の責任を負いかねます。駄目犯罪！

六月十日

六月一日、金曜日、放課後、後戻りできない計画が動き出した。夕暮れの中、四人の男女が住宅街を歩いている。

学校帰りなのだろう、四人は制服を着込み、手に鞆を持っている。四人の内の一人、エミナが深いため息を付く。脂肪の少ない胸部を大きく揺らし、頭を垂れる。いつもは勝気な印象を与えるツリ目も、今はばかりは大きく垂れ下がっていた。

「ああ、最悪う」

エミナは手に持ったテスト用紙を見て、もう一度大きくため息を付いた。

テスト用紙には、大きく六〇点と記されていた。点数の下には、後一点で赤点だ気をつけよう、と教師からのコメントが鎮座している。彼女の通う私立学園の高等部は五九点から赤点である。

「あれだけ勉強してこれっすか？ これは、期末が怖いわあ、うるる」

窓際のサラリーマンの様に背中を煤けさせながら、エミナは暗いメロデーを口ずさむ。

哀愁の帯びたエミナの背中を隣を歩いていた少年が叩く。少年は小柄で線が細い。同世代の男子からは感じられない清潔感があった。私服であれば、女に見間違えてしまいそうである。

「大丈夫だよ。まだ、赤点じゃないんだからさ。期末もきっちり点を取れば、いいだけじゃないか。僕も協力するよ」

少年は爽やかな笑みを浮かべて、エミナを慰める。

「コウセツウ、あんたやっぱいい人だよ」

エミナがコウセツに抱きつくこうとするが、第三者に髪を引っ張られ未遂に終わった。

エミナの髪を掴む手の主は、艶やかな黒髪が特徴的な和風美人の少女だ。

少女は笑みを浮かべたまま、強引にエミナの髪を引っ張り、コウセツから引き離す。

「痛い、痛い、スマレ、痛いってば！」

「そうだよ。エミナ、頑張れ。私も応援するよ」

「髪、髪、抜けるから！ 禿げるから！」

「エミナはやれば出来る子なんだから、しっかり私が勉強を仕込んであげるね」

和風美人、スマレはエミナの抗議を無視して、テスト勉強の話を続ける。スマレの手はその間ずっとエミナの髪を握り締めたままだ。なまじ美人だけに、その行動はちよつとした恐怖を辺りにふりまく。

「スマレさん、やめてあげたら？ なんか凄く怖いよ」

いつの間にか二人と距離を取っていたコウセツが、提案する。

「うん、分かったよ」

それまでが嘘の様に、スマレはあっさりとエミナを開放した。

「エミナ、ああいう大胆な事はダメだよ。あれは恋人同士がするんだからね。コウセツ君とエミナはただの幼馴染でしょ」

スマレは腰に手を当てて、エミナに忠告する。当のエミナは、毛根の無事を確認するのに忙しく、ちつとも聞いてない。

お仕置きの為にスマレはエミナのほっぺに手を伸すが、コウセツが途中で遮る。スマレは何とかコウセツの妨害を潜り抜けようとするが、全てコウセツに見切られた。

スマレとコウセツが不毛なやり取りを繰り返していると、今まで一言も話さなかった四人目の男が、三人に声をかける。

「なあ、三人ともちよつといいか？」

スマレ、エミナ、コウセツ、計六個の瞳が、男へ向けられる。

「え、なに？」

「テストと毛根が大変だから、くだらない事なら怒るわよ」

「あ、ケンジ、居たんだ。地味すぎて気付かなかった」

三者三様の反応に、四人目の男、ケンジは頬を引きつらせる。ケ

ンジの誇る平均的な男子高校生の体も、心なしか細やかに震えている。

「こら、最後！ 地味言うな。普通が一番なんだよ！」

ケンジの叫びに、コウセツは困ったように頬を掻く。そして、同意を求めるように、コウセツはスマレとエミナの方を向いた。

コウセツの視線に、二人も、ねえ、と曖昧に首を振る。

「そこ、一人だけ置いて、分かり合うなよ。しかも、凄く俺に不名誉な方向で」

「だって、あんたさ、特徴なさすぎ」

三人の意見を代表するように、エミナが言った。同情や優しさが含まれていない、さっぱりとした一言だ。

「なっ」

直球と真ん中で投じられた意見に、ケンジは言葉が詰まる。

「まあ、学校で後姿見ても、区別できないんだよな。体格に特徴なさすぎて」

「そうだね。私服で人ゴミに入ったら、ナチュラルに背景化しちゃうような感じだよ」

更にコウセツ、スマレの追い討ちで、ケンジは力なく崩れ落ちる。

三人はケンジを無視して歩き続けた。

「まあ、いい。それより、ちょっと面白い噂を聞いたんだ」

ケンジは目尻に溜めた涙を拭くと、再び三人に声をかける。

再び三人の視線がケンジに集まった。

「うちの学園でなくて人も多いだろ。だから、結構へんな部活があるのは知ってるよな？」

ケンジの言葉に、三人は頷く。

彼らの通う六道学園は、小中高大までの一貫教育を行っており、当然だが人が多い。その分、奇人変人も多く居る事になる。

奇人変人どもが集まり、鮎部やコタツ部などと言うわけの分からない部活を作っていた。また、そういう変な部活に入らない為、生徒間での情報交換も盛んだ。

「そんな中でも、一等変な部活があるらしんだよ。

願いを何でも叶えてくれる部活、てのがさ。

その名も、悪魔部、て言うらしいぜ」

言い終えたケンジは三人の顔を順次見ていく。三人の反応をうかがうが、芳しいものではない。三人とも聞き飽きた様子で、退屈そうにケンジを見ている。

「そりゃ、ガセでしょ。大体、なんでも願いを叶えてくれるなんて胡散臭い」

エミナは小馬鹿にしたように、鼻で笑う。

「そうだね。大体、悪魔部なんて悪趣味なネーミングを学校が許すかなあ」

コウセツもエミナの意見に頷く。

「ケンジ君、そんな部があったら嬉しいけど、多分、無いんじゃないかな」

最後にスマレが、言いづらそうに常識的な判断を下す。

あまりにも盛り上がらない反応に、ケンジは顔をこわばらせる。

シヨックを受けているようだ。

「そ、そうだよな。そんな噂、嘘っぱちだよな。アハハハハ」

ケンジの乾いた笑いが木霊する中、残りの三人はどこか鋭い視線でケンジを観察してた。

三人の視線は、重要参考人を見る警察のそれによく似ていた。

## 六月二日 朝

六月一日、土曜日、早朝、スミレは人気のない校舎を歩いていた。艶やかな黒髪をなびかせ、歩く姿はどこか楚々としており、湿った梅雨時期に清涼な空気を運んでくる。

スミレの足音が、コンクリート地の廊下によく響く。時折聞えてくる運動部の掛け声が無ければ、学校に自分ひとりしかない錯覚を受けていただろう。

もしかしたら、校舎にはスミレ一人しかいないのかもしれない。始業のチャイムまで一時間近くある。こんな朝早くやってくる物好きは運動部ぐらいだ。教師が登校するにしても時間が早すぎる。スミレは教室に鞆を置くと、すぐ外へ出る。

校舎を出てから、並木通りに沿って歩くこと数分、五階建ての校舎が現れた。

その校舎は一風変わっていた。窓と言う窓にポスターが貼られており、校舎の周りには用途の分からないガラクタが放置されている。文化祭直前の様相だった。

「おじやましーす」

スミレは囁くように挨拶すると、ゆっくり校舎に踏み入った。

校舎に入ってすぐ、スミレは驚く。壁と言う壁にポスターが貼られ、所々には看板まである。

ポスターや看板には、何かしら部活の名称と、簡単なイラスト、そして新入部員大歓迎の七文字が踊っている。

スミレの入った校舎は、高等部部室練、と呼ばれる高等部の部活専用部室だけが収められた建物である。

スミレがこんな朝早くに、部室練に来たのは訳がある。人知れずに探したいものがあつたのだ。

「悪魔部、あるとしたら、多分この中だ」

頑張ろう、と拳を握り気合を入れたスミレは、ポスターと看板で

構築された廊下を力強く歩き始めた。

昨日、ケンジの噂を聞いた時は常識的な反応をしたスミレだが、決してその存在がないと、決め付けているわけではない。

この六道学園は、田舎の市を半分買い取って出来た学園だ。その広さに比例して学生も多く、そうなれば、部活の数も他校の比ではない。星の数ほどの部活があれば、その中に一つぐらい他人の願いを手伝う部活があるかもしれない。

少なくとも探す価値はある、とスミレの頭は計算していた。

部室のドアを見ては、次のドアに向かうと言う作業をスミレは、延々と繰り返す。幸い、どのドアにも部の存在をアピールするポスターが派手に貼られており、間違う心配はなかった。

比較的スムーズにスミレは部室を全て見回ることが出来た。

しかし、その成果は芳しくない。『悪部』や、『あ！熊部』、『空く間部』<sup>あくまぶ</sup>等、名前が少し似た部活が少々見つかっただけで、本命を見つける事は出来なかった。

一度、部室練の玄関まで戻ったスミレは、腕を組みながら虚空を睨みつける。

「これだけ探して見つからない、て事は、通称が悪魔部で事になるのか、やっぱりないのかどっちかだ」

進むべきか、引くべきか、スミレは暫し悩んで、答えをだす。

「これは、詳しい情報が必要だよ」

スミレは、悪魔部について詳しい話を聞いてから結論づける事にした。悪魔部について詳しく知っていて、簡単に話しそうな、ちょろい人物に一人だけ心当たりがあった。

スミレが教室に戻ると、時計は八時を回っていた。

既に半分ぐらいの生徒が、教室で時間を潰している。その中の一人、地味に勉強をしている少年に、スミレは狙いを定めた。

「ねえ、ケンジ君、昨日の話だけど、あれ誰に聞いたの？」

「は？」

開口一番、朝の挨拶以外にも色々と言葉の足りない質問を浴びせ

る。

ケンジは大口を開けて、阿呆の様にスマレを見つめた。

「だからさ、悪魔部の事、あんな噂、誰から聞いたの？」

スマレはケンジの隣にしゃがみ込み、机に手をついた。自然と身  
を乗り出す格好になる。

スマレの眼前で、ケンジは頬を赤く染めた。

「誰って、言われてもなあ。何となく、どっかから聞いたただか  
らなあ。覚えてないよ」

ケンジは眉を寄せながら答える。手持ったシャーペンが忙しなく  
回転していた。

「本当に覚えてないみたいだね」

スマレはケンジの手元を一瞥する。手元を忙しなく動かすのは、  
考え事や照れている時のケンジの癖だ。ケンジと親しい人なら誰で  
も知っている。

「でも、そんなのない、て言われて落ち込んでたよね。と言う事は、  
結構信じてたんだ、その怪しい情報」

「まあ、な。何かありそうな雰囲気だったんだよ。その話を聞いた  
時は、さ。ああ、昨日は恥かいたあ」

昨日の事を思い出したのだろう。ケンジは恥ずかしそうに、両手  
で顔を隠す。

その所為でケンジは気付かなかったが、一瞬、スマレの視線に鋭  
さが加わった。

「へえ、どんな話、聞かせて？」

スマレは何でもない風を装って、ケンジから情報を引き出そうと  
する。

「ああ、なんでも、悪魔部、てのは学園からは非公認の部活らしい  
んだ。

初代部長が、何でも出来る天才で、何でも出来ちまうから幸せ、  
てやつが分からなかったらしいんだよな。んで、幸せを観察する部  
活を作ったんだ。

まあ、その部長どこか可笑しくてさ、最後には幸せを製造しようとしてるんだってさ。

人の願いを叶える事もその一貫で、どうしたら人が幸せになるかを観察してるらしい。

だから、願いをかなえる定員は、いつも一人に絞ってる。そうしないと、観察を十分出来ない、だったかな。

それで、その初代部長は未だに幸せを作ろうとして、悪魔部の住処で悩める人間を待つてる、て話だよ」

ケンジはシャーペンを回しながら、たどたどしく話す。

スミレは、はつきりしない上に途切れがちな口調に苛立ちながらも、終始笑顔だった

「へー、嘘臭すぎない？ そんな天才の人がホントに居るの？」

話が終えたところで、スミレは適当に聞いてみる。今のところ、スミレの頭の中では六対四ぐらいの割合で、ガセネタ説が優勢だ。

「いや、この学園、全国から頭のいい子供を特待生として引き抜いてるだろ。そうすると毎年一〇年に一人クラスの天才は出て来るんだよ。その中に、一〇〇年、いや一〇〇〇年に一人クラスの天才が居たという可能性は否定できない」

ケンジは顔を不気味に歪ませながら、おどろおどろと話していく。「加えて、この学園、必ず毎年一人から二人は妙にいい目をみた奴らが居るんだ。

例えば、二年前の野球部、エースが捻挫で休んでる間に出てきた一年のピッチャーが大活躍して、そのままギョラーになった事がある。

更に三年前、それまでケツから数えた方が速いほど頭の悪かった先輩が、全教科満点を取った。

更に更に、四年前、コーラス部の副部長がスカウトの目に止まって歌手デビュー、一曲目でオリコン一〇位を獲得した。他にも」

更に、ケンジが言い募ろうとした時、廊下から地鳴りが聞えてきた。

地鳴りではない。男子高校生一人と、女子高校生一人が疾風怒濤の勢いで走行しているその音だ。

日常茶飯事となった時報に、生徒達は各々の席へ戻っていく。

「残念、話はここまでだね」

「ああ、もう時間か」

ケンジは名残惜しそうに、呟く。

「だね。面白い噂聞かせてくれて、ありがとう。話の種にさせてもらうよ」

そう言っ、スマレが立ち上がると同時に、始業のチャイムがなり、

「ぎりぎりセーフ」

「セーフ」

コウセツとエミナが仲良く、教室に飛び込んできた。二人はほぼ同時に席に座り、タオルを出して、汗をふき取る。

「さすが、幼馴染、凄いシンクロだね」

スマレはその様子を面白くなさそうに眺めた。

## 六月二日 昼

六月二日、土曜日、昼、未だに週休一日制を取っている六道学園は、昔の学校の様に土曜日は午前中で授業が終る。

「きりーつ、礼」

おさげの学級委員長がお決まりの文句で授業の終了を促すと、教師はそそくさと教材を片付けて教室から出て行った。

ドアが閉まると同時に、教室のあちこちから喧騒があふれ出す。

周囲の生徒が笑いながら遊びや部活に向かう中、スミレは黙々と教科書を鞆に詰める。鞆の中では、折り目一つない教科書が、理路整然と詰め込まれている。

最後にスミレがペンケースを鞆へ入れようとした所で、エミナが声をかけてきた。

「スミレッ」

「ん、何、エミナ？」

スミレは小首を傾げる。艶やかな黒髪が涼やかに流れる。

「ごめん、今日はちよつと用事があるんだ。約束のショッピングは、またの日にして」

エミナは両手を合わせて、スミレを拝む。

スミレは、エミナの後頭部を暫く眺めてから、軽いため息を吐く。  
「別にいいけど、エミナ、また補習？ 頭はいいんだから、ちゃんと勉強した方がいいよ」

「違うわよ！ 補習じゃなくて……ちよつと、ケンジに勉強教えてもらっただけ」

スミレの心配に、エミナは顔を真っ赤にして反論する。しかし、情けなさの度合いに変わりがない事に気づいたのだらう、後半部は声が小さくなっていった。

「へえ、コウセツ君じゃなくて、わざわざケンジ君に教えてもらって事はあ」

スミレは口元を隠して怪しく笑う。

「ち、違うわよ。べ、別にケンジなんて好きじゃないんだから」

「その反応が怪しいよ。でも、私は応援するよ」

エミナは顔を真っ赤にして、明後日の方を見る。その背後で崩れ落ちる一人の地味目な男子高校生が一名居たが、スミレはあえて指摘しなかった。

スミレの優しさの半分は見守りで出来ているのだ。ちなみに残り半分は勘違いである。

「て、これじゃ、昔の少女漫画に居る素直になれない女の子じゃない、てなにやらせるのよ、スミレ！」

自分のほった墓穴に自分から入ったエミナは、八つ当たり気味に叫ぶ。

「ごめん、ごめん、だってエミナがあんまりにも可愛い反応するから、虐めたくなつたんだよ。悪気はそんなにないから許してね」

スミレはまったく悪びれもせずには笑う。一応両手を合わせて謝った振りをしているが、まったく誠意を感じられない。

「あんたねえ。本当に性格変なところが捻れてるわよね」

「お褒めに預かり恐縮です」

人差し指でこめかみを揉むエミナに、スミレは軽く頭を下げる。

「ま、別にいいけどさ。大体、最初はコウセツに頼んだんだけど、何か用事があるって言って、断られたの。」

この可愛いエミナちゃんのお願より、大切な用事がこの世にあるなんて信じられないけどさ。

コウセツてばさ……」

エミナはスミレの机にのの字を書きながら、語りだす。スミレはこれ以上は無駄な時間だ、と判断し、話題を切り上げる事にした。

「じゃあ、シヨッピングはまた今度にするんだね」

「あ、そうね。うん、また、今度時間がある時にするわ。本当にごめんね。勝手に中止しちゃって、じゃ、また月曜！」

エミナはもう一度スミレを拝んで、ケンジの腕を取ると颯爽と走

り出した。

駆け去るエミナの背中を、スミレはにこやかに手を振って見送る。ついでに、聞えてくる地味な悲鳴にも、別れの挨拶をする。

エミナの駆ける音と地味目の悲鳴が聞こえなくなる頃には、教室にはスミレだけが取り残されていた。

「じゃあ、私も行動しますか。まずは、図書室で情報収集だ。悪魔部、その正体は私が暴く！」

勢い欲立ち上がると、スミレは艶やかな黒髪をかき上げて宣言する。

「それが私の戦いだ」

痛いほどの沈黙が、辺りを支配する。遠くから聞えてくる喧騒が、妙に白々しく聞えた。

誰もいない教室で、和風美人がモデルの様にポーズを決めている様は、痛々しいものがある。

「あう、やっぱりこういうキャラは、エミナに譲ろう」

頬にほのかな朱を灯し、鞆を胸に抱いてスミレは図書室に向かった。

殆どの生徒は校舎から出ているのだろう。図書館までの道のりで、スミレは、一、二回だけ、生徒とすれ違った。

図書室は無人だった。机と椅子が並んだ手前のスペースに人影は見えず、奥にある本棚からも人の気配が感じられない。普段はそれなりに盛況なパソコンの設置された区間や、漫画の棚からも喧騒が聞える事はない。

スミレは、入ってすぐ右手にあるある席へ向かう。

五列ほど並んだ机は、一メートル五〇センチの仕切りで等間隔に区切られていた。仕切りの中には、机と椅子あり、机の上はパソコンによって占領されている。ノートや教科書を広げるだけのスペースが申し訳ない程度に残されている。

スミレは一番奥の仕切りの一番隅の席に座る。入り口からは見えづらく、スミレからは人の出入りがしっかり見える。後ろめたい事

を行うには絶好の位置だ。

スミレはパソコンの電源を入れる。メーカーロゴとOSのロゴが、ディスプレイに入れ替わり現れ、パソコンが起動した。

その間にスミレは席を立ち、図書室の奥にある本棚に使えそうな資料を探しに行く。学園の記録関係の棚で立ち止まり、手垢が付いていない背表紙を一つ一つ眺める。

「部活関係だから、パンフレットと卒業アルバムぐらいでいいかな？」

スミレは去年の卒業アルバムと学園創立以来の全パンフレットを棚から引き抜く。

スミレの通う六道学園は、まだ創立十年も経っていない新設の学園である。しかし、一学年、一〇〇〇人を超える生徒数は他の追隨を許さない。

当然、卒業アルバムも厚い。そう、去年の卒業アルバムが、広辞苑の様に厚く、映画のパンフレット並の大きさであった事は偶然ではない。

運動神経が良いわけでも、運動部に所属しているわけでもないスミレは、重い卒業アルバムを覚束ない足取りで運ぶ。右へ左へと、危なっかしい足取りで何とかパソコンの前に戻った。

大きな音をたてて卒業アルバムを机の上に置かれた。

思った以上に大きな音に、スミレの呼吸が止まる。図書館の入り口を凝視するが、誰かが入ってくる気配はない。

「ふう」

安堵のため息が漏れる。

八つ当たりをするようにスミレが表紙を軽く叩くと、硬質な感触が返ってきた。どうやら、表紙が折れないように鉄板が仕込まれているようだ。

「何の嫌がらせなんだよ」

再度、卒業アルバムを叩くと、金属特有の高い音が鳴った。明らかに本から出てきてよい音ではない。

軽く深呼吸をして息を整えたスミレは、パソコンに向いブラウザを立ち上げる。

「ぐーぐるさんへ、れつつごお」

スミレは軽快なブライントタッチで、URLを直接入力すると、検索サイトへと飛ぶ。キーワードに六道学園、悪魔部と入れて、検索を始めてみた。

「ヒット数は、三万件。そんなにあるんだ」

表示されたヒット数の多さに驚きながらも、スミレは心臓の鼓動が早まる事を自覚する。先ほどもまでは、あれば面白いぐらいで考えていたものが、情報源の多さを見る事で少しづつ現実味を帯びてきた。

スミレは検索順位の高い、一番上のサイトから順次調べていく。時折、ブラウザが処理落ちした時に、卒業アルバムを調べる。部活関係のページや生徒の文集の中から関連のありそうな部分を探す。空が紅に染まり、太陽がルビーの様に輝く夕暮れ、終業のチャイムが校内に鳴り響く。

その音で、作業に没頭していたスミレも顔を上げ、時計に視線を移した。時計の針は長短二つとも四と五の間を示している。

四時二二分だ。

「ん、結構頑張ったね。頭がオーバーロードしそうだ」

スミレは少々過熱気味の頭を冷やすように大きく息を吐くと、大きく背を伸ばす。形の良い乳房が強調されるが、もったいない事に図書館にはスミレしかない。

スミレはパソコンの電源を落として、席を立った。

卒業アルバムの類は、軽く目を通したところで役に立たないと判断し、随分前に片付けている。

スミレはポケットに入れたメモ帳を取り出し、記憶に刻み付ける様に小声で読む。

「悪魔部について、

一、悪魔部は正規な部活ではない。悪魔部の名前は通称、もしくは

は学園に無登録のゲリラ部の一部である。

二、活動は昼休みに不定期に行われる。

三、活動場所は扉に赤いビニールテープを張っている部室。部室練にあるらしい？

四、願いの依頼料や発足時期、活動目的なんかは全部不明……と言うか、都市伝説みたいな感じに噂だけが飛び交ってた。

うーん、やっぱりガセネタなのかな？」

四時間近くの成果に目を通して、スマレは唸る。

生徒による裏BBSやアングラ系のHP等、簡単に手に入る情報は殆ど目を通した。

その結果、スマレの中で悪魔部は、あるかもしれないが、常識ではなさそうな気もする、と言う幽霊やUFOと同じ区分にカテゴライズされている。

これ以上調べる労力が成果に見合うのか疑問に感じている。

もし、これ以上調べるのなら、後は地道に人に聞くか、学園内を風潰しに探すしかない。そこまでの労力をかけるか、どうか、それが問題だ。

スマレは眉間にしわを寄せたまま図書室を出て、家路に着く。

その間も唸り続け、結局スマレの眉間からしわが消えたのは、寝る直前、ベットに入った時だった。

六月十三日

六月十三日、月曜日、昼休み、コウセツと一緒に食べよう誘うとスミレを誘った。

用事があつたスミレは断腸の思いで断ると、教室を出た。廊下に溢れる人並みに乗って、スミレは校舎の外へと出る。

人の波からはずれ、並木通りにそって歩き続けた。窓に大量のポスターが貼られた部室練が現れる。

先週と変わらず、校舎の周りにはガラクタが放置されており、文化祭直前独特の空気が漂っている。

以前と変わらぬ佇まいに、スミレの心臓が強く鳴り響いた。スミレは大きく息を吸い込むと、自身の両頬を叩いて気合を入れる。

景気の良い音が響き、スミレの両頬が赤く腫上がる。

「痛い。やりすぎた」

目尻に涙を浮かべたスミレは、赤くなった頬を摩りながら部室練へ足を踏み入れた。

懐からメモ帳を取り出し、悪魔部についてと書かれたページを開く。

「悪魔部の目印は赤いビニールテープだったよね」

スミレは自分に言い聞かせる。

スミレには、どんな犠牲を払っても叶えて欲しい夢がある。しかし、有るかどうかも分からない悪魔部を全力で探している間に、夢が誰かに掠め取られては本末転倒だ。

スミレは土曜日中ずっと悩み続け、明後日の月曜日に探してなかったら諦めよう、と決めた。

非情に日本人的な曖昧模糊とした煮え切らない結論だった。

スミレは部室のドアを一つ一つ見ていく。一階、二階と下から順次探していくが、どのドアにも赤いビニールテープは張られていなかった。

「やっぱり、ガセかな」

三階まで探し終えたところで、スミレの心臓は限界ギリギリの鼓動を刻む。

心境は、落ちていると分かっている大学の合格者発表に行く学生と同じだ。常識的な結果は分かっているのに、もしかしてと期待を胸に膨らませてしまう。

四階の廊下を端から順次歩いていくが、赤いビニールテープはない。

途中、黄色や緑、青などのビニールテープで彩られたテープ部という部屋があり、そりやテープ、ぶじゃなくてぶ、と小さく突っ込んだ以外、特筆する事はなかった。

「これは最後の五階に期待かなあ？」

いささか諦めの入った心持で、スミレは最後のドアを確認する。

「ほら、やっぱり赤いテープが……ある。じゃあ、五階に行こう。」

この分だとやっぱり、ただの噂だったのかなあ」

大きく肩を落として、五階に向かおうとしたスミレは立ち止まり、鬼気迫る顔で最後に確認したドアに駆け戻る。

女の子とは思えない荒い足音が廊下に響くが、気にしている余裕はなかった。

荒い鼻息を隠そうともせず、ドアに張り付いた赤いビニールテープを凝視する。震える指でテープをはがすと、その色が赤である事を何度も何度も確認した。

「あ、あった。悪魔部は本当にあったんだ。凄い、本当にあったんだ」

スミレはドアから一步下がり、部屋のネームプレートを探すけどにもない。それどころか、今まではどのドアにも張ってあったポスターも貼られていなかった。

この場所だけが、騒々しい雰囲気が満ちた部屋練において異質だった。

異質な雰囲気スミレの興奮は冷やされていく。

スミレはドアに手をかけた所で、固まる。

このまま開けていいのだろうか。開けてしまえば、何かが終る、そんな予感が胸中にわだかまる。

唾を飲む音が、やけに大きく聞えた。

「私の思いは、間違つてない。この思いは間違いじゃない」

スミレは大きく息を吸い込むと、ドアを開ける。ドアは拍子抜けするぐらい静かに、抵抗もなく開いた。

「おじゃま、します」

スミレは恐る恐る部室に入ると、後ろ手でドアを閉めながら辺りを見回す。

部室は外から感じていたより狭く、四畳半程の大きさしかない。チリーっ見当たらない床の上に、机が一台置かれている。机の上にはスピーカーがある。

監視カメラが部屋の隅に見えたが、防犯用監視カメラは学園内全域に設置されている。生徒が自由に歩く部室にあっても珍しいものではない。

中にはそれしかなかった。部屋の中は無人だ。

スミレの他は誰もいない。机とスピーカーしかないこの部室に隠れる事ができる場所はない。

「誰かの悪戯だったのか。はあ、無駄足だったよ。コウセツ君のご飯……」

肩を大きく落としたスミレに、スピーカーが声をかけた。

「ようこそ、名も知らぬ隣人」

スピーカーから発せられる声は、ボイスチェンジャーを使用しているのか、妙に甲高く機械的な声質だ。

「ここがなにか、今がどの時か、それは問わない。ただ、聞こう。隣人、叶えたい願いは何だ？」

「え、声？」

非人間的な音が、日本語を使用している事に気付くまで、スミレは数秒の時間を要する。

「願いは何だ？」

スミレの様子などお構いなしに、スピーカーはもう一度聞く。得体の知れない不気味さを感じ、スミレの足が半歩下がった。しかし、心を奮い起こさせ、その場に踏みとどまる。

しばしの躊躇い後、スミレは口を開いた。

「私、私は大さ」

「名前はいらない」

スミレが名前を名乗ろうとするが、スピーカーが遮る。

出鼻をくじかれてしまったスミレの頭は、真っ白になってしまう。隣人、君の願いが何であれ、君自身に興味はない。お互い、名も顔も知らない。それでこそ、安心して願えるものだ。そして、こちらも全力を尽くせる」

やんわりとした拒絶の言葉が、スミレの頭に浸透する。少しずつ、固いものを食べるように、スミレは言葉の意味を噛み砕く。

「別に、私は知られていいんだけど、どうせ願えば分かっちゃうしね」

「願いは何だ」

スミレの事を無視して、スピーカーは願いを要求する。

録音されたテープを再生させてるんじゃないだろうか、と言う疑問が、スミレの脳裏を掠める。

「それはないよね」

先ほどまでのやり取りを思い出し、スミレは首を横に振った。スミレの名乗りを邪魔したタイミング、あれは事前に準備できるものではない。

「願いは何だ」

スピーカーの声が急かす様に、同じ台詞を吐き出す。スミレはスピーカーので背筋を伸ばして仁王立ちすると、手を後ろで組み、願いを口にする。

「私の願いは、二年九組の雪村 コウセツ君を、二年九組大崎 スミレの恋人にする事だよ」

スミレは徐々に赤くなる頬を隠そうともせず、その場に立ち続ける。ここで逃げたら何か負けだ、と叫ぶ直感に従い、顔がトマトの様に赤くなっても、姿勢を崩さない。

「期限は？」

スピーカーは機械的に聞いてくる。

「いつまで雪村コウセツと大崎スミレを恋人同士にする？」

「死ぬまで、死ぬまでずっと、恋人同士でいたい」

スミレは自分でも驚くほど速く、スピーカーの問いに答えを返す。胸から溢れ出た想いは本物だった。

初めて会った時からコウセツに抱き続けていた想い。

今までは、妄想でしかなかったが、言葉にすると重みが増したように感じる。妄想にはない現実の重さだ。その重みを心地よく受け止めながら、スミレは答えを待った。

「……恋の成就是、古来よりいくつもの方法と妨害が生まれてきた。すぐに答えは出せない、一週間後に来い。それまでに、その願い考えておこう」

「えーっ、それは酷くない。ここまで引っ張っておいて」

好物の餌を食べる直前におあずけされたネコの様に、スミレは不平をもらす。この場で答えも結果も貰えると思っていたスミレに、スピーカーの答えは納得できない。

「せっかく、来たんだから、せめて今週中にできないの？」

頬を膨らませたスミレは、スピーカーに不満をぶつけるが、答えはない。

スピーカーは沈黙を保ったままだ。再び喋りだす気配はなかった。数分間、スピーカーを睨み続けていたスミレだが、大きなため息を吐くと立ち上がる。

「はあ、仕様がな、帰ろう」

スミレはスピーカーに背を向けると、部室から立ち去ろうとドアに手をかける。

ドアに手をかけたまま、後ろを振り返り

「一週間後の六月二〇日、絶対に来るから、忘れないでよ」  
スピーカーに向けて念を押す。

スピーカーは何も答えない。沈黙したままだ。

「絶対だよ」

スミレは沈黙するスピーカーを放っておいて、教室へ向けて歩き出す。その足取りは、羽が生えた様に軽かった。

六月二〇日

六月二〇日、月曜日、昼休み、悪魔部初訪問から丁度一週間、スミレは再び赤いテープの貼られたドアの前に佇む。

「失礼しまあす」

スミレはドアを開け、無造作に中へ入った。

まるで自分の家に帰るような気安さにみえる。しかし、頬は高潮し、膝が震えている。

部室の中には、先週と同じく、机とその上にスピーカーが設置してあるだけだ。四畳半ほどの部室に他には何も置かれない。

天井を見上げれば、監視カメラが見つかるだろう。

「ようこそ、名も知らぬ隣人」

スミレがドアを閉じると同時に、スピーカーが喋る。ボイスチェンジャーを使ったように甲高く機械的な声質だ。

「私、一週間前の昼休みに、願いをしに来ただけど、覚えている？」

「ああ、覚えている。二人の生徒を死ぬまで恋人にする事だったな？」

「うん」

スピーカーからの確認に、スミレは頷く。

「その願いをかなえるには、恋人にしたい生徒のどちらか片方がある事をしなくてはならない」

スピーカーが話し始める。

スミレは欠片も聞き逃さないよう、スピーカーに全神経を集中させた。

何をさせられるのか不安だが、盗みや動物を生贄にする位なら躊躇うつもりはない。悪魔部と呼ばれるような事をやってる連中に願いを叶えて貰うのだ。それぐらいの覚悟は、既につけている。

「ある事とは、告白だ」

スピーカーの言った方法に、スミレの強張った体がほぐれる。

「それでいいの？」

スミレは不信そうな表情で尋ねる。

恋人になるには告白しなくてはいけない。

あまりにも常識的で現実に沿った方法だが、それが出来れば苦労はしない。

告白は、失敗の許されない過酷なミッションだ。失敗してしまえば、どれだけ好きでも、その想いは受け取ってもらえない。それどころか、今の関係すらも壊してしまう。

それなのに告白しろと言う悪魔部に、スミレは大丈夫かと不安になってきた。

「ああ、ただし、場所や方法はこちらの指定に従え」

それが、願いをかなえる鍵となるのだろう。有無言わさぬ迫力があった。

「場所や方法があ。おまじないでもするのかな？」

「それに近い」

スミレの何気ない一言に、スピーカーが応える。

「今回使う呪術は、無知と暴力を司る神の僕、タローマティとジャヒーの力を借りたものだ。

現存するアヴェスターによれば、これらとは対となる神やその眷属がいる。

対となる神は暦に対応している。

対応している日に、呪術を使えば、途端に神が舞い降り、お前の」

「す、ス、ストッパー！」

まだまだ続きそうなスピーカーの怪しい呪術講習を、スミレは遮る。いつ終わるか分からない怪しい話で貴重な昼休みを消費したくないだ。

「とにかく、そっちの指示通りにやれば成功するて事だね」

「端的に言えば、その通りだ」

スピーカーは、何処かつまらなそうに言い捨てた。

「で、どうしたらいいの？」

スマレは、二度と怪しい宗教言語を飛び出させない様、具体的方法の提示を促す。

「二日後、六月二二日、放課後、校舎裏で告白させる。詳しい場所は机の中に地図がある、それを見る」

スピーカーの説明に従って、スマレは机の中を覗きこむとA4の紙が一枚入っていた。紙には、スマレ達の通う高等部の地図がコピーされており、校舎裏の一面に蛍光ペンで丸がつけられていた。

「相手への誘いは、二二日、告白当日の昼休みに、メールで行うように指示しておけ」

スマレが地図の位置を確認する間もなく、スピーカーは矢継ぎばやに告白の方法を指示する。

「題名は無記名、本文は、『放課後、校舎裏に来て欲しい。話したいことがある』だ。以上、正しい遂行と成功を願う。では」

スピーカーから電気が切れる独特の破裂音が響く。

スマレがスピーカーに耳を寄せるが、何の音も聞こえてこない。完全に切れてしまったようだ。

「ちょ、ちよっと、待つて。場所は地図の所、時間は明後日の六月二二日放課後、呼び出しは当日の昼休みにメールで送る。メールの内容は、『放課後、校舎裏に来て欲しい。話したいことがある』でいいの？ 確認ぐらいさせてえっ」

スマレはスピーカーを両手で持ち、上下左右にシェイクする。腕のねじりも加えた見事なハードシェイクだ。これならば、バーテンダーとしても食べていけそうなほど、見事な腕前である。

艶やかな黒髪を振り乱し両手に持ったスピーカーをシェイクする和風美人と言う、狂気の構図に思うところがあつたのか、スピーカーの電気が再び繋がった。

「それでいい。それ以上、振るな。大人しく病院に帰れ。端的に言うとの精神病患者だ隣人」

「ははは、恋の病は精神病じゃないよ。それじゃ、幸せになるから

ね」

スミレはスピーカーを放り投げると、早足で部室から出る。

「あれ？」

部室を出て数歩歩いたところで、スミレは立ち止まった。何かありえない事があった気がしたのだ。

スミレは瞼を閉じて、思考の海へと自身をダイブさせるが、何がありえなかったのか思い出せない。一分ほど、脳神経を活発に動かしした後、スミレは一つに結論に達した。

「ま、いつか。思い出せないって事は、たいした事じゃないよね」  
一人で納得すると、スミレは早足で歩き始める。

既にスミレは現実の場所で、ありきたりな願いを必ず叶える、方法を手に入れたのだ。多少の違和感は気にする事ではない。

軽い足取りで、スミレは教室へと戻った。

六月二二日

六月二二日、水曜日、放課後の校舎裏、人気のない一画にスミレは居た。緊張と不安で小刻みに震えている。

悪魔部でいわれて通り、スミレは昼休みにメールを出している。文面も、一言一句間違えてはいない。

成功すると保障されている儀式だが、後戻りの出来ない一発勝負に、平静ではいらなかった。

「ほ、ほ、ホントに、だ、だ……だめ、じゃなくて、大丈夫なんだよ、よ、よよね」

スミレは自身の送ったメールの文面を何度も確認して、大丈夫上手くやってる、と言いつ聞かせる。

しかし体の震えを治まらない。

「あ、あ、あ、悪魔、部の、言うとおりにしたんだから、大丈夫」自身を鼓舞するように、震える足を地面に叩きつけた。体中の震えが治まる。

携帯電話を胸に抱き、スミレは大丈夫と心の中で言いつづけた。でも、とスミレの口から不安が漏れる。

「悪魔部を信じてよかったのかな？」

スミレの不安に答えてくれる人はいない。

「と言うか、あんな噂に踊らされてここまでやっちゃうなんて、馬鹿かも、私」

この数日間の行動を思い出し、スミレは両手で顔を覆う。

耳まで真っ赤に火照らせて、スミレは羞恥と後悔でもだえ苦しむ。スミレの背中にかかる程長い髪がのた打ち回り、身体を怪しげにくならせる。

気が済むまで、身体をくねった所で、スミレは両手を顔から離れた。

「と、とにかく、やっちゃた事は仕方ないんだよ。き、き、き、今

日、私はコウセツ君の恋人になるんだ」

スミレは胸に手を当てると、大丈夫、と小声で自分に言い聞かせ続ける。

息遣いは荒く、必死に酸素を貪る唇は青色に染まっている。

土踏む音が聞えた。音は次第に大きくなっていく。

誰かが近づいてきている。

乱れた髪を整えようとポケットに常備している手櫛を取り出そうとするが、指先が振るえうまく握めない。

手櫛がポケットから零れ落ちた。

スミレは慌てて手櫛を追いかける。しかし、焦りすぎていたのだろう、つま先で櫛を蹴ってしまった。

手櫛は回りながら、地面を滑る。

スミレの視線が手櫛の軌道を追いかけて、白い清潔感溢れるスニーカーに行き着いた。

胸が大きく鼓動を打つ。胸が破裂してしまいそうなほど、激しく強い。

爪先まで綺麗に磨かれている指が手櫛を拾った。スミレの瞳は手櫛に合わせて、上へ向かう。

そして手櫛を拾った相手の顔を見た。

清潔感有るこざっぱりとした印象の少年だ。瞳が大きく、輪郭も柔らかい。良く言って童顔、悪く言えば女顔の少年である。

少年の顔を見た瞬間から、スミレの体中で血液が暴れまわる。汗腺のバルブが壊れたように汗が止まらない。

「こ、こ、コウセツ君！」

スミレは少年の名前を、裏返った声で叫んだ。

「はい、スミレさん」

少年、コウセツは手に取った手櫛を笑顔で突き出す。

「あ、あ、ありがとう」

スミレは大切な宝物を貰うように両手で手櫛を受け取ると、胸元に抱きしめる。

ほのかに宿るコウセツの温もりを逃がさないように、手櫛を両手で覆い尽くした。

「大切なもののなの？」

「え、あ、う、うん」

コウセツの問いに、スミレは真つ赤になって頷く。口が小さく、たった今から宝物だよ、と動いたが、コウセツは、そうなんだ、と気のない相槌を打つただけだ。

「ありがとう、コウセツ君」

スミレは、蕩けるような笑みをコウセツに向けた。

「別に大した事してないよ。それより、話したい事って何？」

照れたように頬をかきながら、コウセツが笑う。

「え、えとね。その」

手に持った手櫛をいじりながら、スミレは懸命に言葉を紡ぐ。

「こ、コウセツ君、す、す、す、すす、水曜日に家に来ない？」

この前言ってた『風邪と共にちり紙』のDVD買ったんだ。一話から一六四話まで、親がはまっちゃて」

スミレは乾いた笑みを浮かべたまま、まったく関係ない話を振った。

スミレの頭の中はオーバーヒート、今日が水曜日である事も忘れて去っている。

「え、あれ買ったんだ！ DVD四一枚セットで六万円の格安セツト！」

コウセツが目を輝かせた。

「いいなあ。」

ぜひ見せてよ。風邪ちりの四五話、『権兵衛、緑の狸になって山南さんに覗きを決行する』、あれが好きなんだよねえ。

特にカップ麺に扮装した権兵衛を妖怪と間違えた仲間がさ、山南の風呂を覗くとは切腹よく、て陽気に歌いながら、目を血走らせて山狩りしてる所がすごく馬鹿らしくてね」

コウセツは楽しそうに、風邪ちり話を始める。

スミレは心の中で、違うよ、と自分に突っ込みながら、話を合わせた。

「あ、うんうん、その後でさ、妖怪じゃなくて権兵衛だって分かったら、今度は志道不覚悟切腹よ、て歌いながら近藤さんが介錯しようとする所も、バツクで誠を着た皆がうらやましー、うらやましー、嫉妬の炎が胸を焼くー、てコーラスしてる所も凄いいよね。何でコーラス?! と言うかぶっちゃけすぎだよ、てねえ」

「そこに目をつけるとは、流石スミレさん。で、そのままコーラスがエンディングの曲になって、最後、ホントに首切っちゃうんだもん。ビックリしたよね」

「うんうん、特に介錯した首から血が湯水のように出て、首がどんどん青くなる様なんて、ホントに人を殺したのか! て大騒ぎになったぐらいだし」

「次の回では最初に、前回のこのシーンは全て特殊メイクで行っており、本人はこの通り生きております、て字幕が出てさ。」

権兵衛役の人が、農民ルックで出て来る程やばかったからね。今でもあの権兵衛は双子説て言うのが」

「あるある。風邪ちりファンの定説みたいなもの……て、違うよ!」スミレはコウセツの前に掌を突き出して、まったく関係ない風邪ちり話をやめようとする。

「え、違っただけ?」

コウセツは首をひねるが、直ぐに笑顔に戻った。

「あ、スミレさん、実は先に農民ルックを撮影していた説派? 残念だけどそれはないよ。」

その後、一〇〇話の『原点回帰、ドキ山南さんのハアハア稽古』の、最後のほうで走って転んだ魚屋さんが権兵衛役の人だったからね。

ちゃんとスタッフフロールに出てたし、スミレさんもまだまだだなあ」

コウセツが朗らかに笑う。嫌味や馬鹿にした所のないさっぱりと

した気持ちのいい笑顔である。

本来ならずと見ていたいスマレだが、今はそういう訳にもいかなかった。

「うっん、そうじゃなくて、私の話したいことは別にあるの」

スマレは、じつとりと汗をかいている手を握り締めて、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

体が固くなって、歯の根が合わない。

断られた時の恐怖と戦いながら、スマレはコウセツの瞳を見つめる。いつもと変わらない澄んだ瞳が、スマレの視界を埋め尽くした。

「あ、あの、すすす」

「スマレさん大丈夫、何か唇は真っ青で顔は赤いし、様子も可笑しいよ。もしかして風邪？」

コウセツの手の平が、スマレの額を覆う。

それが起爆剤となり、スマレは爆発した。

「好きです。ずっと前から、好きです。私と付き合ってください！」  
叫ぶと同時にスマレはコウセツの首に抱きついた。コウセツを思いつきり抱きしめる。

これがコウセツの温もりを知る最後の時になるかもしれない。そう想うと、腕の力がいつそう強くなった。

「スマレさん」

コウセツがスマレを呼ぶ。スマレの肩が震えた。コウセツは震える肩を掴むと優しく引き剥がす。

「あ」

名残惜しそうにスマレの指がコウセツを求めようとするが、うなだれる。

抱きしめ返されなかった。この時点で、もう答えは決まってしまう様なものだ。

自然とスマレの瞳に涙が溜まる。

「スマレさんの気持ち、凄く嬉しい」

コウセツは真剣な顔でスマレを見つめる。

スミレはぼやける視界の中で、コウセツの瞳を髪を忘れぬよう、目を凝す。もう、気まずくて真っ直ぐ見れないであろう顔を、これが最後と自分を騙して見続けた。

「僕も好きだ。付き合おう」

スミレはコウセツに力強く引き寄せられ、抱きしめられた。

しばし呆然と空を見ていたスミレの瞳から涙が溢れ出る。

「嬉しい。ずっと、ずっと前から、初めて会った時から好き。好き、大好き」

スミレはコウセツの背中を掻き毟る。情熱的に、しかし優しく掻き毟った。

「僕も、好きだよ」

スミレの想いにコウセツも応える。

どちらからともなく、二人の顔が近づく。

お互いの顔を瞳いっぱいにし、唇同士が触れ合った。唇の感触を刻み付けるように、吐息や唾液を貪るように、情熱的な口付けが続けられる。

その間も、スミレはぐぐもった声で、好き、好き、とうわ言の様に囁き続けた。

コウセツの手がスミレの髪を梳く。その度に、スミレの身体は電気が走ったように震えた。

次第にスミレの瞳は焦点を失い。コウセツの行為に身をゆだねて行く。

途中、何か物音が聞えたような気がしたが、スミレは口内から与えられる悦びに夢中で気付かなかった。

スミレが自分の身体を支える事が出来なくなった頃、コウセツは唇を離れた。二人の舌をつなぐ銀色のアーチが出来上がる。

「それじゃ、スミレさん、一緒に帰ろう」

「あ、はい」

体の芯くすぶる熱と疼きを感じながらスミレは従順に頷くが、足に力が入らずコウセツにしな垂れかかったままだ。

コウセツはスミレを抱えたままゆつくりと歩きだす。スミレはコウセツの温もりを感じながら、幸せそうにほお擦りをした。

六月二八日

六月二八日、火曜日、スマレがコウセツと恋人同士になってから六日後の放課後、教室には胸がム力つくほどの甘ったるいピンク色の空気が充満していた。

クラスメートは無言で机の中のを鞆に投げ入れ、足早に去っていく。木、金、土、月曜日の四日間、甘ったるい空気に当てられた思春期の少年少女達は、一刻も早く正常な空気を吸って、精神をニュートラルに戻したいのだろう。

甘い空気の発信源たる少女は、クラスメートの様子を無視して、鼻歌を歌いながら鞆に教科書を詰めていく。体中でリズムを取りながら、拍子に合わせて鞆を閉じる。軽快な音が鳴る。

少女は鞆を手に取ると、足取り軽く愛しい恋人へ近づいた。艶やかな黒髪が春風に吹かれたように揺れ、満面の笑顔が真夏の太陽以上に輝く。

恋人の前に立った少女の顔が蕩ける。

「コウセツ、一緒に帰ろ」

少女、スマレは、恋人、コウセツを誘った。四日前、恋人同士になってから、二人だけで帰ると約束したのだ。

「うん。ちょっと待てて、スマレ。もう少しで全部入れ終るからね」

コウセツは比較的ゆつたりとした動作で、机の中のを鞆に詰め込んでいく。

スマレは期待に目を輝かせながら、机の横で待つ。散歩前の犬のようだ。尻尾がついていたら、勢いよく左右に振っているだろう。

身体をそわそわと揺すりながら、時々思い出したように顔を緩ませるスマレを横に、コウセツは鞆を閉じた。

「お待たせ、じゃ、行こうか」

「うん、うん、今日も二人つきりで一緒に帰ろうね」

誰もいなくなった様に思える教室の隅々まで届く声で、スマレが

宣言する。

教室の隅で地味目のうめき声が聞えた気がしたが、スミレの耳には届かなかった。

「たまには、ケンジ誘わない？」

爽やかな笑顔でコウセツは、友人の名を出す。コウセツが一瞬だけ教室の隅に、哀れみの視線を向ける。

「えー、二人つきりで帰ろうよ。それともコウセツは、ケンジ君がいきなりコウセツを気絶させて私をレイプしようとしても良いて言うの？！」

スミレは酷い答えを返した。

手に持ったハンカチで乾いた目元を拭きながら、鼻を吸る。

「ケンジにそんな派手な事はできないよ。それより、嘔泣きはやめようよ」

「コウセツ、それ結構酷いよ。まあ、ケンジ君ならそんな感じだけど」

自分の事を棚に上げてスミレは同意した。

二人を肩を寄せ合うような距離を保って歩く。

スミレの右手とコウセツの左手は控えめに絡められており、ピンク色の空気の中で絡まりきらない指だけが、初々しく感じる。

スミレは脳みそが溶け落ちるほどの幸福感に満たされていたが、それは長く続かなかった。

正門前で、二人の前に少女が一人立ちふさがる。

二人が良く知っているクラスメートだ。しかし様子が尋常ではない。目は暗く濁っており、目の下には隈が出来ている。髪は乱れ、頬が乾ききり、生気が感じられなかった。

「エミナ」

スミレとコウセツは同時にクラスメートの名を呼ぶ。二人の前に立ちふさがったのは、スミレの友人でコウセツの幼馴染であるエミナだ。

エミナは無言で二人に近づくと、コウセツの手を掴む。

「コウセツ、ちょっと来て」

そのままコウセツをつれて校舎へと戻ろうとする。

「お、おい、ちょっと待てよエミナ」

コウセツは震える声でエミナを止めようとするが、止まらない。  
尋常でない様子に、スミレはどうするか迷う。

ここ数日、エミナは可笑しかった。あきらかにスミレを避け、そして一日毎に生氣と明るさがしぼんでいく。何かあるのは明白だった。

幼馴染のコウセツにならその何かを話すかも、と思うと、スミレは安易にとめる事が出来ない。

これがエミナが出す最初で最後のSOSかもしれない。

それに何より、はつきりさせるなくてはいけない事は、はつきりさせた方が良いのだ。

「あなたの為に、場所を変えてあげるの。大人しくついて来て」

「そ、そんな勝手な。話なら家で聞くよ」

「今！ 今必要なの、お願いあたしを困らせないで」

エミナの目に一瞬危険な光が灯る。

「わ、分かったよ」

その光を感じ取ったのだろう、コウセツは素直に頷き、エミナに従った。

「スミレさん、そういう事だから、ちょっと待っててね」

コウセツはエミナに連行されながらも、スミレに笑いかける。

「うん、待ってるね、コウセツ」

笑顔で応えたスミレは、エミナとコウセツの背中が校舎の中へ消えるまで見送る。スミレは彫像の様に毛筋ほども動かなかった。

二人の姿が校舎に消えてから一分たった時、スミレは校舎へ歩き出した。

「コウセツ、嘘ついてごめんね」

スミレは変わらない笑顔のまま、早足で歩き続ける。まるで地面を滑るような歩行で、生徒玄関まで到着した。

「だけど、エミナは友達でコウセツ君は私の恋人なんだから、全部を知る必要があるの」

素早く靴を履き替えると、廊下に躍り出る。鋭い視線を左右に向け、コウセツとエミナの痕跡を見つけようとしたが見つけれない。「これぐらいは、予想通りだけどね」

スミレは迷うそぶりを見せず、歩き始めた。

校舎の半分は特別教室で、残り半分に各クラスの教室等がある。

この時間、まだ自教室やその周辺に残っている生徒もいる。エミナはコウセツと二人きりで話したかったようだ。わざわざ、人のいる方へ行く事はないだろう。

スミレは特別教室へ足を向ける。一階から順番に早足で回る。

しんと静まり返った廊下の隅から話し声が聞こえた。美術室からだ。

美術系の部活はそれぞれ専用の部室を持っている。ならば、ここから聞こえてくる声は、本来いてはいけない生徒の声だ。

「正解」

スミレは猫の様ににんまりと笑うと、ドアの隙間から中を覗く。

そしてあまりの事態に固まってしまう。

美術室では、二人の生徒が抱き合っていた。二人は頬を染め、スミレからでも感じ取れるほど熱い吐息を放っている。

とても熱々なカップルに見える。

昨今の男女交際を考えれば、多少情熱的だがまだ不純とはいえないレベルだ。

ただ問題は、抱き合っている二人がどちらも男子生徒だったことだろう。

スミレは無言でドアから離れ、搜索を再開する。しかし、抱き合った男子生徒二名以外、誰もいなかった。

「現実には甘くないよね。私、名探偵じゃないしさ」

スミレはいじけた様に呟きながら、生徒玄関まで戻る。すると、地味目の生徒の背中が目に入った。

地味目の生徒は上履きを下駄箱に入れようとしている所だ。

「ケンジ君、今帰りなんだ。今日は珍しく遅いね」

「別に、ちょっと教室で……まあ、黄昏れてたら、コウセツとエミナさんが来て追い出されただけだよ」

ケンジは気まずそうに視線を逸らしながら、ぶっきらぼうに応える。

「それより、スミレさん、久々に一緒に「ありがとう、ケンジ君」

ケンジの声を遮って、スミレは跳ねるように教室へ向かう。

「あ、待てよ。話の途中」

スミレの後ろから、特徴のない足音が追いかける。スミレは階段を登りきったところで、後ろを振り返った。

「ケンジ君、私、ちょっと用事があるんだ。先、帰ってて」

「それなら、俺も付き合うよ。どうせコウセツとエミナさんの様子を見に行くんだろ」

ケンジの口の端が釣りあがる。

何かを嘲笑う様なケンジの様子に、スミレは眉を寄せながらも、特別な反応を返さない。

「じゃあ、邪魔だけはしないでね」

スミレは言いたい事だけ言っと、足音を立てないよう慎重に廊下を進んだ。人気のない廊下に、スミレとケンジの息遣いが染み渡る。教室に近づくと、男女の声が聞えてきた。会話の内容は分からないが、どちらの声も陰があり、友好的な状況ではなさそうだ。

教室前まで来たスミレは、中腰でそつとドアに耳を当てた。

「……から、……い」

「別に……じゃ……だろ」

教室に居る二人の声が途切れ途切れながらも聞えてくる。どちらも聞き覚えのある声だ。男はコウセツ、女はエミナで間違いない。

ケンジもスミレの隣に来て、ドアに耳を当てた。

「……い、……そん……」

「じじ……ろ……い……」

ケンジがスミレへ顔を寄せた。互いの吐息が感じ取れるほど顔が近づく。

「良く聞えない。ドアちょっと開けるか？」

ケンジが囁いた。

スミレは顔にかかるケンジの吐息から身をそらせてから、答える。

「駄目、多分気付かれるよ」

スミレはきつちりと閉まったドアを見上げる。

防音、保温性をあげる為に、ゴム製のキャップがドアの縁に張り巡らされている。ドアを動かせば、キャップの外れる音が漏れる事は必至だ。

「このまま聞くんはないよ」

スミレは悔しそうに呟くと、ドアの向こうに耳を澄ませる。

同時に、ドアの向こうで何かが倒れる音が鳴った。

「何よそれ！」

エミナの叫び声が、ドアを振るわせる。

スミレは自分が怒られたように肩をすくませた。

「私の処女奪ったくせに！」

ドアを隔てて聞えてくる悲痛な叫び。泣いているのだろうか、声が少し籠っていた。しかし、聞き間違えるほどではない。

「え？」

スミレは目を見開いてケンジを見る。

ケンジは気まずそうに目を逸らした。

ケンジも同じ様に聞えたのだろ。いや、もしかしたら、もっと前から知ってたのかもしれない。

中ではコウセツが何かを喋っていたが、声のボリュームが小さすぎて殆ど聞えてこない。

スミレは焦点の合わない瞳で立ち上がると、ドアを開いた。

教室の真ん中で対峙していたエミナとコウセツが、スミレの方を振り向く。

二人は驚いたように顔を強張らせた。

しかしその後の反応は対照的だ。ドアを開けた人物がスマイレだと分かった、エミナはスマイレを見下した勝ち誇った笑みを浮かべ、コウセツはどこか諦めと焦燥の入り混じった表情を作る。

「あは、あははははは」

凍りついた教室に、エミナの笑い声が響く。心底楽しそうに、愉悅に酔った様に、腹を抱えて笑っていた。

「ごめえくん、コウセツう、ばれちゃったね、えへ」

不気味な猫なで声で、エミナはコウセツの体に抱きつく。これは自分のものだ、と主張する子供のようだ。

「スマイレもごめんね。本当はもっと早く言わなくちゃいけない事だったんだけど、スマイレがあんまりにも幸せそうで、哀れだったからさ、言えなかったんだ。本当に、ごめんね」

満面の笑みを浮かべて、エミナは嬉しそうに語る。

スマイレは無言で、教室に入った。

最短距離でコウセツとエミナに向かって歩き出す。途中、椅子や机に足が当り、いくつかが倒れてしまいが、まったく気にした様子がない。

エミナは暫く笑い顔でスマイレの行動を眺めていたが、スマイレが自分達に近づくに従い、表情が消えていった。エミナの濁りきった瞳は、スマイレから片時も離れない。

スマイレはエミナとコウセツの前まで来ると、コウセツの顔を正面から見つめる。表情から感情は読めなかった。

気圧された様に、コウセツの顔が後ろにそれる。青ざめたコウセツの顔が、エミナの眼前に来た。

エミナはコウセツの肩口から、濁った瞳でスマイレに睨み付ける。そして、三者の間で鈍い音が鳴り、拳が顔面にめり込んだ。

殴れたヤツが、机や椅子を巻き込みながら倒れる。

「え、僕じゃ、ない」

何も出来なかったコウセツが意外そうに呟いた。その顔は腫れ一つない、綺麗なものだ。

顔を殴った女がコウセツの手を掴むと開け放たれたドアへ向けて足を踏み出す。コウセツも引つ張られるように、女に従った。

二人が教室から出ようとした所で、倒れていた女が動く。自分を殴った女の名前に呪詛をのせて叫んだ。

「スミレエ」

スミレは呼び声に答えて振り返った。コウセツの手を握り締めたまま離そうとしない。

「あんたコウセツを何処に連れてくの！ コウセツはあたしのだ！ 髪も目も爪先も全部、全部、あたしんだっ。あんたなんか、お呼びじゃないんだよ！」

殴られた女、エミナは濁りきった声で罵声を放つ。

罵声を受け止めたスミレは、小馬鹿にしたように鼻で笑った。

「今更過去を引き合いに出すなんて、どうしようもなく醜いね。今、コウセツが好きなのは私だよ。お古はさっさと消えて、ま・け・い・ぬ・さん」

哀れみの籠った視線を存分に浴びせてから、スミレは教室を出た。ドアにはケンジが張り付いたまま固まっていたが、スミレは無視して歩き去る。

コウセツもそれに引つ張られて去っていった。

スミレは足早に校舎から出ると、駅前に向かって歩き出す。その間、一度もコウセツの手を離さない。靴を履くときですら、スミレの手はコウセツの手を握り締めていた。

住宅街を抜け、駅に出る。そのまま駅の東へ向かって歩き出した。そちらには、大きな目のゲームセンター以外、高校生が行きそうな所はない。

「ス、スミレ……ちゃん、どこに向かってるんでせうか？」

真っ青な顔をしたコウセツが語尾を震わせながら尋ねる。

スミレは応えない。無言で、裏風俗通りへと足を踏み入れた。

異常に広い学園がある街とはいえ、学校だけで構成されているわけではない。当然、一八歳以上男性専用の性欲処理場があったりする

る。裏風俗街とは、そういう方達御用達の安いエロホテルが並んだ通りの事だ。世の中には、わざわざホテルまで宅配デリバリーをお願いする方達もいるという事である。

「スミレさん、まずいよ。こんな所に居たら停学じゃすまないよ」  
コウセツは額を青に頬を赤に染めると言う高等技術を使いながら、スミレに進言する。

教師に見られでもしたら、言い訳の仕様がな。良くて嚴重注意、最悪は退学だろう。

スミレはコウセツの言葉を見殺し、適当なホテルへと入った。もちろん、コウセツの手は握られたままだ。  
ホテルに入ると、高速道路にあるファーストフード用自販機とそっくりの物体があった。

パネルに幾つかの部屋の写真が貼り付けられ、その脇には適当なあり文句が書かれている。

スミレは適当な部屋のパネルを押した。  
乾いた音が響いて、直方体のキーホルダーを付けたホテルの鍵が吐き出される。

スミレは鍵を掴むとエレベーターに乗った。無論、手を繋がれたコウセツもエレベーターに引き込まれる。

淀みなくチェクイン出来たのは、日頃の予習の成果だ。

学校から今まで、スミレは一言も言葉を発しなかった。エレベーターの中でも無言である、

手から伝わる震えが、鍵とキーホルダーを擦れさせ硬質な音を響かせていた。震える手には、強く握り締めているので筋が浮かび上がっている。

エスカレーターを降りると、ビジネスホテルの様に並んだドアから、鍵のルームナンバーを同じドアを開けて、中へ入った。

部屋の内装は、いたくシンプルだ。

入り口の隣には、風呂場がある。曇りガラスで壁代わりに仕切っている所為で内情は分からない。

風呂場の仕切りを通り過ぎると、ベットとラック、そしてテレビがある。一風変わったビジネスホテルと言う印象だ。

スミレは大腿で、ベットの前まで来ると、コウセツをベットに向かって突き放す。

「わ！」

間拔けな声を出してコウセツはベットに倒れた。

「コウセツ」

スミレが淡々とした口調で名前を呼ぶ。その言葉に価値がないかのように、何の思いも込められてはいない。

コウセツは布団から顔を上げると、スミレの方を見て固まった。まるで蛇をみた蛙の様に表情が強張り、青ざめている。

「エミナの言つてた事、本当？」

「ち、ちが」

スミレの手が動いたかと思うと、コウセツの顔のすぐ横に鍵が突き刺さる。数センチ突き刺す場所がずれていたら、コウセツの頬に鍵が突き刺さっていた。

コウセツがそれを見て青ざめている間に、スミレはラックから小さな卵にコードの着いた物体や棒状の玩具を取り出した。どれも、紫やピンクなどで彩られ、下品な色気がある。

「私、嘘は嫌いだから、本当か、嘘か、で答えて？」

スミレは手に持った物体を弄びながら、コウセツを見下ろす。黒髪艶やかな和風美人が玩具を片手に弄ぶと言う、淫靡な姿を見ても、コウセツの頬に血の気が通うことはない。

「ほ、本当だよ。中学の時に、お酒を飲んでその勢いで……」

コウセツは、搾り出すように掠れた声で応えた。

「そう」

スミレの手の中から、玩具たちが零れ落ちる。玩具たちは見た目と同じく、安っぽい音を立てて床を転がった。

「一つ聞かせて」

スミレはベットの上で四つん這いになる。猫の様にしなやかに、

身体をくねらせながら、スミレはコウセツに近づいていく。その目は爛々と輝いており、まるで獲物を狙うライオンだった。

身体を震わせることしか出来ないコウセツの腹の上に、スミレは自身の尻を置くと、両手でコウセツの顔を挟み込む。

滑らかな肌の感触がスミレの指に伝わった。陶器の様に冷たく滑らかな頬を、ビブラートに動く指で愛でる。

「私の事、好き？」

コウセツは首を縦に振る。

「愛してる？」

コウセツは首を縦に振る。

「じゃあ、エミナにした事、私にもして」

コウセツは首を縦に振ろうとして、固まった。

「ううん、それじゃ駄目だね。エミナにした事より、凄い事して、いっぱい愛して、全部私に受け止めさせて」

スミレは、瞳に力を込めてコウセツを睨む。胸の奥で生まれる燃え上がるような想いを外に出さない為だ。

コウセツがゆっくりとスミレの頬を撫でる。

「ごめん、黙っててごめん。怖かったんだ。今の生活が壊れそうでコウセツは優しく、スミレの目元を拭う。コウセツの指に水滴が付いた。」

「コウセツ」

エミナは穏やかな表情で、コウセツの頬を引っ張る。

「い、いひゃい、いひゃい」

コウセツは涙目になって訴えるが、スミレの加虐は終わらない。コウセツの頬に爪を食い込ませる。紅の雫が、エミナの爪を彩る。

「私、怒ってるんだよ。分かってる？ エミナと寝たのはいい。どうせ昔の事なんだから、今更、どうこう言う気はないけど、だけどスミレは頬を引っ張る。」

「昔、エミナと寝たぐらいで、私がコウセツに愛想を尽かす、と思われてたのは、嫌だ。」

本当に、心底嫌だ。

私はその程度じゃ、コウセツに愛想を尽かさない。今、浮気して  
るなら、話は別だけどね」

スマレは頬から指を離すと、一転して優しく撫で回す。コウセツ  
の頬から出た血が自身の頬に隠微な赤線を描いた。

コウセツの頬がスマレの指に吸い付く。

「スマレ、そんな事しないよ。僕は、スマレが好きなんだから、浮  
気するにしても相手はスマレがいい、エミナは嫌だ！」

コウセツがスマレの目を見ながら宣言した。スマレは、コウセツ  
の瞳の奥から真実を語る人間特有の煌めきを感じ取る。

「分かったよ。だから」

スマレはゆっくりとコウセツの上にしなだれかかった。服を通し  
て、早鐘の様に鳴る互いの心音が共鳴する。

スマレはコウセツの耳に唇を寄せ、耳元をくすぐるように囁いた。  
「それでも疑っちゃ弱い私に、教えてよ。コウセツが好きなのは  
私、コウセツが全てをぶつきたいのは私、だって事を」

コウセツは短く

「うん、証明する」

と応えた。

重なり合った影がうごめき、衣擦れの音が静かに鳴る。

## 七月八日

七月八日、土曜日、スマレは学校から帰ると、すぐに制服から着替える。Ｔシャツにジーンズと言うラフな格好だ。更にその上からエプロンを着ける。

土曜日は午前中で授業が終るので、午後がまるまる空いている。その時間を使つて、何時もは遊びに出かけるのだが、今日は少々違った。

事の起こりは三日前、朝の事である。何をとち狂ったのかスマレの両親が、二人だけの七夕を世界で一番綺麗な星空の下で過ごす、と言いハワイへ行つてしまったのだ。

ハワイと言えば、世界で最も宇宙に近く、多くの天文台がある。綺麗な星空を見るならば、世界の何処よりもふさわしい場所だ。

その美しい夜空の見えるハワイに行った両親は、新婚気分を満喫したいのか、明日の朝まで帰つてこない。

この時、スマレは、両親のいない家にコウセツを呼ぶ事を思っていた。

思春期の男女がベットインした日から一日間、スマレとコウセツは毎日身体をあわせている。

行為の時間はとても幸せで、行えば行うほど体と心がコウセツを求めていった。今では、コウセツの唇が首筋を這うだけで、体中が歡喜に震える程だ。

そんな幸せな時間であるが、スマレには一つ不満があつた。

ベットの上で出来ない事である。

ベットの上で出来たのは、初めの一回だけで、それ以降は学校のトイレなどに隠れて逢瀬を楽しんでいた。

「あれは、あれで良いんだけど、たまにはベットで、うっん、と言うよりも、新婚気分で行きたいんだよ」

心中を吐露するスマレの顔は惚気で崩れきっていた。

行為の後見つからないようにその場から退散する時、悲しくはないが胸に一抹の寂しさが生まれた。誰かに知られる事を恐れられている様で、コウセツにいけないをしていると思われているように辛い。

しかし、今日は違った。

スミレの部屋にコウセツを呼んで、二人だけの、本当に二人だけの時間を手に入れられる。

そこから始まるかもしれない、今まで以上に濃密なお付き合いを期待して、スミレは胸を膨らませる。

「ん、ん」

鼻歌を歌いながら、踊るようなステップで部屋を片付ける。昨日のうちに一通り掃除はしていたが、念には念を入れて綺麗にした。

水色に白のまだら模様が入った絨毯に掃除機をかけ、机の上に重ねられた教科書を本棚に戻し、かるく雑巾で拭く。ベットのシーツを伸ばし、少し迷ってから布団や毛布は押入れに閉まった。

「ま、こんなものかな」

スミレは部屋の隅から隅まで眺め、本棚や小物入れにも汚れが溜まっていない事を確認する。机の上の置時計に視線を写すと、コウセツが来る約束の時間まで残り三十分を切っていた。

「あ、もう時間ない！」

スミレは衣裳棚から下着を取り出すと、風呂場へ走った。着る服は三日三晩考え抜いて決めてある。

後は、自身の身を清め、茶と茶菓子を用意するだけだ。その茶や茶菓子も、昨日の夜遅くまで考えに考え抜いた一品である。

「疾きこと風の如く、だよ」

風呂場から飛び出たスミレは、疾風の如き速さで身だしなみを整えた。

艶やかな黒髪は綺麗に梳かされ、頬にはファンデーション、唇は薄桃色の口紅がのる。本当なら、アイシャドーも軽めに入れるつもりだったが、残念な事に時間がなかった。

「あうっ、時間がないよう」

スマレは泣き出しそうになりながら、姿見の前で自身の服装をチエックする。

服は薄手のキャミソールと黒のホットパンツだ。美しい足のラインが惜しげもなくさらされ、パンツに包まれたお尻のラインがなだらかな曲線を描く。薄手のキャミソールは、胸の隆起を余すことなく晒していた。

どうにか満足できる出来になったスマレは部屋を出る。

お茶の準備の為に、台所へ向かおうとした所でタイムアップ。玄関のチャイムが鳴ってしまった。

「うっ、後五分あるじゃない。コウセツ、ちょっと早すぎだ」

スマレはチャイムを鳴らした主に軽い愚痴を零すと、すぐに玄関に向かう。先ほどまでの泣き顔と打って変った幸せそうな暖かい笑顔があった。

再度、チャイムがなる。

「はあい、今開けるから」

スマレはチェーンを外し、ドアの鍵を開ける。ドアノブを回し、ドアを開けていく。

「いらっしやい、コウ」

ドアを半分ほどあけた所でスマレは固まった。

目の前に居たのはコウセツではない、第三者だ。第三者はスマレがよく見た笑顔を作って、スマレを嘲笑った。

第三者は、スマレの口を手で塞ぐと、素早く家の中に押し入る。

「うんんううっ」

スマレが相手の名を叫ぼうとするが、相手の手が邪魔して叫べない。

頭の中が真っ白なる。

第三者は、スマレの腹部にリモコンのようなものを押し当てた。

軽い破裂音がスマレの耳に聞こえると同時に、スマレの身体が大きく跳ねる。

スミレの意識はブレーカーを落とされたようにブツリと切れた。目が覚めてスミレが最初に感じたものは、全身を襲う拘束感だった。身体を動かそうとしても、毛筋ほども動かない。

未だ覚醒していない空ろな瞳を、スミレは自身の身体に向ける。

「何これ？」

スミレは全身をガムテープとロープで巻かれて、芋虫の様にされていた。

唯一自由となる首を動かし、辺りの様子を伺う。見覚えのあるソファが目に入った。他の家具にも見覚えがある。自宅のリビングだ。「何が、どうしたの？」

スミレは覚醒し始めた頭で記憶の糸を手繰る。自分の家で芋虫の様に縛られていると言う現状は、スミレの理解を超えていた。そのお陰で、まだ冷静でいられる。

ゆっくりと自分に言い聞かせる様に、スミレは思い出していく。

「たしか、学校から帰って、掃除して……え、誰？」

途中まで思い出した所で、スミレはこの場にもう一人、人間がいる事に気づいた。

その人物はだらしなく足を投げ出して、椅子に座っている。男物のスニーカーと黒のスボン、そして白いシャツの裾が、スミレの視界に写る。

土足だ、等と場違いな事を考えながらも、スミレの頭の中では何かが警鐘を鳴らす。

何故なら、その靴に見覚えがあった。

何故なら、そのスボンに見覚えがあった。

何故なら、そのシャツに見覚えがあった。

そして、その清潔感あふれる匂いをいつも嗅いでいた。

嫌な汗がスミレの全身から噴出す。スミレは芋虫のように床を這いずり、椅子に座った人物の顔を視界に納めようとした。

文字通り芋虫のような速度でスミレは近づこうとする。そして、少しづつ椅子に座った人物の全容が見えてきた。

上半身はスミレと同じくロープで縛られている。女の子のように華奢な体に、ロープがきつく食い込んでいた。意識がないのか、糸の切れたマリオネットの様に全身から虚脱感をかもし出していた。力なく垂れ下がった頭を覗き込んだ瞬間、スミレは絶望に染まる。「コ、ウ、セツ、コウセツだ。ハハ、コウセツが居るよ」

スミレは泣きそう声で、椅子に座った人物の名前を言った。それと同時にリビングのドアが開き、少女が入ってくる。手には何か細長い物を持っていた。

スミレはドアの方へ視線を移して、ようやく何が起きたのか思い出した。

「エミナアア」

スミレは玄関を開けた時、外にいた第三者の名を叫ぶ。

「あれ、起きたんだ。早いね」

対する第三者、エミナは友好の笑みを浮かべて応えた。

「ちょうど良かった。今、起こそうと思ってたのよ。こっちの準備も終わったから」

エミナは誇らしげに、手に持った長物を掲げる。ゴルフのドライバーだった。先端にタオルが巻かれ、不恰好に膨れている。

その歪な物体に、スミレは何が行われるのか気付いた。

「何、するの？」

それでも一抹の希望を願って、スミレは尋ねる。

「それはね。ドキドキ魔女狩りタイム」

エミナは嬉しそうに顔を綻ばせながら、手に持ったドライバーを振り回す。

「これからスミレには幾つかの質問に答えてもらいます。その結果、嘘があったらこのマジカルステッキでお仕置きしちゃうぞ」

エミナはドライバーを天高く掲げ、片足を上げる。魔女っ子もののアニメのヒロインが取りそうなポーズだ。

自分の予感が当たったスミレの体中から力が抜ける。エミナを恨む気持ちはあったが、不思議と憎しみや怒りは沸いて来なかった。

「何で、何でこんな事するの？」

分かりきった事をスミレは尋ねる。

「そんなの決まりきってるじゃない。スミレがコウセツを騙して、私とコウセツの仲を引き裂こうとするからよ」

エミナは、やさしく微笑みながら、ドライバーを振り上げる。そして、躊躇いなく振り下ろした。

スミレの体が横にぶれる。

頬が焼かれた様に熱く、痛い。

まともな思考が出来なくなる。

「あ、これは勝手に喋ったペナルティーね。次やったら、全力でぶちかますから」

エミナの戯言を聞き流しながら、スミレは思う。

ああ、私はここで死んじゃうんだ。

罰が当たったのかな。

人に頼って恋愛を成就させたから、こんな目に合うんだ。どうせなら、死んでも恋人同士でいられるように頼んどくんだった。

バイバイ、コウセツ。

「質問に答えなきゃだめでしょ」

エミナの明るい声と共にやってきた衝撃で、スミレの意識はまた闇に消えた。

六月二三日

六月二三日、月曜日、昼休み、エミナは空になった弁当を片付け、教室のドアを見る。ドアが開け放たれており、廊下の様子が良く見えた。

廊下を向くエミナの横顔に、コウセツの声がかかる。

「エミナ、どうかした？ 廊下なんか見て」

「あ、うん、スマレの奴どこ行ったんだろ、て思ってたさ」

エミナは廊下から視線を離し、可愛らしく首を傾げてみた。脳内で、トイレの大か、と考えている事を微塵も感じさせない。

脇からケンジが口を出してくる。

「いつも一緒に昼飯食べてたのに、今日だけなんてのは妙だな。もしかして、ブルーデーか？」

「地味な解説的台詞ありがとう。本当に地味すぎるからそのままフエードアウトして、と言うかも喋るなジミタカケンジミ」

軽口をたたくケンジに、エミナは軽蔑に満ちた視線を贈った。潰れたゴキブリ、もしくは路上で裸になった中年男性を見つめる時と同じ視線だ。

「思春期の女の子に対してなんて事言うんだか、この地味男。少しはデリカシーを学んだら」

エミナはツリ目をつり上げて、ケンジのスネを蹴る。

「ツ、蹴る事はないだろ。コウセツ、この女に何か言ってくれ！」

ケンジはコウセツに助けを求める。

「今のケンジミが悪いよ。女の子にいきなり言う単語じゃないよね。最後の一言」

しかし助けはなかった。

「う、裏切り者」

「フフン、正義は勝つ」

ケンジが机の下に沈み、エミナは勝利の笑みを浮かべる。

「地味男は」

「エミナア、ちょっと良い？ 聞きたい事があるんだけど」

沈んだケンジに、エミナが更なる追撃の手を加えようとした時、背後から声をかけられた。

「ん、何？」

エミナが後ろを振りむくと、クラスメートが二人、手招きをしていた。どちらも袖を短く仕立て、ミニスカートから太ももを半分以上晒しており、同姓のエミナから見ても少々引く格好だ。

「ちよつと、女の子だけで聞きたい事があつてさ。ここじゃ何だから、向こう行こう」

二人はエミナの腕を掴んで、強引に引つ張ろうとする。

「ちよつ、引つ張るな！ と言うか、痛い、痛い、分かったから、行くから離しなさい、はぐなぐせ」

「駄目え、そう言つて、離れたら最後、雪村君か日高君を盾にするんでしょう」

「そうそう、前もそうやって逃げられたよねー」

「ねー」

エミナの抵抗むなしく、クラスメート二人に両脇を抱えられて連行させる。

「雪村君、そう言う訳だから、エミナ借りてくね」

いきなり話を振られたコウセツは、笑顔でエミナに手を振る。

「別にいいけど、解剖とかやめてあげてね」

「そんな事しないよー。ちよーと、話を聞くだけだから」

クラスメート二人は顔を見合わせると、意味深な笑みを残して、エミナの搬送を開始した。

「どこかで見たことがあると思ったら、MIBに連れていかれるグレイだな」

「それはもう古すぎるよ。そんなネタしか思いつかないから、地味なんじゃないかな？」

「グフツ、その悪意の感じられない笑顔がきついぜ、友よ」

のんきなやり取りをBGMに、エミナは教室から運び出される。廊下に出ると数人の生徒が一瞬、エミナの方を見たが、すぐに視線を外して去っていった。

隣の教室前の廊下まできた所で、女生徒二人は捕まえていた手を緩める。

「あー、痛かった」

エミナはつかまれていた両腕を摩りながら、半眼でクラスメート二人を睨む。

エミナを拘束していた二人は、教室を背にするように立ちふさがっていた。

帰り道を塞がれたエミナは小さく舌打ちする。

「で、何の用？ あたしとしてはさっさとコウセツ達の所に戻りたいんだけど」

エミナは二人から逃げるあきらめ、さっさと用件を済ませる事にした。

「まあ、用って程じゃないんだけどね」

「ねえ」

クラスメート二人は、何か含みを持った顔で頷き合う。

二人の様子にエミナの眉間にシワがよった。

「早くしてよ。あんま、待たされるの好きじゃないんだけどなあ」

努めて穏やかに催促するエミナの様子に、何かを感じ取ったのだろう。二人は身震いした。

「分かった。じゃあ、聞くけどさ。雪村君に、年上の彼女が居るって本当？」

何処か探るような視線がエミナを貫く。

「はあ？ 何言ってるの、コウセツにそんなの居るわけないじゃない。わた……ん、ん、何でそんな事聞くわけ？」

私と言う女が居るんだから、と言いかけてエミナは、慌てて口を濁す。エミナとコウセツに特別な関係がある事は、二人だけの秘密だ。

「えー、でもさ、こいつ、昨日見ちゃったんだって。雪村君が綺麗な女の人と腕組んで歩いてるの」

そう言って、クラスメートがもう一人を指差す。指差された方は首を激しく振り、同意を表している。

「そうそう、わたしさ、昨日大平市であつたクリスタルアーケード食い放題祭りに行ったんだよ。」

前回、和菓子部門単独トップになった『和菓子キラ』とその相棒『信号野郎』のタッグチーム、『全てはあのお方の為に』の応援にね。

和菓子キラ様の和菓子をロックした時のあの鋭い視線、格好良かつたなあ」

「ふーん、でその和菓子キラと人体野郎がどう、コウセツと関係するの？」

夢見る乙女のように虚空に向かって瞳を輝かせる友人を前に、エミナは冷めた様子で話を促す。

「ちがう、和菓子キラ様、キラじゃなくて、キラ、フガ、フガガガ」

エミナの間違いを訂正しようと叫ぶ口を、もう一人が押さえ込む。「はいはい、無駄話はやめやめ。」

それでさ、そんな時にこの子が、雪村君と美人のお姉さんが腕組んで歩いてるの見たんだってさ」

美人のお姉さんの部分で、エミナの眉は一瞬釣りあがる。唇を尖らせ、眉間のシワも増量した。

「それ、別人だよ。コウセツは昨日、家でゴロゴロしてたから、あたし昼頃コウセツが縁側でアイス食べながら、漫画読んでるの見たもん。」

大平市、てここから電車で三時間ぐらいかかるよね？ 瞬間移動

でも出来なきゃ無理よ」

エミナは嘘を吐く。

本当は昨日、コウセツが朝早くにどこかに言った所を見ていた。

そして、夜遅くに帰ってきた事もだ。今思い出すと、服も少々めかしこんでいた様に思える。

「そっかあ、見間違いか。そうだよな。わざわざ、電車で三時間もかけて大平市まで出かけるような馬鹿は、こいつぐらいだよなえ……ほら、あんた、だから言っただじやん。見間違いだって」

クラスメートはエミナの嘘に納得したのか、笑顔で頷く。先ほどから口を塞いでいるもう一人に対して、軽く拳骨を当ててお仕置きも忘れない。

「それじゃありがと。おつちよこちよいで口の軽い馬鹿にきょいくてきしどーをするから、じゃね」

そう言って、立ち去ろうとするクラスメート二人の背中に、エミナは一つの質問を投げかけた。

「ねえ、何で私に聞いたの？」

クラスメートは笑顔で答える。

「だって、エミナと雪村君、幼馴染じゃない。そう言う事は、良く知ってそうだからさ」

「ま、ね。コウセツの事なら、大抵は知ってるわ」

欲しかった一言に、エミナの自尊心が満たされた。

「でしょ。だから、聞いたの、じゃ」

「うん、じゃ、適当にお仕置きお願いね」

任されたー、と言う陽気な雄たけびと、お仕置きイヤー、と悲痛な叫びを残して、二人は廊下の奥へ消える。

「コウセツに、確かめなきゃ」

エミナは早足で教室へと飛び込んだ。目的は、コウセツに事情を問いたです、それだけだ。

六月一四日

六月一四日、火曜日、体操服を着たエミナは教室に戻ってきた。授業中の為、教室には誰もいない。隣の教室から教師の声が聞こえた。

エミナは所用があつたので、生理と偽り授業を抜け出てきたのだ。

窓の外に視線を向けると、照りつける太陽の下、クラスメート達が準備体操をしてる姿が見える。

念の為、エミナは教室を一通り回ってみた。エミナは足音を立てないよう、慎重に歩を進めた。床と靴底が奏でる僅かな摩擦音さえも、エミナの耳を過敏に刺激する。

掃除ロッカーの中や、教壇の後ろ、カーテンの陰等、物陰に誰かが隠れていないか慎重に確認した。

「よし、誰もいない」

ガランとした教室の様子に、エミナの頬が緩む。

体育授業で男子はハードル、女子は短距離走をやるはずだ。

クラスメート全員がグラウンドに居る事は確認している。それでも心に残る微かな不安と警戒心が、エミナに教室を一回りさせた。

知らず知らず荒くなる呼吸を整えながら、エミナは自身の席に座る。机の脇にかけた鞆を取り出し、中に手を入れた。

「確かこの辺りに、置いたんだけど……あつた」

鞆の中から封筒を抜き出す。何か角ばったものが入っていた。

エミナは封筒を逆さにし、中の物を取り出す。

封筒から出てきたものは、携帯のバッテリーだった。メーカー正規品ではない。本来のバッテリーにはないギミックを追加した特別仕様のものである。

大きな都市の一画で商いをしている男から買ったものだ。男の商品は既に何回か購入しており、その性能、耐久性は信頼できた。

バッテリーを手にエミナはコウセツの机に向かう。その足取りは先ほどより慎重で、抜き足差し足と言言葉がしっくりする様子だった。

時折、教室のドアを振り返り、誰も来ていない事を確認する。時折聞こえる足音に肩を竦ませつつ、ゆっくり歩いた。

数分後、ようやくコウセツの机に到着する。

エミナは身をかがめて、机の中を覗きこむ。机の中には教科書とノートが綺麗に詰め込まれていた。

エミナは机の中に手を伸ばし、ノートと教科書の上に置かれた携帯電話を掴む。

「コウセツが悪いんだからね。コウセツは私のものなんだから、他の奴になんて渡さないんだから」

エミナは渡さない、渡さない、と繰り返しながら、携帯の電源を落とし、素早くバッテリーを交換する。再起動させた時、携帯からメロディが流れた。

エミナは慌てて携帯を抱きしめ、息を殺す。

全神経を廊下に向けるが、誰かが来る気配はない。

「はぁ、ビックリした」

エミナは胸を撫で下ろすと、手に持った携帯を素早く机の中に戻した。

額ににじんだ汗を拭くと、軽い足取りで教室を後にする。

六月一四日、火曜日、パジャマ姿のエミナが勉強机に座り、ノートを開いていた。手にはシャーペンを持ち、荒々しい文字をノートに書きなぐっている。

エミナはヘッドフォンから聞えてくる会話を聞きながら、爪を噛む。

一組の男女の会話だ。

「ハハ、サチエさん、それは酷すぎじゃないかな」

「酷くなんかないわ。あんなセクハラ親父、さつさとクビなればいいのよ。あの脂ぎった手で、こっちの手をつかまれたかと思うと、それだけで鳥肌が出てくるんだから」

「サチエさん、すつごくセクシーだからね。同じ会社に居たら、僕もセクハラしたいよ」

「なに、コウセツはあんな奴の味方あ？」

「違う、違う、いつだって僕はサチエさんの味方だよ」

聞えてくる甘ったるい会話に、エミナは齒軋りを抑える事が出来ない。

昼間、体育の時間に仕掛けたバッテリー型盗聴器の調子は良いらしく、声のニュアンスまで正確に伝えてきた。

「コウセツの嘘つき。あたしだけ、て言っただじゃない」

エミナは今すぐ隣の家に殴りこみコウセツの携帯を叩き割りたい衝動を必死に抑える。深く息を吐くと少しだけ眉間の険がとれるが、すぐに悪化してしまう。

サチエと呼ばれる女の媚びた声と楽しそうに受け応えるコウセツの口調が、エミナの神経をささくれ立たせていた。

右手のシャーペンが、規則正しく芯を出して折っている。

ポキ、ポキ、ポキ、ポキ、ポキ、ポキ

時計の針の様に正確に、シャーペンの芯を折る音が鳴る。

「それじゃ、今度の日曜日楽しみしてるから」

「僕も楽しみにしてるよ。おやすみ」

「おやすみー」

スピーカーのジャックを強引に引き抜いた時の音を喚き立てて、二人の電話は終わった。

エミナはゆっくりと左腕を振り上げ、振り下ろす。鉄球でも落とした様な音が響き、机の上に乗っている小物が振るえた。

手の下で折れた芯の山が粉々に潰され、朱色に染まる。

「させない」

エミナは芯の山から手を持ち上げると、手に刺さった芯を一本、

一本、丁寧に唇ではさんで抜いた。抜くたびに唇に緋色の化粧がさ  
れる。

「コウセツと二人きりで遊ぶなんて、絶対にさせない」

エミナは自らの胸のうちを表すように、醜く顔を歪めた。

「させない、させない、させない」

一言、一言、自らを戒めるように呟く。呟くたびに、エミナの顔  
から陰が取れていった。顔から力が抜けていき、最後には能面の様  
に完璧な無表情になる。緋色の唇が艶やかに栄えていた。

エミナはマネキンの様な瞳でノートを見下ろす。ノートは折れた  
芯により黒い線がいくつも走り、その中心には赤い斑点が出来てい  
た。

ノートを覗き込む。そこには、幾つかの単語が書き連ねている。

「女、サチエ、会社員、日曜日……」

読み終えたエミナは、そのページを破った。粉雪の様に引き裂か  
れたノートの切れ端が、ゴミ箱に落ちていく。最後の一片まで千切  
り終えたエミナは、ちいさく笑った。

「コウセツを寝取る毒婦なんて、死んじやっていいよね」

舌が自身の唇を淫らに這い、血化粧を舐めとる。唾液でぬらぬら  
と輝く唇の隙間から、熱い吐息が漏れた。

六月十五日

六月十五日、水曜日、エミナたちのクラスから怒号のような叫びが放たれた。

「エミナとコウセツが居るううううう！」

まだ、始業まではかなり時間があり、教室に居た生徒の数は多くなかったが、彼らの叫び声は廊下の隅まで響き渡る。

「……世界の最後か」

「ブラックホールが時間を歪めたのよ」

「うちゅうのほうそくがみだれる」

「俺は何を見ているのだ。夢か、幻か」

「地球は終わるのね」

騒然となる教室の一角、原因の片割れが頬を膨らませた。

「あんだ達さあ」

頬を膨らませたエミナは、両手を腰に当ててクラスメートを睨む。  
「その反応はないんじゃない？ この朝が弱いエミナちゃんと寝ほすけコウセツが、ちよーと早く来たぐらいでそこまで叫ぶ必要はないでしょ」

「うん、でもまだ眠いよ。早く机で睡眠しないと」

机に突っ伏したコウセツの頭をエミナは勢いよく叩いた。

「せっかく早起きしたんだから、起きなきゃ駄目でしょうが！ スミレもそう思うで……何やってんのあんだ」

親友に同意を求めようとしたエミナは、半眼で親友を睨みつける。  
「別に何でもないよ。ただ、痛いから夢じゃないんだな、て確認しただけ」

スミレは自分の頬を抓っていた指を離すと、見事なアルカイックスマイルを浮かべた。しかし直前の行動と台詞の所為で台無しである。

「頑張ったねエミナ。やっぱり、エミナはやれば出来る子だよ」

悪気の感じさせない微笑で、スミレはエミナの頭を撫で始めた。綺麗に整えられたエミナの髪が、落ち武者の様に乱れるがその事を指摘する人はいない。

当のエミナは、つむじから受ける圧力で首がどんどん下がっていく。

スミレの胸に顔をうずめそうになる寸前で、エミナは爆発した。「キーツ、離せえ！ 早起きぐらいで誉めるにやっ！

と言うか、スミレ！ あんたのナデナデは殺人的すぎ。もう二度とあたしにやるな！」

エミナがスミレの手を払いのける。

「そ、そんな、せつかく河童ヘアーにしようと思ったのに！ エミナ、なんて酷い子」

スミレは半歩下がり、見開いた瞳でエミナを射抜いた。

「はいはい、はいはい、ショックを受けた様な顔しない。あたしは首が折れるか、頭が禿げそうだったんだから」

エミナが自身のつむじを優しく撫でていると、教室のドアが普通に開く。

「皆、おは、てエミナとコウセツが居るうううううう！」

ドアを開けたケンジが、石像の様に固まった。

クラスメート一同はケンジを一瞥して、ため息を吐く。

「ケンジ、地味！」

「地味、ケンジ」

「ちよっとはこったりアクションしろよなー」

「毎回、マジヨリティに居やがって、だから地味なんだよ」

ケンジは、顔面に衝撃を受けたように大きくのけ反って、糸が切れた人形の様に地面に落ちる。ボクサーのKOシーンを髣髴とさせる危険な倒れ方だ。

その様子を横目にエミナは、スミレと共にコウセツの周りに座り込む。

「ところで、エミナ、今度の日曜日、遊園地行かない？」

「何、唐突に遊園地って、そんなところ行くお金、あたし持ってないわよ」

恨めしげな目でエミナは自身の財布を見せる。中身は一〇〇円玉が数枚だけだ。

先日買い揃えた小道具等到大枚を取られた結果だ。

ちなみに小道具等の等の部分には、スミレに対する出費がかなりの割合で含まれている。

「それは大丈夫、ほら」

スミレは得意気に懷からチケットを四枚取り出した。

「無料招待券、乗り物も乗り放題、プラス昼食一五〇〇円分のポイントチケット！」

「おお！ どうしたのそれっ？」

あまりにも豪華な代物に、エミナが驚きいなくな。

机に座ったコウセツの笑みが強張った。

「お父さんがくれたんだよ。なんでも、株主優待、とか言うので貰ったんだって」

「ふーん」

エミナは適当に相槌を打ちながら、この状況をどう活用するか考える。

遊園地に行く、と言う選択肢は却下だ。

コウセツは絶対に行かない。あの強張った笑みは、どう断ろうが困っている顔だ。

エミナにとってコウセツの居ない遊園地は、行く価値がまったく見受けられない。

それに日曜日にはコウセツの邪魔をしながら、毒婦サチエの情報収集という必須項目がある。

事実と必須項目を確認した上で、エミナは満面の笑みを浮かべ、歓声を上げた。

「へー、やったじゃん。よく分かんないけど、電車賃だけで遊べるって事でしょ」

「そうだよ。しかも四枚あるから四人まで一緒に行けるんだ」

スミレはチケットを振る。四枚のチケットが波打つように揺れた。  
「じゃ、後二人、適当に誘って行こうよ」

極自然な流れで極自然に、エミナは四人で遊ぶ事を主張する。

「そうだね。あ、コウセツ君一緒に行こうよ？ きつと楽しいよ」

元々そのつもりだったのだろう、エミナの提案にスミレが乗る。  
予想通りの展開に、エミナは机の下で小さく拳を握った。

スミレは、期待に満ちた目をコウセツに向けている。尻尾があれば千切れんばかりに振っていそうな様子である。

苦笑いを浮べたコウセツが申し訳なさそうに頬をかく。

「折角、誘って貰って悪いんだけど、遠慮するよ。日曜日は用事があるんだ」

「えーっ！ そんなあ」

スミレの眉がハの字になり、尻尾が垂れ下がった。

「コウセツ、せっかくスミレが誘ったんだから来なさいよ。用事なんて、また、小母さんからの頼まれごとでしょ」

普段どおりの口調で、エミナはコウセツを誘い出す。

「そうだよ。その用事、手伝うから、行こうよー」

その尻馬に乗ったスミレが、子供の様にコウセツの袖を引っ張った。更に上目遣いでコウセツの様子を伺う。

「いや、母さんからの用事じゃないんだけどさ」

コウセツはスミレの視線から顔を背けた。

「だったら、何？」

エミナが更なる追求の手を伸ばす。

「それは、ちよつとした事なんだよ。皆に手伝ってもらう様な事じゃなくてさ」

対するコウセツの話は歯切れが悪かった。

「ちよつとした事なら、別に日曜日にやる必要はないでしょ。あたしも手伝うから、土曜日にでもやって、日曜日は遊園地に行く、それでいいでしょ」

「日曜日じゃないと、出来ない用事なんだよ」

「ふーん、何なのその用事って、そこまで意固地に断るんだから、理由ぐらい聞かせてよねえ」

「そ、それは……」

コウセツは語尾を濁し黙りきる。エミナは俯くコウセツの後頭部を睨んだ。沈黙が続く。

「ねえ、エミナ、もう良いよ」

二人の空気に耐えられなくなったのだろう、スマレが控えめに言っただ。

「良くないわよ。折角スマレが誘ったのに、理由も言わずに断るなんて、酷いじゃない」

鼻息荒くエミナが応える。

「仕様がないう。誰だって言いたくない事はあるし、無理に聞くほうが可哀そうだよ。エミナだって、人に言いたくない事があるよね？」

エミナの刺々しい声を、スマレの沈んだ声がやんわりとたしなめた。

「うん、そうね。しつこく聞きすぎてごめん、コウセツ」

先ほど前の怒りが嘘の様に、エミナはあっさりと頭を下げる。頭が水平になった一瞬、エミナは堪えきれずに笑った。

この結果はエミナの予想通りだ。これでスマレはコウセツに嫌われてると考え、距離を置くだろう。コウセツにしても、罪悪感でデートに熱中できない可能性がある。

最近コウセツと距離が縮まってきたスマレとコウセツのデート、その二つに楔を打ち込めた。それだけでも、今日朝早く来た甲斐があった。

「えっと、コウセツ君、もし日曜日来れる事になったら、電話してね。コウセツ君の分、チケットは取っておくから」

スマレが言い終わると同時に、始業のチャイムが鳴る。

クラスメート達が、慌てた様子で自分の席へ向かった。

エミナも大きく肩を落とす親友を慰めながら、自身の席へ向かう。その頭の中では、遊園地への誘いをどうやって断るか、を考えていた。

六月一六日

六月一六日、木曜、東の空に太陽が昇り始めた頃、エミナは家を出る。

辺りは静まり返っており、遠くからカラスの鳴き声が聞こえた。普段の登校時刻までたつぷり三時間はある。何時も遅刻ギリギリに起きるエミナにとって、おきている事があり得ない時間である。当然、エミナの身体もついてこれない。目には薄らとクマつき、肌がかさついていた。

エミナは眠た気に目をこすると、隣の家の塀に背を預けて携帯電話をいじる。規則正しいリズムでプッシュフォンが鳴っていった。六月とはいえ、まだ朝方は冷え込む。

エミナはかじかむ指に、時折息を吹きかけた。冬には大雪が降るこの地域では、今の時期でも早朝の気温は十度をきる。

一時間ほど携帯で遊んでいると、油のはじける音やテレビの音が聞こえてきた。背広を着た男性がかばん片手に背中を丸めて歩いていく。

普段見る事のない朝の風景だが、エミナは携帯から顔を上げなかった。まだ眠いのだろう、時折、大きな欠伸をかいている。

携帯のバッテリー残量が三分の一まで減ったところで、エミナの背後からドアノブの回される音が鳴った。

意識を集中しなければ聞こえない音量だが、エミナの耳にはしっかりと聞こえていた。

ドアは小さな軋み音を立てながら、控えめにゆっくりと開かれ、同じように閉められる。

かすかに土がこすれる音が、塀の中から近づいてきた。土のこすれる音が横から聞こえるまで待つて、エミナは顔を上げた。

「おはよ、コウセツ。今日は早いけど、どうしたの？ あんたがこんなに早いんじゃない、明日は雪でも降るんじゃない」

笑顔を浮かべるエミナの先では、身を小さく縮めたコウセツが片足を上げた状態で固まっていた。

「なあに、固まってるの。血圧がちょーと低いエミナちゃんが、朝早く準備してたからって、その態度はおかしいでしょ」

エミナは腰に手を当てて、頬を膨らます。

「わあああああああ」

コウセツは一度瞬きをすると、すぐに背を向けて走り出した。たった数秒で小指の先ほどの大きさになる。

「ちょ、ちよっと、待ちなさいよ。折角、昨日の事、許してあげようってたのに！ その態度はないでしょうがっ！」

エミナは地団駄を踏むと、携帯電話をかばんに放り込み走り出した。ずっと外にいた為冷え切った間接がぎこちなく動く。

懸命にコウセツの後を追うが、手足がうまく動かなかった。更に睡眠不足が祟ったのか、すぐにエミナの息が上がる。

血流が次第に早まり、心音が耳元で爆発音を鳴らしていた。

あごを上げて走るエミナの視界からは、小指の先ほどの大きさのコウセツが見えた。大きさは走り始めた頃と変わらない。

影法師を追いかけているように、まるで縮まらない距離に歯軋りする。

「ふざけないでよ！ コウセツはあたしの隣が一番似合ってるんだからっ！」

エミナは気合一発、足の指に力を入れた。ばねの様に跳ね上がる太ももを地面に押し込んで、一気にトップスピードをたたき出す。

間接が悲鳴を上げるが、気にしている余裕はなかった。

その甲斐あって、少しずつコウセツの姿が大きくなっていく。

手を伸ばせば捕まえられる所まで距離を縮めた所で、コースは狭く曲がりくねった裏道に入った。

T字路の突き当たりをコウセツは綺麗な弧を描いて曲がる。

その直後、同じ角をエミナが体を横滑りさせながら直角に曲がって追いかけた。

二度、三度、角を曲がった時、エミナはコウセツとの距離が離れてきている事に気づく。

「だああっ！ 本気で逃げんじやないわよ。絶対追いついて、教育してやるっ！」

すでに当初の目的を忘れたエミナは天に向かって吼えると、走る速度を少し落とした。ちょうど、前を走るコウセツと同じ位の速さだ。

速度を落とし、コーナーで距離を縮める作戦である。コウセツより小柄な身体が功を奏し、エミナはコーナーの度に少しづつ距離を縮めていった。

いつしか二人の周りから家並みが途絶え、五、六階建ての小さなテナントビルが建ち並ぶ。

エミナは舌打ちをした。後二、三〇〇メートルで学校に到着するもう、猶予はない。先回りしようにも、コウセツの走るコースが最短コースだ。

現状を把握したエミナは、一か八かの賭けに出る。

筋肉がパンパンに張った両足に活を入れ、速度を限界まで上げた。短距離走でもするように、まっすぐ速く走る事だけに集中する。

エミナは本日最高速をたたき出した。

逃げるコウセツの後姿がどんどん近づいてくる。

エミナは指先を伸ばして、コウセツの背中を捕らえ様とした。指先がコウセツの襟に触れた時、コウセツが右に曲がる。

コンクリート製の電柱が、エミナの視界いっぱいに広がった。壁の隣には階段があり、天井から喫茶店の看板が吊り下げられている。このままでは電柱に体をぶつけるか、階段に突っ込むしかなかった。

「こんつのお」

とつさにエミナは足を高く上げる。高々と上げられた足の裏が電柱と体の間に挟まった。上半身がつんのめり、前髪が柱にかする。後一センチ、頭が前に出ていれば、電柱で額を割ったであろう。

エミナはコウセツの後姿を確認し、またも百メートル走の要領で走り出した。

学校の正門をくぐった所で、ついにエミナの手がコウセツを捕らえる。コウセツの腕を掴んだエミナは、引き抜くように引張った。突然、予想外の力を加えられたコウセツはバランスを崩し、たたら踏む。その隙にエミナはコウセツの正面に躍り出た。

両手を腰に当てたエミナが、コウセツを睨みつける。まだ朝も早い所為か、辺りに生徒の姿はない。

尋問するには最適の環境だ。

「コウセツウ、いきなり逃げるとは、とんだ朝の挨拶ね。どういう事が、しっかり説明してもらわよ」

コウセツの顔から血の気が引き、紙の様に白くなった。腰に手を当てたままエミナは体を曲げ、仏頂面をコウセツの顔に近づける。

コウセツは顔をうつむけ、エミナの視線から逃げた。エミナがその後を追いつき、コウセツは更に顔を背ける。

「何か言わなくちゃ、分かんないわよ。ちゃんと説明してよね」

エミナは意地の悪い声で、コウセツを威圧した。

コウセツは一言も言葉を発しない。無言のまま、エミナの脇をすり抜けようとした。

「ちょ、待ちなさいよ」

慌ててエミナがコウセツの手を掴むが、コウセツが腕を振り回して抵抗する。

「離せっ！」

コウセツが出した悲鳴のような声に、エミナの体から力が抜け落ちる。

拘束から逃れたコウセツは、逃げるように校門をくぐった。アスファルトで舗装された地面を、生徒玄関に向かい一直線に走っていく。

「何なのよ。ちょっとふざけただけじゃないの」

エミナは次第に小さくなるコウセツの背中を呆然と見詰めた。コウセツの姿が校舎の影に消える。

「逃げることはないじゃない」

エミナがすねた様に呟いた。校舎の中から運動部の威勢の良い掛け声が聞こえる。目の前には校舎がそびえ立つが、この向こう側で運動部が掛け声を出しているに違いない。

「コウセツの、バカ」

自身の苛立ちをぶつける様にエミナは思いっきり石を蹴り飛ばした。勢いよく蹴り出された石は、甲高い音を立てて校舎に当たる。

校舎を付きぬけ運動部に当たる事のなかった石をエミナは口をへらの字にして睨み付けた。

六月二八日

六月二八日、火曜日、エミナは正門に寄りかかり、生徒玄関を鋭く睨みつける。目の下にできた濃い隈と乱れきった髪、張りや艶を失った肌が、異常な空気をかもし出していた。

普段なら帰宅部の一団で混み合うはずの正門で、エミナの半径一メートルだけ人が寄り付こうとしない。誰もが、エミナから視線を逸らし、足早に去って行く。

時折、冷やかし半分にエミナの様子を伺う生徒も居たが、エミナが睨みつけると足早に去って行った。

周囲の様子にエミナは舌打ちを打つ。一週間近く荒らされ続けた神経が、更にささくれだった。

「さつさと来なさいよ」

エミナは吐き捨てる様に呟く。自身が思っていたより剣呑な声色に、気持ちを落ち着ける様と深呼吸を始めた。

待ち人が来た時、今の精神状態ではまともに話せないと自覚しての行動だ。

「来た」

エミナは殺気の入り混じった視線を、生徒玄関から出てきたカッブルにぶつける。

カッブルは清潔感溢れる男子と和風美人な女子の組み合わせ、コウセツとスマレだ。二人は肩を寄せ合い仲むつまじく歩いている。

六日前、スマレがコウセツに告白をした。そして、二人は付き合い事になったらしい。

エミナが知っている事はそれだけだ。告白の翌日に、スマレ本人から聞かされた。

コウセツに付きまとう毒婦サチエの正体を知り、地獄に落とす計画を練っている最中に起きたサプラズ。混乱したエミナは、事実関係の把握に、五日間も使ってしまった。

その五日間はエミナにとって地獄であった。

目の前で、手に触れる事の出来る位の距離に、愛しいコウセツに付きまとう売女が居るのに、指一本触れる事は許されない。スミレに何かあれば、騙されているコウセツが自分を疑う可能性がある。腹立たしくもエミナは、細心の注意を払ってスミレを陰から守らなければならなかった。

憎いから八つ裂きにしたいくて、許せないから殺したいくて、愛しているから守る。

その矛盾が、エミナを日々やつれさせていた。

「あ、もう限界」

何処となく清清しくエミナが宣言する。

「今すぐコウセツを更正しなきゃ、あたし我慢できない」

コウセツとスミレが互いに指を絡めている姿に、張り詰めていたものが千切れた。

エミナは二人の前に立ち塞がる。

コウセツとスミレが驚いた顔を見せた。

「「エミナ」」

二人の呼び声に、エミナは歓喜と憎悪を掻きたてられる。歓喜はコウセツが名前を呼んだ事、憎悪はスミレが名前を呼んだ事で生まれた。

エミナはスミレを視界から外し、コウセツに近づく。

コウセツの顔が強張った。

恐怖に彩られた表情にエミナの胸が痛む。同時にコウセツを騙し、ここまで洗脳した罪人、スミレに対する怒り増した。

コウセツを悪夢から覚ましてあげる、と心の中で呟き、エミナはコウセツの手を掴む。

「コウセツちよつと来て」

エミナはコウセツの手を引いて校舎に戻ろうとした。

「お、おい、ちよつと待てよエミナ」

歯医者を嫌がる子供の様に、コウセツは抵抗する。

「あなたの為に場所を変えてあげるの。大人しくついて来て」

「そ、そんな勝手な。話なら家で聞くよ」

「今！ 今必要なの。お願いあたしを困らせないで」

エミナは手を握る力を強くしながら、懇願するように頼んだ。

エミナを愛しているコウセツを騙し誑かしたスミレへの憎悪が、自制出来ないレベルに達しようとしている。このままでは、この場でスミレを殴り倒してしまいそうだった。

「わ、分かったよ」

エミナは、コウセツが素直に頷いてくれた事で、少しばかりの優越感と安堵を手に入れる。

エミナは、コウセツの手を掴んだまま校舎に入った。

エミナは無言で歩き続ける。すぐにでも叫んでしまいたい感情を、残り少ない理性が必死に押し止めていた。

たとえ騙されたとしても、たとえ洗脳されたのだとしても、自分以外の女と一緒に居るコウセツの姿に何も感じない程、エミナはコウセツに狂っていなかった。

だからこそ、コウセツに対する深い愛と共に、別の想いも胸に溜めていた。コウセツを騙したスミレに対してだけではない。

エミナは教室の前に来ると、荒々しくドアを開けた。

教室の中では、地味に一人で掃除をしている男子生徒がいた。男子生徒は驚いたような顔をエミナ達に向けた。

「ケンジ、地味に何やってるか知らないけど、帰れ」

エミナの突き放した物言いに、何か反論しかけたケンジだが、エミナの後ろ見て口を紡ぐ。

何かに気付いたのだろう、大きくため息を吐くと、ケンジは鞆を持って教室から出て行いった。

二人とすれ違う時、ケンジは咽を鳴らすように囁く。

「まあ、がんばれよ」

エミナとコウセツどちらにかけられた言葉かは分からない。

エミナは忌々しそうに舌打ちした。

「地味根暗が」

エミナがそう呟く。

ケンジの姿が見えなくなると、コウセツの手を握っていた手が振り払われた。

「あー、痛てえ」

コウセツはわざとらしく腕を摩る。教室のドアを閉め、ゆっくり自分の席に向かった。先ほどまでの清潔感や、線の細さが消え、代わりに何処かふてぶてしさが現れる。

「はあ、やっぱりコウセツは、そっちの方がカッコいいよ」

コウセツの豹変を、エミナは恍惚とした様子で見つめた。

コウセツは自分の椅子に座ると、侮蔑に満ちた顔でエミナを睨む。  
「で、何の用だよ？ 後、僕の名前を呼ぶな。気持ち悪い」

「何の用？ そんなの決まってるじゃない。スマレとサチエ、あの二人は何なの？」

エミナは蕩けるほど熱い視線から一転、凍りつくほど冷たい視線を突き刺した。

「何、てそりゃあ、カノジョと恋人じゃないかな？」

コウセツは気軽に応える。サチエの事を知られていると言つのに、驚いた様子はなかった。

「浮気したって認めるんだ」

冷え冷えとした声がエミナの口から漏れる。

そして、コウセツがやはり騙されている、と確信した。

コウセツを本当に好きなのはエミナだけなのだ。そうである以上、大して好きでもない雌がコウセツを騙して、自身の性欲を満足させているに違いなかった。

少なくとも、エミナにとってそれ以外の答えはない。あつてはいけなかった。

「浮気？ ああ、確かに二股だね。でも、それ、お前には関係ないだろ」

コウセツの言葉に、エミナは絶句する。信じられないものを見る

ように、コウセツを凝視した。

お前には関係ない。

たった一言が、エミナの世界を壊す。エミナは、自分の全てを否定された様に感じた。

何も考えられなくなる。

気管を通る空気が嫌に粘ついているように感じた。

「か、関係あるよ。だって、あたし、コウセツの恋人だもん」

エミナはスカートを握りしめ、咽から搾り出すように呻く。それと同時に、頭の何処かで冷静な分析をしていた。

コウセツは、やはり洗脳されている。だから、あたしの事をこんなに避けるんだ、とエミナの頭脳は彼女の知る世界でもっとも常識的な結論出す。その世界が、先ほどコウセツに否定された事は無視していた。

「やめるよ。はつきり言うけどな。お前のその狂った想いは迷惑なんだよ！」

コウセツは激情を叩きつける様に、エミナを拒絶する。

「……狂ってなんかない。あたしは、あたしは、いつものコウセツが好きなんだよ。コウセツは騙されてるんだよ。気付いて」

例え騙されているとは言え、愛する人からの強烈な拒絶にエミナは泣きたくなった。

「ふざけんな！」

はじける様にコウセツは立ち上がる。

「ふざけてなんか言わないわよ。コウセツは騙されてるの」

エミナはコウセツを宥める為に抱きしめようと、手を伸ばした。しかし、コウセツは後ろに下がり、エミナの手は空を切る。

「何で逃げるの？」

エミナはコウセツに手を伸ばしながら尋ねた。エミナの指はコウセツを求め、伸ばされる。

「何で、当たり前だろ！　ここ二週間お前がやってた事を考えれば当然の反応だよ」

コウセツの手が、エミナの手を打ち払った。

エミナは打ち払われた手を胸に抱く。目尻から一滴涙が、頬を伝って床に落ちた。

「酷い、愛してるから、ちゃんとして欲しいだけじゃない」

愛しているから浮気をして欲しくない。

愛しているから自分を見て欲しい。

愛しているから愛をください。

エミナは胸の内にある欲求を言葉にしよとするが、うまく言葉を紡げない。

「別に、付き合ってるわけじゃない。どうしようと俺の勝手だろ」

エミナは自身の世界が壊れた音を聞いた。

「そんなことない、絶対そんなことないよ」

「事実だろうが！ いい加減認めろよ。このキチガイ！」

コウセツが苛立ちを隠そうともせず、睨みつける。

エミナは呆然とした様子で立ち尽くすだけだ。

頭の中は、ぐちゃぐちゃだった。OSをウイルスに犯されたパソコン

コンの様に、彼女の基盤が狂わされていた。正常な判断どころか、

簡単なプログラムを走らせる事もできない。

エミナの脳は神経網の全てにパルスを送り、自身の基盤の再構築と防衛だけ行う。

壊れた基盤を取り除き、その部分にふさわしく、前回とは違う基盤を埋め込む。

新たな基盤を埋め込んだ所為で出来る矛盾を、既存の基盤を塗り替える事で終始一貫したものにする。

その工程は、誕生といっても差し支えないものだ。

自身の根幹までエミナの人格はコウセツとの愛で形成されていた。特別な理由などない。生まれた時から一緒に居て、物心ついた時から恋をした。

エミナの人生のほぼ全てが、コウセツへの愛で埋め尽くされていただけだ。

だから、その基盤を壊す、エミナの人生を殺そうとするものを、エミナは許さなかった。

「何よそれ！」

エミナは今までにないほど醜悪に顔を歪ませる。まるで肉食獣の様にエミナは、コウセツをにらみつけた。

コウセツは恐れおののいたように、一歩後ろに下がる。

「逃げるなんて許さない」

エミナの殺気に満ちた一言で、コウセツの体が遠目からでも分かるほど強張った。

「私の処女奪ったくせに！」

エミナは胸のうちを吐き出すように叫ぶ。

中学二年の夏、エミナはコウセツに襲われた。

まだ夏の熱気が残るお盆の事だ。

お互いの両親が旅行に行き、エミナとコウセツは二人きりの夜を過ごした。

初めて過ごす両親のいない夜に、コウセツのテンションは高かった。中学に入る頃には使わなくなった粗雑な口調で、学校の馬鹿話に興じる。少なくとも、エミナの目にはそう見えた。

エミナもコウセツに合わせて、馬鹿みたいに笑った。

夜も深まり、コウセツのテンションが臨界まで高まった所で、エミナはビールを取り出す。

一つはコウセツの分、もう一つは自分の分だ。

お互いちよつとした好奇心のつもりでビールを飲んだ。

そして、苦い、まずい、と言って笑いあった。それでも二人は飲み続け、気付いたときには何本もの空き缶が出来ていた。

それから先をエミナはよく覚えていない。

覚えているのは、コウセツに自分の胸を触らせたくだりだ。

きっかけは色気がないとかそんな話だと思う。

そして、事後、裸のコウセツと抱き合った所は覚えている。それだけだ。その間は殆ど覚えていない。

しかし、翌日の朝、スカートの裏側や内股に付いた血痕や、腹部の痛み、そして裸で抱き合っていたコウセツ、そこまで条件が揃っているならば、もう答えは出ていた。

エミナにとってそれは絆だった。どちらが誘ったのか、どちらが受け入れたのかはわからない。

だが、二人が愛し合った結果だと、エミナは信じている。

「それなのに、全部なしにするなんて」

許さない、と続けようとしたところで、教室のドアが開いた。

エミナは開いたドアを見て、満面の笑みを浮かべる。

開いたドアの先には、スマレが居た。

コウセツは顔を真っ白にしている。

「あは、あははははは」

エミナは笑った。自分の敵が、あまりにも良いタイミングで、馬鹿の様にやってきたのだ。これが笑わずしていられようか。

エミナは嫌らしく笑いながら言う。

「ごめえくん、コウセツう、ばれちゃったね、えへ」

未だ動かないコウセツに抱きついた。エミナは出来るだけ身体を密着させ、自分と本当のコウセツの親密度を見せつける。

「スマレもごめんね。」

本当はもっと早く言わなくちゃいけない事だったんだけど、スマレがあんまりにも幸せそうで、哀れだったからさ、言えなかったんだ。

本当に、ごめんね」

心では嘲りながらも、エミナは言葉だけの謝罪をする。愉快だった。

さっきまで自分を苦しめていたクソ女が、今では呆然と立っているのだ。これが面白くないわけがない。

エミナは、哀れなスマレが次に行く行動、すなわち逃走を待つ。その負け犬じみた背中を嘲笑う為だ。

しかし、エミナの夢想在叶う事はなかった。

スマイレは無表情のまま、エミナに近づいてくる。

エミナの笑い声が少しずつ静まっていく。

スマイレの瞳は真っ直ぐエミナを貫いている。その瞳に、怒りや憎しみの色は感じ取れない。澄んでいるわけでも濁っているわけでもない。

ただの瞳だ。平均的な人間の瞳だ。特別なものはない。異常なものもない。ただの瞳だ。

エミナは知らず知らず、歯を食いしばる。動く事は出来ない。腕にある温もりを離したくなかった。

好きな人の温もりを味わい続けたい。そんな当たり前の欲望が、当たり前でないこの場で作用する。

スマイレがエミナの前で止まった。

スマイレの瞳にエミナの顔が映る。酷い顔だった。眉間にシワを寄せ、眉をつり上げ、口は笑い、目は濁り、頬は落ちている。人の作れる表情とは思えない。

そして、スマイレの拳がエミナの顔面に直撃した。

一瞬エミナの意識が飛ぶ、エミナは二、三步よろけて仰向けに倒れた。

巻き込まれた机や椅子が盛大な音を奏でる。

体中が痛みを訴える中、エミナは虚空を見つめる。少しずつ意識の焦点が合い、鼻から血を流している事に気づいた時、エミナは起き上がる。

エミナの視界の先では、スマイレがコウセツの手を引いて、教室から出ようとしていた。

「スマイレ」

エミナは鼻を抑えながら叫ぶ。

「あんたコウセツを何処に連れてく気！ コウセツはあたしのだ！ 髪も目も爪先も全部、全部、あたしんだっ。あんたなんか、お呼びじゃないんだよ！」

エミナは濁りきった声で訴える。自分の全てを奪うな、と瞳に力

を込め、スミレを睨みつけた。

対するスミレの反応は、冷笑だった。まるで阿呆を見るように鼻で笑い告げる。

「今更過去を引き合いに出すなんて、どうしようもなく醜いね。今、コウセツが好きなのは私だよ。お古はさっさと消えて、ま・け・い・ぬ・さん」

スミレはエミナの姿を舐める様に眺め、去っていった。

「殺してやる」

エミナは、スミレの去ったドアを睨む。

「殺してやる。絶対殺してやる」

呪詛に満ちた言葉をエミナは呟き続ける。この場に居る全ての人間を呪う、差別のない無邪気な呪詛が教室に漏れ響いた。

六月二十九日

六月二十九日、水曜日、部室練の四階の片隅で荒々しい音をたててドアが閉まる。

ドアに貼られている赤いテープが小刻みに震えた。赤いテープは、悪魔部の活動場所を示す目印である。

部室には、スピーカーが机の上にあるだけだ。

「ようこそ、名も知らぬ隣人」

スピーカーは目の前に立つエミナを歓迎する。

エミナは乱れきった髪をかき上げ、端が切れた唇を歪めた。

「ここは何でも願いを叶える部活、悪魔部でいいの」

スピーカーに尋ねたエミナは、痛みで眉をしかめる。声が昨日殴られた鼻に響き痛むのだ。ガーゼで保護されている鼻は、青く染まっている。

「ああ、そうだ。

と言っても、私の力は万能ではない。

死者を生き返らせる事も、鉄を金に変える事も出来ない。

もちろん、お前を超能力者にする事も出来ない」

「はっ」

スピーカーの長口上をエミナは一笑した。

「何、下らない事言ってるのよ。そんなキチガイな願いを言うわけないじゃない」

「……いや、居るんだよ、時々、そういう奴。もっと酷いことになる」と、私の前世はウィフェミアの農村で育つ」

「興味ない」

スピーカーの愚痴を、エミナは遮る。彼女にとって、スピーカーの愚痴等どうでもいい事だった。

「さっさとあたしの願いをかなえなさい」

「はあ、まあ、いい。願いは何だ」

スピーカーは、投げやりな口調で願いを聞く。何処となく疲れが感じられた。

「願いは、コウセツを騙して誑かすスマレを、最高に惨めったらしい泣き顔にさせて、自分が生まれてきた事を後悔させながら死なせる」

エミナは静かに願いを言う。淡々とした口調で、まるで今日の天気を言うような気楽さだった。

エミナは願いを言い終えると、口を一文字に結ぶ。これから起きる事を一瞬でも見逃さないように、スピーカーを凝視した。

数秒の間をおいてスピーカーから声を流れる。

「それは、どんな犠牲を払ってでも叶えたいものか？」

「当たり前でしょう。あのクソ女が豚にも劣る肉塊になるなら、そうっ！ 悪魔に魂を売ってもいい」

エミナは良い事を思いついたと言わんばかりに笑った。

「……願いを受諾する。本来なら禁忌だが、お前の想いに応えよう」  
スピーカーは重々しく告げる。

願いが受諾されたにも関わらず、エミナの顔に喜びはなかった。

冷静にスピーカーを見下ろしている。

「で、あたしはどうしたらいいの？ まさか、代償がないわけじゃないでしょう」

「何もするな。代償も要らない。この事を、誰にも話さなければ、後はこちらで全てやるっ」

「ふうん、リーズナブルなんだ。まあ、いいわ。それじゃお願いね」

エミナは言うだけ言うと、部室から出て行った。

帰り道、エミナは今後の計画を練り始める。

悪魔部に願った事はおまじないの一種でしかない。やってくれるなら儲けもの、と言う程度だ。

「問題は、あの女一人をどうやって確実に自殺に追い込むか、だけ。イジメは、無理か。ああ見えて人気あるからな。

輪姦も、難しいか。最近は、何処もかしこも監視カメラがついて

る。人目のない場所を探す方が難しい。

「だったら……」

確実にスミレを殺す構想を口ずさみながら、エミナは教室に帰ってきた。

エミナは悪魔部で見せた狂気を隠す。少々疲れた一生徒に偽装した。

騙されているとはいえ、恋人のコウセツなら自身の変化に勘付く可能性があると考えての偽装である。

「エミナ、ナイスタイミング。ちよつといいか？」

ケンジが小走りに近寄ってきた。その姿は平凡な昼休みを思い起こさせ、見る者の印象に残らない程地味だ。

エミナは教室の中を軽く一瞥し、コウセツが居ない事を確認すると教室を出る。

「用、外で聞く」

ケンジの姿を見ようとせず、エミナは足早で廊下を歩きだした。ケンジがエミナの隣に行つて囁く。

「ここは人目につくから、向こうの。そうだな、社会準備室の辺りで話そう」

エミナは軽く頷くとケンジを置いて、社会準備室の方へ向かった。ケンジがその隣を歩こうと肩を並べる度に、エミナは歩く速度を上昇させていく。コウセツ以外の男と、仲良く肩を並べて歩きたくなかった。

エミナの気持ちを知つてか知らずか、ケンジもエミナの歩調に合わせて速度を上げる。

次第にあがる歩調は、最後に競歩のレベルまで達した。駆け足と同じ速度に達しながらも走らないのは、妙な意地が働いたからだろう。

すれ違う生徒を振り返らせながら、エミナとケンジは校舎の隅にある社会準備室にたどり着いた。この辺りは視聴覚室等、殆ど使われない教室しかないので人気がない。

「で、何の用」

エミナは社会準備室のドアに寄りかかる。涼しげな顔をしているが、頬は赤く肩で息をしていた。

「そ、それなんだが、ちょっと手伝って欲しいんだ」

ケンジはカッターシャツの襟元を広げながら、袖で額を拭う。

「手伝うって、何を？」

「それは」

ケンジが用件を説明しようとした時、声が聞えた。

ただの声ではない。何かを押し殺した苦しそうな声だ。

エミナとケンジは、声のした方を振り向く。

人影は見えなかった。その代わり、社会準備室と反対側にトイレの入り口がある。

廊下は突き当たりになっており、声は社会準備室かトイレから漏れ出たものだと言測できた。

「イジメ？」

「かもね」

エミナの呟きに、ケンジが応える。二人の視線はトイレの方を向いていた。

防犯システムの一つとして、校内のいたる所に監視カメラが設置されている。その為、教師に隠れて喫煙、飲酒、イジメ等は殆ど出来なかった。

無論例外もある。

授業中の使用していない教室や、更衣室等だ。経費削減やプライバシー保護の為である。当然、トイレもその一つに入っていた。

トイレの中から、女の苦しげな声が漏れている。

「聞いたことある声ね」

「そうだね」

二人は顔を見合わせると、足音に気をつけながらトイレの入り口に忍び寄った。

トイレに近づくと、女の声はより鮮明に聞こえてくる。声は苦し

げであつたがそれだけではない。

媚びた艶のある声だ。

エミナはその声が何の声か気付くと、身体を震えさせる。隣に居るケンジも声の正体に気付いたのだらう、頬を染めながらも、呆然とした様子だ。

「コウ……い……」

「……ミレ、い……」

男の切羽詰った声が、女の声にかかる。それだけでエミナは、トイレの中で何が起きているか理解した。

一際大きな声が上がリ、トイレの中が静かになる。何かした後特有の気だるい雰囲気、トイレの中を充満していた。

「帰る。話は後で聞くから」

エミナは返事を待たずに、その場から立ち去る。

ケンジが声をかけてくる様子はなかった。

「スマレ、すぐに地獄へ落としてやるからね。楽しみに待ってて」  
口元から流れ落ちる赤い軌跡を、エミナは手で拭う。前を見つめる瞳は、今まで以上に黒く濁っていた。

七月一日

七月一日、土曜日と言うことで四時間目の授業が終ると同時に、教室から生徒達がいなくなる。時計の針が一二時三〇分を示す頃には、二人の生徒を残し誰もいなくなった。

教室に残った生徒はどちらも女だ。一人は黒髪が艶やかな和風美人、もう一人は勝気な眼をした活動的な少女。

スミレとエミナである。

体面する二人の姿はことごとく反発しあう。

スミレの白い肌に対し、エミナの肌は日に焼けている。

スミレの胸が標準以上ならエミナの胸は標準以下、細く華奢な黒髪と太く生命力に満ちた太い髪、少し垂れ下がった瞳と目尻が釣りあがった瞳。

字面にすると、まったく正反対な二人だった。

決闘でも始めるようにエミナとスミレは対峙する。

先に動いたのはエミナだった。

「で、何の用なの、このあたしに？」

エミナは自嘲気味に笑う。スカートのポケットに入れた手には、先日買ったばかりのスタンガンが握り締められていた。

「うん、ちよつと相談したい事があって」

スミレが頬を染めて、身をよじる。

男に媚びる意図が透けて見える仕草と、予想外の用事にエミナは眉を寄せた。疑わしげに目を細め、スミレの一挙一動を観察するが、男を誑かすあざとい演技以外は何も見つける事が出来ない。

「あのね」

スミレは自身の指を絡めたまま忙しなく動かしていた。

俯、頬を染めた姿は、女のエミナから見ても可愛らしいものがある。

しかし、これにコウセツは騙されたと分かっているエミナは反吐

を吐きそうだ。

頬を染めたスミレをつぶれたトマトの様に真っ赤にしたい。その衝動を抑える為に、敵情視察と自分に言い聞かせ続けていた。

エミナの葛藤に気付かないスミレは、なかなか本題に入ろうとしない。

何時間も待ったように感じながら、エミナは横目で時計を見た。先ほどスミレが口を開いてから数分しか経っていない。

エミナが我慢の限界に来た所で、ようやくスミレの口が開いた。

「生理が来ないんだ」

たった一言で、エミナの世界から色が消えた。

「まだ二日遅れたんだけど、あ、赤ちゃんできてたらどうしよう？」

スミレは困ったような顔で、愛しそうにお腹を摩る。

「よかったじゃない」

ぎこちない笑みを浮かべたエミナは、昔の白黒映画の様な世界の中でスミレの話を聞いていた。

「ありがとう、そう言ってもらえて、嬉しいな」

エミナはスミレの言葉を聞いてはいなかった。

目の前で戯言を囁く女の腹を思う存分蹴り潰したい衝動を我慢するだけで、精一杯である。

スミレの子宮を潰すには、まだ時間が必要だった。少なくとも、騙されているコウセツを救い出してから出なければ、スミレがコウセツにどんな酷い事をするか予想できない。

「やっぱり言った方がいいかな？」

スミレが媚びた上目遣いで聞いてきた。

エミナの体から強張りが消えていく。体から力が抜けたのではない。逆に、体中に等しく力がかった結果、力が飽和しているだけである。

「ごめんね、こんな事相談できるの、エミナしかいないんだ」  
幸せそうなスミレの顔が、エミナの視界一杯に広がった。

媚びるように甘えた口調で、友達として擦り寄ってくるおぞましさに、エミナは吐き気を覚える。

「どうしたのエミナ？ 顔が悪いよ。具合、悪いの？」  
いや、違う、エミナは自身の出した答えを否定した。

この吐き気の理由はおぞましさではない。スミレに対する、友情が原因だ。友達のスミレがここまで自分を痛めつけるはずはない、と言う思い込みと、現実の食い違いに体が耐えられないのだ。

普通、たった二日生理が遅れただけで、妊娠の心配などしない。せめて一ヶ月経ってから、ようやく妊娠の可能性を考えるだろう。人に話すならば、妊娠検査薬での確認は行っていると考える方が妥当だ。

ならば、スミレがわざわざ相談しに来た理由は一つしかない。コウセツがスミレの子宮に精子を流し込まされている事を自慢し、二人の仲の深さを思い知らせる為だ。

エミナは心の中で笑う。まだ自分の中に、害虫に対する友情があった事が馬鹿らしかった。

原因が分かれば、対処は簡単である。

エミナはスミレに対する友情を全て握りつぶす。記憶の一つ一つを思い出し、あらゆる角度から荒を見つけ、独特の解釈でスミレがいかにか醜く、汚く、気持ち悪い存在かを認識していった。

数学でエミナが分からない問題をこっそり教えて時、スミレは嘲笑っていた。

中学時代、エミナとスミレが母親の化粧品を借りてけばけばしい顔なった姿を携帯に撮りあった。きっと、後で皆に見せてエミナを馬鹿にした。

体育祭前日、エミナが階段で転んで足をくじいた。あれは、スミレに背中を押されたからだ。エミナは楽しみにしていたコウセツとの二人三脚が出来なくなった。

中学の修学旅行の時、  
入学式の整列の時、

高校入試の時、

「あ、誰か来た。この話は別の時にしよ。じゃ、またね」

エミナが自身の記憶を再認識していると、スミレは鞆を持って教室から出て行った。エミナの視界からスミレの姿が消える。

ほぼ時を同じくして、エミナの記憶の再構築が完了した。

「勝手に、嫌な女。あたしがコウセツの恋人だって知ってるくせに」

エミナは眉をひそめ、呟く。

エミナの中でスミレと言う人は死んだ。あるのは、スミレと言う人の形をした現象だけだ。

エミナはスミレに対する想いは全て消し去る。

人間が現象に対して感情を持つ事はない。ただ、現象でこっむる不利益を対処するだけだ。

ドアから教師が顔を出した。

「あー、もう午後一時だ。用事がないなら帰れよ」

教師は緩んだ表情で、適当に注意すると、すぐ去っていく。

「はい、分かりました」

エミナは誰もいないドアに頷くと、鞆を持って教室を出た。

エミナは振り返り、綺麗に整列した机の中の一つ、スミレの席を見ながら呟く。

「悪魔部になんかやらせないよ。コウセツの為にあたしが直々に処理してあげる」

エミナは踵返し、ゆっくりと去っていった。

七月八日

七月八日、エミナがスマレを現象として認識してから一週間が経つ。

その間、エミナは何もしなかった。

そして、スマレにも何も起きなかった。学校に行き、クラスメートとじゃれあい、時々勉強後恋愛、非常に平穏な一週間といえる。

この一週間でエミナは様々な情報を入手した。

別段、目新しいものはなかったが、事実関係を補強するには十分すぎる情報だった。

目新しいものも一つ、二つはある。

悪魔部などと言う部活は存在しない。誰かの悪戯だったのだ。

エミナの願いが受諾されてから一日が経過して、未だにスマレは生きている。それが証拠だ。

「まあ、別にいいんだけどね」

淡々とした様子でエミナは手に持ったスポーツ用具に、タオルを巻きつける。

スポーツ用具は、一メートル程の細い棒の先端に、角を丸めた箱のようなものが付いていた。ゴルフのクラブ、ドライバーだ。

その先端にエミナはタオルを巻きつけている。

タオルを巻きつけ終わると、エミナは軽く振って感触を確かめた。思っていたよりも先端が重く体が流された様に感じたが、問題は無い。

狙うのは手の平に収まる小さなボールではなく、人体なのだ。多少スイングが甘くても、外す事はない。

「マジカルステッキ」、これでどんなゴミ虫も、考える肉団子に大変身！喜んでくれるかなあ、コウセツ」

エミナはドライバーを振り回しながら、リビングへ戻った。

ドライバーを振る度に、家の壁紙や花瓶が破れ壊れたが、エミナ

は気にしない。

格子状の木の枠にカッティングされたガラスをはめ込んだドアの前で、エミナは一度立ち止まった。

これから行うことを躊躇ったのではない。

ただ、少々のシミュレーションが必要だったのだ。

ドアの反対側には一人が居て、一つがある。どちらも意識が失っているはずだが、もし起きていたらどうするか。

エミナは綿密な計画を立てる。

「……っだ」

ドアの向こうから女の声が聞こえた。

エミナはシミュレーションを中断し、声に耳を傾ける。

「ハハ、コウセツが居るよ」

何処か諦めきった声色に、エミナは少々の同情心が湧いた。

害虫駆除のニュースを見ながら、害虫に覚える同情心によく似た感情だ。

「せめて、苦しめて上げるから、さっさと排除しよ」

エミナは陽気に誓うと、躊躇いなくドアを開けた。ドアは音もなく開く。

「エミナア！」

とても女が出したとは思えない濁りきった怒声に、エミナは眉をしかめる。しかし、それも一瞬の事だ。すぐに穏やかな笑みを、怒声の主に向けた。

怒声の主は、スマレだ。全身をガムテープとロープで固定され、まるで芋虫のように這いつくばっている。

「あれ、起きたんだ。早いね」

エミナはゆっくり、スマレに近づく。

近くで見るとスマレの顔は酷いものだった。黒く艶やかな髪を乱し、化粧は汗で崩れ、さながら幽鬼の様である。

「ちようど良かった。今、起こそうと思ってたのよ。こっちの準備も終わったから」

エミナが手に持ったドライバーを高々と掲げる。

それが何をするものなのか分かったのだろっ、スマイレの顔から血の気が引いた。

「何、するの？」

「それはね」

媚びた顔でこちらを伺うスマイレに、エミナは嬉しそうに宣言する。  
「ドキドキ魔女狩りタイム。これからスマイレには幾つかの質問に答えてもらいます。その結果、嘘があつたらこのマジカルステッキでお仕置きしちゃうぞ」

エミナは昔見た魔法少女の決めポーズを取った。

「何で、何でこんな事するの？」

「そんなの決まりきってるじゃない。スマイレがコウセツを騙して、私とコウセツの仲を引き裂こうとするからよ」

エミナはスマイレの質問に答えてあげてから、ドライバをエミナの頬に振り下ろした。

鈍い音がして、スマイレの体が横にぶれる。

その様子を見ながら、エミナは期待で心躍らせた。

既にエミナの頭の中に、スマイレの事はない。この駆除が終わった後、コウセツがエミナを誉めてくれる、と言う期待感だけだ。

「あ、これは勝手に喋ったペナルティーね。次やったら、全力でぶちかますから」

エミナは、おざなりの注意をスマイレにする。

今すぐ殺す、いや駆除する訳にはいかなかった。

駆除するにしても、すぐに駆除されては困るのだ。きちんとスマイレが害虫である事を、スマイレとコウセツに理解させてから駆除しなくてはいけない。

スマイレが長く生きていてくれた方が、労力が少なくてすむ。

「じゃあ、第一問、一昨日の昼休み、スマイレは生ゴミ同然の汚物を無理矢理コウセツに食べさせた。イエスオアノー？」

エミナはゆっくりドライバーを振り上げながら、スマイレの回答を

待つ。

しかし、ドライバを頭上に上げ、数秒待ってもスミレの口は動かなかった。

「質問に答えなきゃだめでしょ」

エミナは躊躇う事無くドライバーを振り下ろす。

スミレの体が今度は反対側にぶれ、糸が切れた様に動かなくなつた。

「死んだかな。ま、いつか」

うめき声一つ出さない様子にエミナはそう判断すると、この場に居る最後の一人へ歩み寄る。

最後の一人は椅子に縛り付けられている。

スミレとは違い胴体と二の腕を椅子の背もたれと一緒に巻きつけられているだけである。肘から先や足は自由に動かせる様になっていた。

「コウセツ、目を覚ましたら一杯お話しようね」

エミナは椅子に縛り付けられた最後の一人、コウセツの髪を愛しそつに梳きながら囁く。

「最初はビツクリするだろうけど、大丈夫、あたしがしっかり全部教えてあげるから。すぐによくなるよ」

忍び笑いを含ませながら、エミナは髪を梳き続けた。

壁にかけられた時計から軽やかなメロディが流れる。時計を見ると、午後三時になっていた。

「う」

時計のメロディがきっかけだったのだろうか、コウセツの口からうめき声が漏れる。

エミナはさらに優しくコウセツの頭を撫でた。丁寧に丁寧に、まるで最上のガラス細工を扱うように、傷一つつけまいとする心根が動作ににじみ出ている。

静かなリビングで、コウセツの目が開いた。未だ焦点の合わない瞳で、辺りを見回している。

エミナはどこかぼんやりとしたコウセツを抱きしめると、極上の笑顔と共に言った。

「おはよ、コウセツ。これからあたしが治療してあげるね」

コウセツは顔を歪ませて、エミナを凝視する。口は何かを言おうとしているのだろう。しかし、声は漏れずに魚の様に開閉するだけだった。

コウセツの身体は冷え切り、小刻みに震える。

エミナはコウセツを暖めるように抱きしめると聖母の様に微笑んだ。

六月十四日

六月十四日、火曜日、コウセツはゆつくりと帰り仕度を進める。既に教室からは半数の生徒が居なくなっていたが、それを気にする様子はなかった。教室の生徒がいなくなる時を待っているように見える。

コウセツは空になった机の中を探りながら、横目で女子生徒を盗み見た。

目に付くのは、平均的な女子校生の三分の一もないであろう胸部、その見事な寸胴体形は一本の棒のようだ。

さらに視線を上げると、勝気な印象を与えるツリ目と目が合った。

「コウセツ、まだ終らないの？」

「もうちょつと時間がかかりそうだね。エミナ達は先に行つてよ。すぐ追いつくから」

コウセツは女子生徒、エミナから視線を外すと、何かを探すように鞆の中を覗きこむ。

「何か見当たらないなら手伝うわよ」

「うんうん、そうだよ。何探してるか教えて」

エミナとその隣居た黒髪が艶やかな和風美人、スマレが、コウセツの方へ歩いてきた。

コウセツは小さく舌打を打つ。

別段、コウセツに探し物などなかった。エミナと一緒に帰りたくなかったただだ。

昨日、エミナは、何処から聞きつけてきたのか、コウセツの恋人サチエについて尋ねてきた。その場は誤魔化したが、エミナは疑わしそうな目でコウセツを観察していた。

エミナが納得していないことは明らかである。

この話を蒸し返ささない為にも、コウセツはエミナと距離をおきたかった

「大丈夫、もう見つかったよ」

コウセツは爽やかな笑顔を作り、手早く鞆を閉める。

「なら、いいけど、それじゃ帰ろっ」

エミナは特に言及もせず、コウセツから背を向けた。

「コウセツ君、早く行こう」

満面の笑顔を浮かべたスミレが、コウセツの視界に入る。

「今日は皆で近くの屋台のバナナクレープを食べるんだから、それもエミナのおごりで。早くしなきゃ」

「ちょ、まっ、待ちなさいよ」

エミナは鬼気迫る形相で振り返った。

「あれは、ノートを借りたお礼に、スミレにだけおごるだけでしょ。と言うか、近くの屋台って、あの一つ一〇〇〇円もする馬鹿高いクレープの事言ってるのあんた！」

心底嬉しそうに笑うスミレに、エミナが抗議の悲鳴をあげる。

「えー、いいじゃない。エミナはノートが借りられてハッピー、私達はおいしいクレープが食べられてハッピーなんだから」

ね、とスミレが可愛らしく小首をかしげる。異性なら納得してしまいそうになる力を持った仕草だが、同姓の前では効果はなかった。  
「それじゃ、いきなり三〇〇〇円もむしりとられる、あたしのアンハッピーはどうなるのよ」

この世の終わりでも見た様に、エミナの顔が哀しみに歪む。

「気にしない、気にしない」

「気にするわよ！」

コウセツは、二人の漫才を一步はなれた所から、生暖かい視線で見守った。手を出せば被害が自分に集中すると判断したのだ。

「このままこっそり帰ろうか」

と、心の呟きを口から垂れ流すコウセツの肩が叩かれる。

「よ、コウセツ」

コウセツが後ろを向くと、特徴のない男子生徒が立っていた。髪はスポーツ刈りにされ、顔は良くもなく悪くもなく、体格も中肉中

背と言う、特徴を見つける事に苦勞する少年だ。

「何か用、ケンジ？ それと登場はもつと派手にやらないと、地味すぎて存在消えるよ」

コウセツは肩を叩いた男子生徒、ケンジに優しくアドヴァイスする。

「色々話し合わなきゃいけない事があるようだな、親友。だが、今日は構わない。それより、明日、駅前に遊びに行かないか？」

「明日かあ。どうしようかなあ」

ケンジの提案に、コウセツは眉を寄せた。

明日の放課後の予定はない。

コウセツとしては、ケンジと二人きりなら付き合っただけでも構わなかった。問題は残りのメンバーである。

「スミレさんも呼ぶの？」

コウセツの口からスミレの名前が出た瞬間、ケンジの頬が朱に染まった。

ケンジの分かりやすい反応に、コウセツの口元がにやける。

「こ、今回は、別に誘わないさ。ちょっと男二人で気兼ねなく遊びたいだけだ」

そっけなく話すケンジの様子に、コウセツは青春だなあ、と口の中で呟いた。

コウセツは未だに言い争っているスミレを一瞬だけ見る。艶やかな黒髪が、右へ左へと滑らかに踊っていた。

その隣で、わめいているエミナも視界に入り、コウセツは眉間に小さなしわを作る。

「うん、それなら、行くよ。でも、どこに行く気？」

コウセツが聞くと同時に、ケンジは肩に手を回し身を寄せた。一度、円陣を組むような体勢で、ケンジは囁く。

「駅前のアブラカタブラあるだろ。あそこの地下一階に、何でも”じゅうはっさいいじょうのおとな”を対象としたコーナーが出来たらしいんだよ」

「うわあ、アブラカタブラも思い切ったことするね。小学生も来るのに、エロコーナーを作るなんて冒険だよ」

ケンジの荒い鼻息を頬に受けながら、コウセツは何ともいえない表情を作った。

アブラカタブラとは駅前にある量販店の事だ。

中には、お菓子やジュース、服に布団、さらには家具にテレビ、パソコンまで、色々なものが並べてある。

値段も手ごろで、貧乏学生御用達の店として有名だ。

「ああ、俺もこの情報を聞いた時は驚いた。しかし、本当らしい。中に何があるか、今から興奮しないか親友」

鼻の下を伸ばすケンジに、コウセツは曖昧な笑みで応えた。

平均的な男子高校生らしすぎるケンジに、コウセツは一、二歩距離を置きたくなる。

「と、ともかく、明日はそう言う事で」

コウセツはケンジの腕の中から逃げようとするが、逆に引き込まれてしまった。

男臭い匂いが鼻につき、コウセツは顔をしかめる。

「下はTシャツでも着て、すぐ変装できるようにしとけよ。間違っても、制服で行こうとするなよ」

ケンジが真剣な顔で忠告する。瞳からは炎でもでいている様な熱い視線が発射されていた。

「分かってるよ」

いい加減、我慢の限界に来ていたコウセツは適当に返事をして、ケンジの拘束を振りほどく。

「それと」

そして、ついでに一発やり返す事にした。

「こう言う、いかにも怪しい事してます、と言いたげな仕草を今するなよ。こんな時こそ、クラスの空気と呼ばれる地味さを発揮して、地味に振舞ったら？ と言うか、地味に派手にならなくていいよ」

コウセツはケンジの熱臭い行動に対する怒りと、昨夜のエミナの

尋問で溜まったストレスをまとめて叩き付ける。

昨夜、コウセツは、エミナに恋人であるサチエの事をしつこく聞かれた。追求は十二時を過ぎても続けられ、エミナが諦めて電話を切った時には午前三時をまわっていた。

その所為で、昨日はサチエと話せず、今日の朝はいつもより寝坊して、寝不足で授業にも身が入らない状態だった。

と言うわけで、イライラしているコウセツの口調は冷たく、言葉は辛辣で、ケンジの心を砕くには十分すぎる破壊力だった。

コウセツは机に突っ伏しているケンジを見捨てて、スミレとエミナの方に意識を向ける。

二人の言い争いは終わったようで、スミレが口元に笑みを作り、エミナが空ろな笑い顔で立っていた。

エミナを無視して帰る訳には行かなくなったコウセツは、努めて爽やかな笑顔を作る。頬に手を当て、しっかりと笑顔が出来ている事を確認してから、コウセツはスミレの方へ歩み寄った。

「スミレさん、とエミナ、話し合いは終わった、でいいんだよね？」

コウセツはこれから飛び降り自殺でもしそうなエミナの様子に、心の中でいい気味だ、と笑う。

「うん、終わったよ。これから皆でクレープ食べに行くんだよ、エミナの驕りで」

「アハハハハハ」

スミレが笑顔で勝利を報告する後ろで、エミナが空ろな笑い声を出す。焦点の合わない目に顎が外れていると思うほど広げられた口、何かが壊れてしまったエミナがいた。

見てはいけないものを見てしまったコウセツはすばやく顔を背ける。

数秒、コウセツはゆっくりと顔を上げると言った。

「じゃあ、早く行こう」

コウセツは白い歯を見せながら微笑む。視線はスミレの瞳にだけ向けられていた。

決して、スミレの後ろにいる幼馴染へ視線を動かそうとはしない。  
むしろ、逃げ出すように早足で教室の外へ向かった。

「うん」

スミレは大きく頷くと、まだ笑っているエミナの手を掴む。コウ  
セツの様子に、何の疑問も持っていないようだ。

「それじゃエミナ、さっさと行こう。クレープが待ってるよ」

力任せにエミナを引き摺りながら、スミレは飛び跳ねるようにコ  
ウセツの後を追った。

六月一五日

六月一五日、コウセツはコインロッカー室の入り口近くで佇んでいた。制服と鞆はロッカーに預け、今は赤い派手なＴシャツをズボンの裾から出している。

「三〇、三一、三二、三三、三四……」

コウセツは駅へ向かうサラリーマンや学生達の人数を数えていた。別に交通量調査のバイトをしている訳ではない。

ロッカー室から出てこないケンジを待っているのだ。

昨日の約束通りケンジとアブラカタブラへ行く為、鞆や上着をロッカー室に預けに来たのだが、ケンジが中々出てこない。仕方なくコウセツはロッカー室の前で、ケンジを待っていた。

人数が一〇〇をカウントしたところで、コウセツは痺れを切らし、ロッカー室の中を覗く。

丁度、準備が終わったのだろう。ケンジがロッカー室から出て来た。ケンジは茶色地に白抜きロゴが入ったＴシャツに、薄緑色のズボンを身に付けている。

どうやらＴシャツだけでなく、ズボンも用意していたようだ。遅くなったのはその所為だろう。

「よっしゃ、それじゃ行こうか」

ケンジが鼻息を荒くしながら、宣言する。かなり興奮している様だ。

「そうだね」

コウセツは、ズボンまで用意していたケンジの気合に呆れながらも頷く。

尚、コウセツのズボンは学生服のままだ。流石にコインロッカー室でパンツ一丁になるだけの気合を持ち合わせていない。

二人はロッカー室前から、人の流れにのって歩き出した。暫く歩いた所で、ケンジの口が開く。

「コウセツ、日曜日どうするんだ？」

「日曜日で、しつこいなあ。用事があるから、そっちが優先だよ」

コウセツはもう何度口にしたか分からないフレーズを口に出す。

その口調はぞんざいだ。

朝から休み時間の度行われるやり取りに、コウセツはいささか疲れていた。

「でも、折角スミレさんが誘ってくれたんだぜ。お前が断った所為で、朝からずっと落ち込んでるしさ」

ケンジがどこか悔しそうに呟く。

その瞳には非難の色がありありと浮かんでいた。

「そりゃ、断ったのは悪いかもしれないけど、用事があるんだから責められる謂れはないよ。」

大体、そんなに四人一緒がいいなら、来週の日曜日にでもしたらいいじゃないか」

コウセツは、舌打ちを打とうとしてやめる。仮に聞かれて、あらぬ誤解を受けたくはない。

コウセツは心の中で、クソエミナ、と幼馴染を罵倒するに留めた。もともと、四人で行く必要も、今週の日曜日に強行する必要もないのだ。それをエミナの無神経な言動が、絶対今週日曜日に行かなくてはいけない様に勘違いさせている。コウセツに恋人がいないかを探る為に言った事なのだろうが、その所為でコウセツの評判はかなり落ちた。

今思い返してもハラワタが煮えくり返る所業だ。

「そりゃ、そうだけどさ。でも、折角スミレさんが誘ってくれたんだ。考える素振りくらいあってもよくないか？」

「うるさいよ。僕の用事は日曜日にしか出来ないんだから、断るしかないよ。ドタキャンよりはいいじゃないか」

コウセツは自身の顔に陰ができていると自覚しながら、それを隠す事が出来ない。

「そうかもしれないけどさ。それで」

「あーっ、この話はお仕舞い。じゃないと、ここで帰るよ」  
話題を続けようとするケンジを、コウセツは睨みつける。

コウセツの苛立ちの度合いが分かったのか、ケンジは分かったと  
口を噤んだ。

少々気まずい雰囲気のまま、コウセツとケンジはアブラカタブラ  
へと入っていった。

アブラカタブラは小さめのテナントビルを改装したつくりとなっ  
ており、店内はそれほど広くない。しかし、ディスプレイの方法が  
巧みで、所狭しと並べられる商品で区切られた店内は通路が狭く視  
界も悪い為、その広さを二倍にも三倍にも感じさせた。

ケンジとコウセツは階段を降り、どぎついピンク色の暖簾の前に  
立つ。

暖簾にはセクシーな女性の影画と”ADULT ONLY”と言  
う文字がプリントされていた。見るからに怪しげなカーテンだ。

「コウセツ、ここから先は大人の世界だ。覚悟はいいか」

「別にシリアスになる必要もないから、さっさと入ろう。人に見つ  
かったら恥ずかしいよ」

咽を鳴らして唾を飲むケンジを無視して、コウセツはあっさりと  
カーテンを潜る。

「あ、待てよ、コウセツ」

慌てた様子でケンジはコウセツの後を追った。

中は一面ピンク色だ。原色をそのまま塗ったようなパッケージに、  
色々と製品が入った棚や、妙に安っぽい生地 of 服が陳列している。

ケンジとコウセツはその中を心行くまで物色する。

小一時間程たった所で、二人はカーテンの中から出てきた。二人  
は何処かすっきりとした顔で、アブラカタブラを後にする。

「コウセツ、大人の世界って凄いな」

「うん、ランドセルとかベビー服は予想外だったよ」

ケンジとコウセツは、お互いの顔を見つめると握手した。

「ありがとう、コウセツ。お前がいなけりゃあの桃源郷を覗く勇氣

は出なかった」

「いや、僕の方こそありがとう、ケンジ。また一つ、大人の階段を昇ったよ」

そこには男達の熱い友情があった。

その後二人は、己の熱い情熱をぶつけるように、ゲームセンターで対戦し、程よい熱をもったままカラオケボックスへ入る。

カラオケボックスは、ケンジが最近知った穴場らしく、一時間三〇〇円という激安の場所だ。

カラオケボックスに入ったコウセツは、疲れたようにソファへ倒れこむ。

「疲れた」

「お疲れ。流石に、あれだけ客引きに会うとは思わなかった。もてるなあ、コウセツ」

リモコンを弄りながら、ケンジが労う。

「うつさい。それより何で、こんなところにあるカラオケボックス知ってるんだよ。確かに安いけど、来るまでが地獄じゃないか」

コウセツは、ゲイバーと風俗店に囲まれた通りを思い出し、大きくため息を吐く。

「ここは知り合いから聞いたんだ。それに、まさかあそこまでモテるとは思わなかったんだよ」

「あれをモテるとは断じて言わない。路地裏まで引つ張り込まされた時には、本当に貞操の危機だと思ったんだ」

「ご愁傷様、とケンジが笑うと、曲が流れ始めた。一昔前に流行った曲だ。

ケンジはマイクを持つと、歌いだす。

目立って良いところも悪いところもない、可もなく不可もない歌い方だ。

曲が終ると同時に、コウセツはおざなりに拍手をして、感想を一言述べる。

「選曲、歌い方、どれも地味だけど、別に気になるほどじゃないね。

枯れ木に花の賑わいと言う感じがな？」

「心に突き刺さる感想をありがとう」

「じゃあ、次は僕の番だね。」

聞けっ！

これが魅せる歌だっ！」

静かに物悲しいメロディーが流れる。コウセツは肩でリズムを取りながら、歌い始める。

「あーるうはれたーひーるー」

「ドナドナかよっ！」

すかさず入るケンジの突込みを無視してコウセツは歌い続けた。場のテンションは一気に下がる。

対抗するようにケンジが、テンションの上がる熱い歌を歌った。しかし、コウセツが童謡などの英語版を歌いテンションを下げる。

よく分からない一進一退の攻防を二人は二時間、時間ギリギリまで繰り返した。

帰り道、コウセツは鼻歌を歌いながら、住宅街を歩く。その足取りは軽く、今日一日分のストレスは発散したように見えた。

隣にケンジは居ない。数分前に分かれていた。

コウセツの家がある通りに出ると、自宅前に人影が見える。人影は塀に背を預けながら、こちらを見ていた。

「エミナ」

人影の正体を呟く。

暗がりで見界は悪いが、それでも見間違えるはずがない。生まれた時からずっと一緒に居たのだ。その姿は輪郭や仕草だけでも判別できる。

「遅かったね、コウセツ。何してたの？」

「別に、エミナには関係ないよ」

コウセツはエミナを無視して、家に入ろうとした。しかし、エミナに手を捕まれ、止まる。

「関係あるよ。あたし、コウセツが好きだもん。コウセツの事なら

何でも知りたい」

エミナに手を引っ張られ、コウセツは強引に振り向かされた。可愛い台詞とは裏腹に、エミナは酷く冷めた表情だ。

「知ってるし、その気持ちは嬉しいけど、それとこれは話が違うよ」  
コウセツは照れくさそうに頬を掻く。

中学二年の夏以来、何度も聞かされた台詞だが、それでもコウセツの頬は少し赤くなった。幼馴染とは言え、それなりに点数の高い女から好きと言われれば、悪い気はしない。

「違わないよ。あたし、見たよ。コウセツがエッチなお店がたくさんある所に行くの」

エミナは頬を膨らませて睨んだ。勝気な印象を与えるツリ目が、さらに釣り上がる。まるで、威嚇する猫の瞳だ。

「確かに、そっちに言っただけど、ケンジと一緒に安いカラオケに行っただけだよ」

「そんな事ない。何で嘘つくの？」

「嘘、て……全部本当の事だよ」

嘘と断定するエミナに、コウセツは戸惑う。

「ねえ、あたしの何が不満なの。この胸かな？ あの女に見たいに、胸が大きかったらいいの？ そしたら、コウセツはあたしを見てくれるの？」

胸が大きいフレーズで、コウセツはエミナが何を見て何を誤解しているのか分かった。

コウセツを路地裏まで引っ張り込んだ男は確かに、胸が大きかった。それに小柄でドレスなんて着てたから、遠目には女に見えたかもしれない。

「そりや誤解だ。あれは無理やり、連れ込まされただけで、すぐに逃げたよ。それにあれ、男だよ」

あの時を思い出したコウセツは、鳥肌を作り、顔色を真っ青に染めた。悪寒と恐怖に身を振るわせながらも、これで誤解は解けたと思ったが、そう上手く物事は運ばない。

エミナがその場に崩れ落ちた。

「コウ、セ、ツ、おと、ぐす、男の人が、ぐす、好きだっ、だったんだ」

エミナの瞳から流れ出た涙が、アスファルトを黒く染める。

「違うわ、ダボツ！」

とんでもない勘違いに、コウセツは思わず素で突っ込んだ。

「なんでそんな変な勘違いが出来るんだよ！」

「だ、だつてえ」

地が出たコウセツに、エミナは目と鼻から水を流しながら応える。

「コウセツ、今年に入ってから、ぐす、い、一度もシてくれ、ぐす、ないし。」

ぐす、やす、ぐす、休みの日は、ぐす、コソ、コソどこか行ってるのに、ぐす、女とは遊んでない、ぐす、と言うから……

て、つてきりい」

コウセツはエミナの頭を引っぱたいた。パンツと小気持ちよい音が鳴る。

「そんな事で、人をホモ扱いするんじゃない。たく、馬鹿らしい」

「馬鹿らしい、てひつどい。こっちは真剣に悩んでるんだから。大体、コウセツが悪いんじゃない！」

エミナは頭を抑えて立ち上がると、猛然と抗議する。既に涙は止まっていた。

「悪いってなにがだよ。そっちが勝手に変な想像しただけだろっ」

「そんな事ない。大体、コウセツがあたしともっとイチャイチャしてたら、こんな風に考えなかったわよ」

「ふーざーけるーなー、いつも我が物顔で家に来て、人のだらけた休日を奪う奴が偉そうな事言うな！」

「コウセツがもっとちゃんとしてれば、いいじゃない。そうしたら、あたしも一々あんたの世話に行かないわよ」

売り言葉に買い言葉、既に最初のきっかけも忘れて、エミナとコウセツはお互いを罵り合う。

その声の大きさに、家から顔を出すおばちゃんや兄ちゃんが居たが、二人の顔を見ると納得したように家に戻った。

罵り合いはどんどんエスカレートする。終に螺旋を描くように一周し、エッチをしないのは愛がない証拠か否か、と言う論争に入った。

「だから、そんなに欲求不満なら、一人で処理しろよ。俺は、お前ほどエロエロじゃないんだ！」

「エロエロって、それはコウセツの事でしょ！ このむつつり星人「むつつりとはなんだ、むつつりとは！」

「むつつりじゃない！ 今日だってケンジと一緒に、アブラカタブラのエロコーナーに入って、一時間も出てこなかったじゃない！ いやらしい、中で何やってたんだか」

エミナの言葉で、コウセツの心は冷水を被ったように一気に冷めた。大げさにため息を吐くエミナに、コウセツは冷めた口調で尋ねる。

「おい、なんで、お前がそれを知ってるんだ？」

あ、とエミナは自分の失言に気づいたのだろう、慌てて口元を押さえるが、遅すぎる。

「今日俺たちを見たのは偶然なんだろ。何で知ってるんだよ？」

コウセツはエミナを睨み付けた。

視線から逃れるようにエミナは俯く。紅潮していた顔は青く変色していた。

「まさか、とは思っけど……後をつけてきたのか？」

コウセツは静かに、強い口調でエミナを詰問する。

エミナは答えず、ただ一瞬だけ体を震わせた。

その動作だけで、コウセツは自分の考えが正しい事が分かった。

「何とか言えよ」

「ごめん、なさい、ごめんなさい」

エミナは嗚咽の伴った謝罪を口にする。

「お前可笑しい。と言つかキモイ、ストーカーかよ」

コウセツの嫌悪感を滲ませた声で罵倒した。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

エミナは壊れたテープのように、ごめんなさい、を繰り返す。

「もう、いい。二度と家に来るな」

コウセツは一方的に話を打ち切ると、自宅に入った。背中に浴びせられる謝罪の声に、コウセツは苛立ちと嫌悪しか感じない。

六月一六日

六月一六日、木曜日、コウセツは昼食と一緒に食べようと誘うエミナを振り払い、何かから逃げるように早足で部活錬に向かった。

顔色は悪く、真っ青である。

赤いテープが付いたドアの前で、コウセツは立ち止った。左右を見て誰もいない事を確認すると、素早く中へ入る。静かにドアを閉めて、鍵を閉めた。

コウセツはドアに耳を付けて、廊下の様子を探る。廊下に人の気配がない事を確認し、胸を撫で下ろした。

「よし、追って来てないな」

青ざめた顔に、若干赤みが戻る。今朝から張り詰めていた神経が緩んだ。

「ようこそ、名も知らぬ隣人」

何の前触れもなく声が響く。その声は妙に甲高く機械的で、生身の人間が発する事のできる種類ではなかった。

不意打ち気味に声をかけられたコウセツは、慌てて室内を見渡す。室内には、学生用の机とスピーカーが一つあった。他に物はない。殺風景な部屋だ。

先ほどの声はスピーカーから出たものだろう。

耳を澄ますと、スピーカーからノイズが聞えてくきた。

「願いは何だ？」

スピーカーから一方的に問われる。

「願いは何だ？」

戸惑うコウセツを無視して、スピーカーは再度問うた。

はじめは驚いていたコウセツだが、すぐに問いの意味を理解する。  
「あんたがなんでも願いを叶えてくれる悪魔部の悪魔さんなんだね？」

「……悪魔部の悪魔かは分からない。ただ、願いを叶えるだけだ」

コウセツはスピーカーの応えに、不満そうに鼻を鳴らした。

「願いを叶えられるなら、証拠を見せてよ」

「何故だ？」

「僕の願いを叶えられなかったら困るんだ。だから、願うなら確実に叶う保障がほしいんだ」

コウセツは口元に嫌な笑みを張り付かせながら、堂々と勝手な事を言う。

勝手な事を言いながらも、怪しいギミックがないか室内を一瞥した。スピーカーからコウセツに声をかけたのだ。何かしら室内の様子を観察できる仕掛けがあるはずだった。

しかし、室内におかしい所は見当たらない。机とスピーカー以外に監視カメラがあったが、廊下や体育館、校庭等でよく見かけるもので特別珍しいものではなかった。

「分かった。窓の外を見る」

コウセツはスピーカーの声に従い、窓際に立つ。中庭で昼食を食べる生徒達がガラス越しに見えた。

「こんな所に立たせて、これから面白いショーでも始めるのかな？ 悪魔の力で中庭にいる連中を全部殺す、とか？」

コウセツは忍び笑いをもらす。そんな事は出来るわけがない、と決め付けていた。

「それが願いならば、叶えよう」

スピーカーは淡々と言う。

感情の籠らない口調に、コウセツの顔が強張った。あまりにあつさりとした様子に、出来るのか、と言う不安が胸を刺す。

「それは、願いじゃないよ。それより、何を見せてくれるわけ？」

コウセツはもう一度笑おうとするが、口元が引きつるだけに終わった。

「因果律への干渉だ。中庭、中央にいる眼鏡をかけた生徒が居るだらう？」

「居るね。木下で一人弁当を食べてる。友達いないのかな」

「その生徒の上に水が降り、水浸しになった生徒は左隅のベンチで食事をしている女子生徒に連れられて保健室に行く。

その後で、本を片手に持った男子生徒が東口から中庭に入り、足を滑らせて頭を打ち病院へ行く」

「ふうん、本当かな？」

コウセツは気のない返事を返す。

仮にスピーカーの言う通りの事が起こったとしても、それは何の保障ならない。エキストラを使った演出の可能性がある。

そして、コウセツはこの悪魔部を胡散臭いと感じていた。

この場所を知った経緯もかなり怪しいものがある。

今日の休み時間、移動教室中に偶々他のクラスの生徒が悪魔部について話しているのを盗み聞いたのだ。それすらもコウセツをはめる為の芝居だったのかもしれない。

そこまで考えて、コウセツは馬鹿らしいと頭振った。

そん手の込んだ事をして得する人間などいない。考えすぎだった。コウセツは、大人しく悪魔部の悪魔、その力を見せてもらいまいしよ、と心の中で呟く。

そして、それは起こった。

一人弁当を食べていた生徒に空からバケツが落ちる。バケツは生徒の頭に直撃し、そのまま生徒の頭をすっぱり収めた。

当然、バケツの口は下を向く事となり、生徒はバケツの中に入っていた水を全身に被る事になる。

驚いた生徒は立ち上がろうとするが、そのまま足を滑らせて転んだ。

近くで見ていた生徒が遠巻きに観察する中、女子生徒がバケツを被った生徒に駆け寄る。

バケツを被った生徒は足をくじいたらしく、足を押さえていた。

女子生徒はバケツを取ってやると、自身が濡れる事も構わず濡れた生徒に肩を貸し、中庭から出て行く。

行き先は保健室だろう。

「ここまででは、本当みただね」

コウセツは引きつる口元を隠しながら呟く。言いようのない怖さを感じながら、視線を既に東口に向けた。

女子生徒と濡れた生徒と入れ違いに、東口から男子生徒がやってくる。

男子生徒は本を読みながら歩いた。これは、本を持って歩いているとも解釈が出来る。

男子生徒は大きく足を広げ、本を読んでいるとは思えない速さで歩いていった。男子生徒は東口から真っ直ぐ進み、西口に向かっていくようだ。

途中、バケツの水がばら撒かれた上を通るが、別段足を滑らせることはない。

コウセツは安堵の吐息を漏らした。

「なんだ。最後の最後で外れたじゃないか。散々、驚かせておいて、ハツタリだったの？」

小馬鹿にしたように笑うコウセツの目の前で、男子生徒の足が跳ね上がった。

男子生徒はそのまま見事に後頭部から倒れ、動かない。どうやら気絶しているようだ。

何が起きたか理解しようと、コウセツは窓にへばり付く。

男子生徒の足元には、排水溝と誰かが捨てたビニール袋があった。どうやら、排水溝の上に乗ったビニール袋を踏んで、足を滑らせたようだ。

足の裏が濡れていた事も原因の一つだろう。

あっけに取られた様子で、コウセツは窓の外を見た。

何処からともなくサイレンが聞えてくる。誰かが救急車を呼んだようだ。

「これで満足か」

「これは、本当の事でいいの……かな？」

コウセツは振り返ると、信じられない顔付きでスピーカーを見下

るす。寒々とした恐怖が全身に絡み付いてきていた。

「ああ、そうだ。現実だ」

スピーカーから聞える無機質な声が、強い恐怖となってコウセツの身体に絡みつく。

自然とコウセツの呼吸が早くなった。

「改めて聞こう、願いは何だ？」

その一言に、コウセツは自分が願いを叶えに来た事を思い出す。

「エミナと二度と関わらないようにしたい」

口に出すと同時に、コウセツの胸から何か重石が取れた。今まで我慢してきたものが恐怖と共に開放される。

「死んでも会えなくなるが、良いのか？」

「構わない。むしろ、そっちの方が清々するよ」

コウセツは、溜まっていたものを吐き出すように続けた。

「エミナは可笑しい。」

正気じゃない。

気が狂ってる。

昨日、ストーカーしてたんだ。

それだけじゃない、その後携帯に電話をかけてきた。それも一時間休まず、だ。着信拒否をする間すらない。

その後は、同じ文面のメールが一晩中ずっと届くんだよ。全部自分が僕の恋人だ、と言う内容なんだ。

結局、携帯のバッテリーを抜かなきゃ寝る事だって出来なかった。今も、怖くて携帯なんか持つてられない」

昨日の夜を思い出したのか、コウセツの顔が真っ白になる。声はどんどんヒステリックになり、息遣いも荒くなってきた。

「その上、あいつ、今朝は何もなかったように笑うんだ。信じられるか？」

きつと一晩中メールしてたんだ。

その癖、朝六時に家を出たら、玄関前でエミナが笑っておはよう、と言うんだ。どんなホラーだよ。

エミナと死んでも会えなくなる？

ああ、結構だね。最高だ。ハハハ、笑いが止まらないよ」

コウセツは腹を抱えて笑う。真っ白い顔の中で、唇だけが紫に変わっていた。ハの字に曲げられた眉の下で、目だけが忙しく動き回っている。

「願いを受けよう。しかし、人の繋がりを切り離すには、それなりの力がある。隣人、君の力も必要となる」

コウセツの笑いが止まった。くの字に曲がった姿勢を正し、爽やかな笑みを浮かべている。

「何をさせようって言うのかな？ まさか、エミナを殺せとか言わないよね？ それじゃあ、本末転倒だ」

「違う。」

今から六日後の昼休み、隣人、君は大崎スマレと言う女子生徒からメールを受ける。

そのメールで、校舎裏に呼び出される事になる。そこで君は、大崎スマレに告白される。

その告白を受けて、付き合えばいい」

「待ってくれ、それは困る」

コウセツは首を大きく横に振った。

「僕には他に恋人がいる。その告白は受けられない。むしろ、迷惑だよ」

コウセツの脳裏にサチエの顔が浮かぶ。頭の中のサチエは、柳眉を逆撫で烈火のごとく怒っていた。

「大丈夫だ。その程度のアフターサービスは既に術式に組み込んである。」

大崎スマレの告白を受ければ、大崎スマレ、今宮エミナの両名と二度と会う事はなくなる。

遅くとも二ヶ月、その間だけの我慢だ」

スピーカーの言葉に、コウセツの額に脂汗がにじみ出る。

「……詳しくは聞かないけど、その所為で恋人と別れる可能性はあ

るのかな？」

「ない。安心しろ、隣人。怯えずとも、君の願いは叶う」

最後の一言にコウセツの眉が跳ね上げるが、コウセツの口元には笑みが張り付いたままだ。

コウセツは少し逡巡した後、言った。

「分かった。本当に貴方の言う様にスミレさんが告白してきたら、全部信じるよ。そうでなかった、この事は冗談として忘れる。別にいいだろう？」

「もちろんだ隣人」

「ならよかった。それじゃ、退散させてもらうね。もう、昼休みが終わりそうだし」

コウセツは腕時計で時間を確かめる。昼休みは残り七分程しか残っていなかった。教室に帰る時間を考えるとゆっくりしている余裕はない。

ドアから出ようとするコウセツに、スピーカーが思い出したように声をかけた。

「ああ、それと、告白の時、携帯電話は新しいものに変えておけ。今、隣人の持つ携帯は、大宮エミナの念がしがみついている。それがあると、失敗する可能性がある」

「ご忠告感謝する。今日にでも早速、新しいものに換えるよ」

コウセツは振り返らず応えようと、ドアから出て行く。その顔は、昼休み前に比べて少々血色がよくなっていた。

六月一九日

六月一九日、日曜日、その日は天気予報で全国各地全て晴れと予報される絶好のデート日和であった。

今日、恋人のサチエと過ごすはずだったコウセツは、スマレ、エミナ、ケンジと共に、遊園地に来ている。

先週の水曜日、六月一五日にスマレから誘われた遊園地だ。

こいつの所為で、とコウセツは恨めし気にエミナの後頭部を睨みつける。

コウセツがデートを断った原因はエミナだ。

この一週間、エミナの異常ぶり日に日に酷くなっていった。いつもコウセツにまわりつき、片時も離れようとしない。四六時中監視されている状態だった。

その所為で、部屋の中に居てもエミナの視線を感じてしまう。

仮にサチエとデートしたとしても、後をつけてきたエミナに邪魔される事は簡単に予想できた。

コウセツは仕方なくサチエとのデートを断るが、詳しい事情を話せるわけがない。当然、サチエから浮気を疑われもした。それでも何とか説得したのだ。

ストーカーに悩まされ、恋人からは浮気を疑われ、踏んだり蹴ったりな状態である。

その現状であるエミナはスマレと一緒にコウセツの前を歩いていた。

エミナはジーンズに地味な色合いのＴシャツとパーカーを着ている。コウセツの目には、程よく地味な目立ちにくい、往来で人を刺してもすぐ雑踏にまぎれそうな服しか見えなかった。

「ニコニコしてご機嫌だね、スマレ」

エミナはスマレの頬をつつく。

「いきなりコウセツ君も一緒に遊べる事になったんだから嬉しいよ。

ほら、こう言うのは人数が多い方が楽しいんだから」

弾むようなリズムで話すスミレの言葉に、コウセツはため息を吐く。

実際、突然だった。

今朝、今日はやる事がなくなった、と消沈しているコウセツを、エミナが強引につれて来たのだ。目が笑っていない、濁った瞳、と言う表情を、その時コウセツは初めて見た。

エミナの瞳を思い出し、コウセツは寒気に襲われる。

「このキチガイ」

コウセツは口の中で呟くと、エミナから距離をとろうと半歩に退いた。

半歩退いた世界から見ると、ただ遊園地を楽しんでいる様に見える。自分だけ悪い夢に囚われている様に感じた。

近くのアトラクションから聞える歓声や森の小人をイメージした着ぐるみも、現実感を持つ事が出来ない。

コウセツは、はしゃぐ三人の様子を観察する。

左端を歩くエミナ、彼女は今までのストーカー行為が嘘の様にいつも通りだった。苦手な絶叫系の前で涙目で首を振り、コーヒータップでは回転数を上げすぎて酔う。

つい一週間前までコウセツが知っていた幼馴染の姿があった。

エミナの右側、三人の真ん中には今日のホスト、スミレだ。

白のブラウスにレースのついたスカート、漫画に出てきそうなお嬢様のイメージそのままの姿で歩いている。

エミナを無理やりジェットコースターに乗せたり、ゴーカートでは二位に居た奴をクラッシュさせてブービーを免れたり、何時も通りやりたい放題やっていた。

コウセツは、ふとスミレの悪気のない顔の下にはどんな狂気が渦巻いているのだろう、と考えてやめた。

全ての女がエミナの様に可笑しいわけではない。きっとスミレは繊細で純粋な女の子だ、と自分に言い聞かせる。

そして、コウセツの視界右端にはケンジがいる。

スミレ達の姿に見とれながら、二人の会話に気の抜けた相槌を入れていた。最初はそれなりに話を振っていたスミレとエミナも気の抜けた相槌に飽きたのか、今では殆ど無視している。

しかし、顔を見る限り、本人はいたって幸せそうだ。

何が楽しいのだろうか、とコウセツは思う。コウセツからして見れば、現状は砂で出来たりんごを食べる様に味気なかった。

サチエと一緒にいたら違うんだろうか、とコウセツは今日会わずだった恋人に想いをはせる。

「コウセツ」

ケンジに呼びかけられ、コウセツは空想から現実に取り戻された。

「え、あ、何？」

「だから、何飲んだ？」

「あ、ああ、飲み物だね。コーラーかな。と言うか、僕も行くよ。一人で四つは大変だろ？」

ケンジにコウセツは笑顔で申し出る。

遊園地内に自動販売機はなかった。

飲み物は売店で紙コップに入ったものだけが売られている。缶ジュースならまだしも、紙コップで四つは一人で運べる量ではない。

「いや、大丈夫だ。エミナも野暮用で売店まで行くから」

「野暮用？」

コウセツは小さく首を傾げた。

今日は一日自分を監視するのだろう、と思っていたコウセツは軽い衝撃に見舞われる。

エミナの様子を見た瞬間、コウセツは事情を理解した。

エミナは太ももをすり合わせ、何かに耐えるように目を閉じていた。頬は赤く染まっており、指先が忙しく動いている。

「ああ、トイレね」

「言うにやっ！」

野暮用を言い当てたコウセツを、エミナが睨みつけた。ただでさ

え赤かった顔がゆでたこの様になる。それでも掴みかからないのは、もう限界に近いのだろう。

「分かった、それじゃ、僕とスミレさんはこの辺りで待ってるよ」

「おう、それじゃ行つて来る。それと、ん」

行つて来る、と言いながらケンジは開いた右手をコウセツに突き出す。

何となくコウセツはその手に自分の手をのせた。俗に言う、お手である。

「ちつがう。金だよ、金、ジュース代二〇〇円さつさと出せ」

「はいはい、それじゃコーラお願いします」

コウセツから一〇〇円玉を二枚渡されたケンジが、エミナの後を追う。我慢できなくなったのだろう、エミナは股間を太ももで締め付けながらすり足でトイレを目指していた。

「あれは、途中でバーストとかあるのかな？」

哀れみと少々の悦びを声にのせ、コウセツは一人呟く。

「それは止めてほしいなあ。折角の遊園地が台無しだよ」

いつの間にか隣に立っていたスミレが応えた。

「そうだね」

コウセツは心から頷く。遊園地から帰れば、一人でエミナと対峙しなくてはならない事は分かりきっていた。家に家族がいても、部屋に押し入られたらお仕舞いだ。

人目のある場所で適度な距離で関わる方がまだ安全である。

そう言えば、とコウセツはスミレが自分に告白するかもしれない事を思い出す。

告白された時、サチエにどう言い訳しようか、と考えようとしてやめた。

どうせ二ヶ月程度の付き合いにしかないのだ。たいした問題ではない。

「じゃ、そこに座って待ってようか」

コウセツは、一応惚れてくれた礼儀と打算から微笑みを浮かべ、

適当なベンチを指差した。

ベンチは木陰に隠れており、涼しそうだ。

スマレとコウセツはベンチ座ると、取りとめのない話をする。

内容は主に学校の事だったが、それ以外にスマレの趣味等、プライベートな情報をコウセツは聞き出せた。

頬を赤めらせ楽しそうに話すスマレの姿は、コウセツから見ても愛らしいものがある。少なくとも、エミナに感じるような嫌悪感や面倒臭さはなかった。

久々にまともな異性と二人っきりで話せる事もあって、コウセツの声のトーンが普段より上がる。

「それで、スマレさんはどう思うの？」

「私は、むしろ、チャーリーの物悲しさが際立った話だと思うよ。だって山南とお互い憎からず思っていたのに、髪の毛も瞳も黒なのに、それでも生まれが違っただけで殺さなくちゃいけないなんて悲しすぎるよ」

スマレはその時の事を思い出したのだろう、ハンカチで目元を拭く仕草をする。

「ああ、確かに風邪ちりの中でも屈指の泣きカットだね。あそこで全日が泣いたらしい」

コウセツの脳裏に、血まみれで美人剣士を抱きしめるチャーリーの死に様が浮かんだ。

「うん、うん、分かるよ。だってあの死に方は反則だよ。」

山南殿の手にかかるとは拙者は幸せすぎます、て囁くんだもん。普通の女の子なら、後追い自殺モノだよ」

ずび~~~~、とエミナは鼻を噛む。

「それじゃ、山南は女の子じゃないの？」

コウセツの問いに、スマレは首を縦にふった。

「山南は、女の子に決ま<sup>おこめ</sup>ってる。」

でも、先ず始めに武士なんだよ。だから、あそこで死ねなかったんだよ。

悲劇だよ」

「ああ、後を追ったら、残された仲間がどうなるか、それを考えて死ねなかったか。それでもやっぱり死にたかったのかな？」

山南とチャーリーの恋物語は二クルーも使って丁寧に描かれた。これは山南がチャーリーと一緒に死ぬ為ではないか？ とネットのコミュニティでも未だに論議が繰り返されている話である。

「うっん、きつと今でも死にたいんだよ。すぐにでもチャーリーの所に行きたいに決まってるよ」

「でも、竜馬編でも京都防衛編でも、山南は死のうとしないよ。死ぬるチャンスはあったのに、本当に泥を嚼つてでも生きようとしてる。それって可笑しくない？」

ネットでも議論の焦点となっている所だ。

死にたいなら死ぬる時があるのに死のうとしないのは可笑的い、死ぬ気なんてない、と言う派閥と、仲間たちを見捨てられない、山南が居なくなれば誰も裏方が居なくなつて組織の屋台骨が壊れる、と言う派閥が激しく、それこそ掲示板のサーバーがダウンしても議論続けるが、未だに決着はついていない。

「可笑しくないよ」

スミレは首を横に振った。

「チャーリーは天国を夢見て海を越えてきたんだよ。だから、山南は仲間のチャーリーの死に絶えたここを天国にしようとしてるんだよ」

スミレの幼い話に、コウセツは笑いそうになる。

人に欲望がある以上、どこまでも人はより楽により手軽に求めるものだ。少なくとも平等がない以上、不満があつて当然だ。

なら天国とは何だ？ 平等、平穏、安寧、飽食、怠惰、希望、人の夢見る願いはあるが、それら全てを叶えられるわけがない。

だから、天国なんてあるわけがないのだ。

「天国？ そんなの人の解釈次第じゃない。そんなのどうしようもないよ？ ある人の天国は、別の人にとって地獄かもしれないんだか

らさ」

「うっん、違うよ。天国はね地獄と一緒になの」

「一緒、てそれじゃ地獄じゃないの？」

スミレは首を振って、否定の意を示す。

「昔、お坊さんから教えてもらった話だけど、地獄も天国も人が暮らすのに十分な恵みが神様から貰えるんだよ」

なら変わらないじゃないか、と言おうとしてコウセツは言葉を飲み込む。まだ、話は終わってないからだ。

「でも、天国と地獄は全然違うんだって、それは」

「おっ待たせ！」

スミレとコウセツの間に紙コップが挟まれる。コップの中ではオレンジジュースの毒々しいオレンジが光り輝いていた。

コウセツがオレンジジュースを掴む手から腕へと視線を写していくと、口元が引きつった笑みを浮かべるエミナが左手に持ったジュースを突き出してきた。

「あ、スミレありがとう」

「……ありがとう」

スミレは、先ほどまで目にハンカチを当てて鼻水を出していたとは思えないさっぱりとした笑顔をエミナに向ける。

コウセツはそっけなく差し出された紙コップを受け取った。

二人が紙コップを受け取った事を確認すると、エミナはコウセツとスミレの間に、強引に腰を下ろす。

隣で、エミナは飲まないの？、のどか湧いてないから、と穏やかに話すエミナとスミレを見て、コウセツは言った。

「女は嘘つきだ」

後半は、口に流し込んだコーラの所為で音にもならない。

コウセツはフライドポテトを隣から拝借すると、コーラと一緒に流し込んだ。

コーラは炭酸が抜けていて、フライドポテトは冷めて油がべとべとについている。観光地らしいまずさだ。

「コウセツ、人のポテト勝手に食うなよ」

何時の間にか隣に存在していたケンジが文句を言うが、聞く耳を持つ気はない。

後三時間ぐらいのんびりパシリしてくれよ、お前の所為でエミナから飲み物受け取っちゃったじゃないか、と完全な八つ当たりをぶつける為、コウセツは更にまずいフライドポテトを摘んだ。

「コウセツ、ちょっとは遠慮しろよ」

「え！、独り占めするの。なんて言うか、意地汚く見えるよ。地味に印象悪いし、みんなで食べた方がいいんじゃない？」

コウセツの言葉に、大きく肩を落としたケンジは、力なくフライドポテトをコウセツへ差し出す。

「分かった。好きなだけ食へ」

「ありがとうケンジ、脂ぎって健康に悪いフライドポテトを頂くよ」

「本当の事だが、そう笑顔で言われると殺意が湧いて来るんだ。これは正常な反応だよな？」

フライドポテトを頬張りながら、ケンジは握り締めた拳を振りかぶった。

「あ、次の乗り物に行くみたいだ。急ごうケンジ」

コウセツはケンジの威圧をかわし、スマレとスマレに引きずられるエミナの方へ小走りで逃げた。

背後から、逃げるな、と言う趣旨の没個性的な叫びが聞えてきたが、コウセツは無視する。

あのエミナが泣きながら嫌々しているのだ。これ程愉快的な見世物はない。

コウセツ達はその後、この遊園地最大の売り、スペシャルサンダーに四人仲良く乗った。

そして、それが遊園地で最後に乗ったアトラクションとなった。

エミナが泡を吹いて気絶したのだ。係員の呼びかけで目を覚ましたエミナは、泣き叫びながらスペシャルサンダーから逃げ出し、その後はアトラクションへの搭乗を一切拒否した。

スペシャルサンダーとは、時速一四キロで三回転及び逆さになって急角度で上下左右に動き、最後は逆さのまま上空二五メートルから地上ギリギリまで落ちると言う、乗る人間の安全性を一切考慮にいれていないジェットコースターだ。

最高加速度は約五〇メートル毎秒毎秒、重力の五倍である。

普通のジェットコースターで本気の泣きが入ったエミナにとっては、拷問器具でしかなかった。

翌日、エミナがデジカメに取られていたスペシャルサンダー搭乗後の写真でからかわれた事は言うまでもないだろう。

七月三日

七月三日、教壇の上で若い男の教師が黒板に書かれた証明を説明している。

今年教員免許を取ったばかりの彼は、つかえながらも丁寧に一つ一つ数式の意味を説明していた。既に教鞭を振るい初めてから三ヶ月、未だに緊張しているのか時折、声が震えている。

「で、あるからして、この場合サイコロの目が全て偶数かつ合計で三〇未満となるには、サイコロのうち、最低三個は二の目でなくては いけな……あれ？」

教師が慌てた様子で教科書を見た。はさんであつたメモ用紙を取り出し、首が黒板とメモ用紙を何度も往復する。

コウセツは黒板の辺りを眺めながら、あくびを噛み殺した。

黒板に書かれた証明は、既に写し終えており、大体理解も出来ている。更には、教師のミスにも気づいていたが、わざわざ教える気はなかった。

黒板の上の掛時計を見ると、時刻は一時五五分、後五分で授業が終わる。

教師に間違いを指摘しても板書を直すだけで精一杯だ。だったら、次回に持ち越しても同じだろう。

コウセツはそう自己弁護しながら、胸に溜まる重いものを吐き出した。ため息の原因は、教師に助け舟を出さない罪悪感ではなく、休み時間が来る事だ。

手に持ったペンを回しながら、昼休みを平穩に暮らす方法を考えてみるが、何も思い浮かばない。

教壇上で教師が自身の間違いに気づいた所で、チャイムが鳴った。黒板消しで間違いを修正しようとしていた教師の肩が、大きく落ちる。

「今日はここまで、次の時間は今回の証明からはじめるから、皆し

っかり予習しておくように」

肩を落とした教師がそそくさと教材を片付け、逃げるように教室から出て行った。

「起立、礼」

小さく丸まった教師の背中に、委員長の号令で全員頭を下げる。

コウセツが下げた頭を上げると、教室がざわつき始めていた。

「今日もまたすごいミスしたね」

「うん、〇と六を見間違えるなんて、ありえなすぎでしょ」

「気づいた時は顔を真っ赤にして、可愛かったねー」

コウセツは近場で聞こえる異性の歓声に、まともな高校生活を感じず。男の声も聞こえるが、女の方が耳に入りやすかった。

「コウセツう、お弁当食べよ」

妙に甘ったるい声が耳に入る。

コウセツは声の主に疲れた笑み向け、気付かれないようにため息を吐いた。

「はぁ、今日もか」

声の主、スマレがスキップしながらコウセツへ向かってくる。両手に一つづつ弁当の包みを持ち、体中からフェロモンのように甘ったるい空気を垂れ流していた。

コウセツは甘ったるい空気に胸焼けを感じながらも笑顔で立ち上がる。

「うん、それじゃあ、向こうで食べようか」

コウセツはスマレの手を引いて、早足で教室から出た。

先週の後半からコウセツはスマレと一緒に外で食べるようにしている。

スマレがバカッブル丸出し行為を要求する為だ。スマレ手作りの弁当を食べるところから始まり、あーん、ほっぺに付いたご飯粒を食べる、舐めとる、とだんだんエスカレートしていき、終に抱き合いながらお互いにあーんまでできてしまった。

これを教室でやるわけにはいかない。コウセツには常識や羞恥も

あり、なによりクラスメートからの黒い視線が恐ろしかった。あれは人を殺す事をなんとも思っていない目だ。

今後の生活の為に、これ以上クラスメートの心象を悪くすることはできない。

そして、エミナと言う爆弾にガソリンと火と一緒に与えるのは馬鹿野郎だ、とコウセツは真剣に考えていた。

コウセツは教室から連れ出した汚染物質を握る手に力を加える。

「あう、そんなにギュツとしたら照れちゃうよ」

汚染物質が頬を染めてうつむく。

初々しくかわいらしい仕草であったが、コウセツは反応しなかった。スミレのあざとい仕草にはもう飽き飽きしているのだ。

付き合ってから一週間、毎日この白々しい仕草を見せ付けられていた。少女漫画のように甘すぎる雰囲気は食傷気味である。

「今日は、あっちの視聴覚室の奥に行こうか？ あの前にも人気がなくていい所だよ」

コウセツは出来るだけ被害の少ない所を目指した。

これ以上、潜在的な敵を増やしたくないのだ。

スミレは何を勘違いしたのか、顔を真っ赤に茹で上げる。

「こ、コウセツ、人気がないのはむしろよくない場所じゃないかな？ それより、校庭で食べたなら、気分がいいと思うよ」

スミレは窓の外を指差した。仕草とは裏腹に、スミレの目は潤み熱っぽい視線でコウセツを絡めとる。

「ん、そうかも」

「え」

コウセツが頷くと、スミレは一目で分かるほど落胆した。

頬に注がれるすがりつく様な視線に、コウセツは良いのか悪いのかどっちだよと言いたくなる。しかしそれを口にはしなかった。言え、更に媚びた仕草を見せ付けられる事は体験済みだ。

コウセツは辺りに教師や生徒の影がない事を確認して、スミレの耳元に口を寄せた。

「でも、スミレと二人きりの方が良いよ」

その一言で、スミレの顔が蕩ける。幸せそうに顔を緩ませて、満足気な笑みをこぼした。

「あう、私もだよ、コウセツ」

スミレの口から漏れた熱い吐息が、コウセツの顔にかかる。

「じゃあ、行こう」

「うん」

コウセツはスミレの手を引いて、視聴覚室へと向かった。視聴覚室の辺りに人気はなく、静まり返っている。

コウセツは一度後ろを振り返るが、人気はなかった。

日の光がリノリウム張りの廊下に反射しているだけだ。

エミナの姿がない事にコウセツは、緊張の糸を緩める。人気のないところでエミナに会うのは、絶対に回避しなくてはいけなかった。

今はスミレが隣に居るのだ、エミナが居たらどうなるのか、考えたくもない。六月二八日のような修羅場は、もう沢山だ。

あの時の事を思い出し、コウセツは顔を青く染めた。

不意に袖を引っ張られた。振り向くと、洪面を作ったスミレが足元を指差している。

「ここで食べるの？ コウセツと一緒にならどこでも良いけど」

そう言つて、スミレは内履きで廊下をなでた。少々白っぽい廊下が、本来の輝きを取り戻す。

「大丈夫、こんなもの持つてるから」

コウセツはポケットの中から鍵を出し、視聴覚準備室のドアに差し込んだ。鍵はすんなりと鍵穴に収まる。

コウセツが軽く手首をひねると、鍵が外れた。

スミレは一連の動作に目を丸くする。

「どうしたの、その鍵？」

「映研の友達から借りたんだよ。自作映画の編集が始まるまで、て言う期限付きでね」

コウセツは得意げに笑い、ドアを開けた。

視聴覚準備室は狭く、コウセツが両手を広げるとどちらの指先も壁に触れそうだった。ドアから窓際までの距離は、普通の教室と変わらないはずだが、無性に長く感じる。

窓をさえぎるようにラックが置かれ、USBケーブルやハミリフィルム、プロジェクター等が片付けられていた。

コウセツの後から入ったスマイレが、声を上げる。

「あ、これ、すごい、本物みたいだあ」

スマイレは右手に設置された巨大な音響機器を指差した。

壁に埋め込まれている音響機器は、黒い机に大量のコントロール用のボタンがある。壁にはなにやらランプが張り付いていたが、コウセツには詳しく知らなかった。

「まあ、ここですらいろいろ映画の編集をするらしいから、そんな設備があるんじゃない」

コウセツは、壁に立てかけられているパイプ椅子を二つ取り出す。一つをスマイレに渡し、もう一つのパイプ椅子に座った。

抱き合いながら食べるのは、遠慮したいのだろう。頬を膨らませるスマイレを、コウセツは無視した。

音響機器の隣に置かれたパソコンのキーボードやマウスを、ディスプレイの上におく。

スマイレの作った弁当が、ディスプレイ前に出来た空きスペースに置かれた。

スマイレは弁当の包みを開けると、大きい方をコウセツに差し出す。

「はい、コウセツ」

「ありがとう」

コウセツは受け取った弁当の中を見て顔を綻ばせた。

スマイレと付き合って、唯一の特典がこの昼食だ。

弁当は上半分がおかず、下半分がご飯とスタンダードな構成である。内容はとても高校生が作ったとは思えない程手間がかけられていた。

メインのおかずである焼き鮭にはマヨネーズと香料を混ぜたその

ソースがかけられており、食欲を誘う。

鮭の隣では銀紙で仕切られた煮物が鎮座していた。一口大のぶつ切りにされた大根、蛸、たけのこ、しいたけには醤油の色が艶やかにしみ込んでいる。

口直しにだろ、キュウリとにんじん、大根の酢の物があつた。野菜は食べやすいように短冊状に細長く切られており、三色が色鮮やかに盛られている。

ご飯にも手が込んでいた。白米とシソの葉の混ぜ物の二種類の俵むずびが交互におかれており、上からごましおが振りかけられている。

「じゃ、いただきます」

「いただきます」

コウセツが手を合わせ、スマレがそれに続いた。

コウセツは朱色の箸を手にとると、素早く鮭の切り身に手を伸ばした。グズグズしてはスマレのあくん攻撃を受けてしまう。

残念そうに箸を加えるスマレに気づきながらも、コウセツは気づかない振りをした。

コウセツはしっかりと焼かれた鮭を箸で切り分け、ソースを絡めて口へ運んだ。鼻腔いっぱいには香料のツンとした香りが満ちる。鮭の油とマヨネーズの酸味が口の中に広がった。

「ん、おいしい」

コウセツの口から自然とこぼれた言葉に、スマレの顔が喜びで崩れる。

「えへへ、そう言ってもらえると、朝五時からがんばった甲斐があつたよ」

スマレの五時と言う単語に、コウセツはげんなりとする。毎回、時間を報告されている所為で、五時には台所に立っていた事実に対する感動はなくなっていた。

こういうあざといポイント稼ぎがなければ鬱陶しくないのに、と思いつつも、無言で俵むずびを口に放り込む。

俵むすびの塩加減が絶妙だった。舌先にかすかに感じる程度の塩気が、米の甘みを増幅する。海苔も萎びておらず、口の中で小気持ちよい音を鳴らした。

コウセツは一心不乱に食べる。何度食べても飽きる事はなかった。むしろ、食べる毎にこの味に魅了されていく。

「どう、コウセツ、おいしい？」

「うん、おいしいよ」

コウセツは口に食べ物を入れたまま頷いた。

「そっか良かった」

米一粒も逃さないように食べるコウセツを見て、スミレが嬉しそうに笑う。

コウセツはその笑顔と弁当を見比べ、このままスミレと付き合っ  
てしまおうか、と考えてしまった。

媚のないスミレの笑顔は可愛いし、料理は絶品だ。正直、この料理を手放すのは惜しかった。

恋人であるサチエの泣き顔が脳裏に浮かび、コウセツは自分の雑念を払う。自分の恋人はサチエだ、と言い聞かせながら、コウセツは弁当を胃に詰め込んでいった。

七月八日

七月八日、コウセツの意識は闇から再び現世へと舞い戻る。

「おはよ、コウセツ。これからあたしが治療してあげるね」

そして、また意識がなくなりかけた。

辺りは夕闇に飲まれたように薄暗かったが、それでも目の前にあるものが見えないほどではない。

コウセツは、エミナの浮かべる醜惡な笑みを、眼前に突きつけた。

本当にこのまま意識がなくなればいいのに、と願いながらも、コウセツの意識は次第に明瞭になっていく。恐怖で失神する事もある、恐怖で意識が覚醒する事もある、とコウセツはこの時始めて実感した。

エミナの微笑みから逃れようと身をよじるが、身体を椅子に縛り付けられていて動けない。その上、エミナがコウセツの膝の上に乗っている所為で、椅子を揺らす事すら出来なかった。

激しさを増す動悸、血管を流れる血液の脈動を感じながら、コウセツは口を開く。

「エミナ、ここは現実？」

口から出てきたものは、自分でも驚くほど、平坦な声で平凡な内容だった。

「もちろん、現実だよコウセツ」

エミナは三日月の形で固まった口から唾を垂れ流しながら、優しくコウセツの頭を撫でる。流れ出た唾液がエミナの顎から垂れ、コウセツの胸元を汚した。

「エミナ、唾垂れてるよ。それと、目が充血してるけど、寝不足？」

「あ、ごめん。向こうに居る蛆虫を黙らせたら、口元がにやけてどうしようもないんだ」

エミナは服の袖で口元を拭う。顔中を汚していた涎がふき取られ

るが、口の形は三日月の形のままだ。

「蛆虫？」

聞きなれない単語に、コウセツは首を傾げた。

「うん、蛆虫」

エミナは後ろに居る人物を指差す。指された人物は全身をガムテープとロープで巻かれ、芋虫の様な格好をしている。

黒く艶やかな髪と暗がり顔は隠れているが、コウセツはそれが誰であるかすぐに分かった。

「スマレ」

コウセツは芋虫の正体を呟く。その声には何の想いも込められていなかった。

目の前にあった物体の名称を反射的に言っただけだ。

エミナはスマレに近づくと足で転がす。うつ伏せだったスマレの体が仰向けになり、黒髪ベールからスマレの顔が現れた。

晒されたスマレの顔は酷い状態だった。左頬に紫色の腫瘍を作り、右瞼も同じぐらい膨らんでいる。唇から血を流し、口紅が顎周辺にじみ出ていた。

それでもスマレの面影を残して居る事が、コウセツにリアルと嫌悪を与える。

醜くなったスマレの顔が、夢や幻覚と思い込もうとしてたコウセツに、現実を突きつけた。

「あああああああつ！」

コウセツは唐突に叫んだ。何故叫んでいるのか本人にも理解できない。

胸に湧き上がる衝動が、コウセツを叫ばせていた。

縛られた身体が前後左右に激しく暴れまわり、バランスを崩し椅子ごと倒れてしまう。

盛大な音をたてて、コウセツは頬骨を床に打ち付けた。それでもコウセツの叫びは終らない。

「コウセツ！ 大丈夫だからね。もう怖い蛆虫は居ないから」

駆け寄って来たエミナがコウセツの頭を両手で抱きしめる。

コウセツの顔がエミナの薄い胸にこすり付けられた。

エミナは子供をあやすように、優しくコウセツの頭を撫でる。

「蛆虫はエミナが駆除したよ。」

ちゃんと駆除したから、もうコウセツが騙される事も怪我される事もないからね」

エミナの行為にコウセツは落ち着くどころか、さらに暴れる。

数分間暴れ周り、コウセツの体力と声帯に限界が来た。先程までの狂態が嘘の様に、大人しくなる。

「よかった落ち着いてくれて、これから二人で幸せになろう。」

あたしとコウセツが居れば、後の世界なんて何の意味もないんだ。二人でゆっくり愛を育もう。

そうだね、子供は二人がいいかな。それと白い家、庭には犬を飼おうね」

「人、殺し」

エミナの未来予想図を遮り、コウセツは掠れた声で言った。

「へ、何言ってるの？」

エミナが目を丸くする。言われた意味がまったく理解できていないようだった。

「あたし、あの嫌な害虫を処理しただけだよ。」

人なんて殺してないよ。

大体、世界で本当に必要な人は、コウセツとあたしだけなんだから。

二人の為に何億人が処理されても、それは当然じゃないの」

エミナはあっさりと、常識を語るように言い切る。本気で自分の言った事を常識として捕らえている事が伝わってきた。

コウセツは目の前に居る生物が壊れている事に気付く。同時に、自分がこの生物に捕食される状態である事にも気付かされてしまった。

「触るなよ、気持ち悪い。お前なんか嫌いだ」

逃げる事もあがらう事も出来ない絶望的な状態で、コウセツは唯一自由になる口を動かす。

この生物に捕食されない為には、自身の口を使うしかなかった。その口は淡々とした口調で、捕食者の逆鱗を叩く。

「え？」

理解できないと言った様子で、エミナは首を傾げた。

「ほんと、大嫌いだ。最悪だ。何でお前なんか生きてるんだ？ さつさと死んでくれ、俺のた」

最後までコウセツが言い切ることは出来なかった。横から飛んできた拳に頭を打たれ、椅子ごと倒れる。

「コウセツ、ハハ、あたしが嫌い？、酷い嘔吐くよね。

これはお仕置きだからね。

もう、そんな事言っちゃ駄目だよ」

エミナはコウセツを殴り倒した格好のまま笑った。

コウセツはエミナの姿が醜いものにしか見えなかった。

今までずっと一緒に居た幼馴染、誰よりも相手の事を知っている。だから、今のエミナにコウセツは欠片も魅力を感じなかった。

そして、そんな生物に自分の髪の毛一本も差し出したいくない。

それがコウセツの偽らざる心根だった。

「嫌いだし、汚すぎて触りたくもなつぶへ」

エミナの爪先がコウセツの腹に食い込む。

コウセツの咽を熱い液体が逆流するが、意地で押し留めた。

「そうか、コウセツまだ騙されてるんだね。蛆虫の呪いが解けてないんだ。大丈夫だよ、コウセツ、あたしが直してあげるから」

エミナは身体をくの字に曲げ、弱々しく身体を震わせる。まるで視界を遮るように、両手で顔を覆った。

コウセツは腹の痛みも忘れて、一言、自分の正直な気持ちを口にする。

「お前の玩具になんてなりたくないよ。お前のものになるくらいなら、死んだほうがまだ」

コウセツの目の前で、エミナの体が崩れ落ちた。瞳は虚空を移し、肩は力なく垂れ下がっている。まるで糸の切れたマリオネットだ。

「コウセツ、嘘だよね？」

エミナが首を動かし、縋る様な眼差しをコウセツに向ける。

コウセツは最後の一言を言った。それが自身を殺す引き金になると分かっている、それが今のエミナを壊す決定打だと予感しているが、コウセツは躊躇わなかった。

「大嫌いだ」

「そんなの嘘だって言って」

エミナが四つんばいになって、コウセツに近づいていく。

「そうじゃないとあたし、コウセツも駆除しちゃうよ」

泣きそうな顔で、媚びた声をだして、エミナは脅迫する。

それでも、コウセツの心根は変わらない。

コウセツはもう一度呟いた。

「大嫌いだ」

「ああああああああああああああああああああ」

コウセツが言い終えると同時に、エミナは叫びながらコウセツの顔を殴る。駄々をこねる子供の様に拳を振り回し、コウセツの顔にぶつけてきた。

止め処なく流れる涙が、コウセツの顔に降り落ちる。

「悪い子！」

「悪い子！」

こんなに好きなのに、これだけ尽くしてるのに、この悪い子！

「悪い子！」

「コウセツの悪い子！」

次第に拳の色が紫色へ変わり、小指があらぬ方向に曲がるうとも、エミナの拳はとまらない。

コウセツの顔もそれに合わせて変形し、顔中が腫上がり鬱血していく。鼻血が顔半分を朱に染めていた。舌先が痺れ、鼻腔は鉄錆の匂いが充満する。

「ああ、どこで間違えたんだろうな」

何を間違えたのか、どうしてこうなってしまったのか、コウセツには何も分からない。

身動きの取れない身体で椅子と一緒に暴力を受け入れるだけだ。後悔や恨みはあったが、それと同じくらいコウセツは安堵していた。

どんな結果になろうとも、もう二度とエミナと会う事はない。その確信が生んだ安らぎだ。

コウセツは頭蓋骨に響く衝撃に耐えながら、笑みを浮かべる。そのまま意識は、次第に闇の中へと消えていった。

六月一〇日

六月一〇日、委員長の号令でショートホームルームが終わり、気の早い生徒が駆け足で教室から出て行った。

ケンジは、ゆっくりと鞆に教科書類をつめていく。教科書を詰め込み終えて帰ろうと立ち上がった時、左ポケットが震えた。

ケンジは緊張した面持ちでポケットから、白い携帯を取り出す。ケンジの携帯ではない。数日前、充電器と共に机の中に入っていたものだ。

携帯のディスプレイには、メール受信とそっけない一文が映っている。

ケンジは唾を飲むと震える指でメールを開いた。

『帰り道、一緒に帰る人間に、悪魔部について話せ。』

嘘さえ吐かなければ、内容に指定はない』

ケンジはメールの文面を何度も確認する。しかし、内容が変わる事はなかった。

このメールの言うとおりにするか否か、ケンジは一瞬迷う。すぐに迷いを打ち消した。

このメールに逆らえる道理がケンジにはない。迷うと言う選択肢がありえなかった。

ケンジは携帯をポケットにしまうと、コウセツの席へ向う。

「コウセツ、帰ろうぜ」

「もう少しだけ待つて。もうすぐ、こっちも終わるからさ」

コウセツはまだ教科書やノートを鞆に閉まっている途中だった。ケンジは首を伸ばして、鞆の中を覗く。

教科書類が隙間なく鞆の中に入っている様子が見て取れた。さながら、出来の良いパズルだ。その代わり、まだ半分程度しか鞆の中に入っていないかった。

「まだ、終らないのか」

ケンジは自分にしか聞えない声量で愚痴ると、別の生徒に目を移す。その生徒が引力でも働かせている様に、ケンジの目は自然と吸い付いた。

艶やかな黒髪が目に入り、次に発育の良い肢体が視界を奪う。

風美人という言葉が良く似合う女生徒、スミレだ。

スミレは、大きく肩を落としているエミナの背中を軽く叩いている。落ち込むエミナをスミレが慰めているようだ。

視線を少し下、エミナの太もも辺りに移すと、握り締められたテスト用紙が見えた。

「ああ、点悪かったんだなあ」

ケンジは最後の授業でエミナが上げた奇声の理由を察する。

最後の授業で中間テストを返却された時、エミナは猫のような叫び声を上げ、教室を凍りつかせた。

至近距離で叫びを聞いた教師は、まばたきも忘れて固まっていた。その事を思い出したケンジは小さく笑う。そして、脳の奥から響く悪魔の囁きに耳をかす。

「これは、チャ～ンス」

いつも地味だと馬鹿にされてきた仕返しをする好機とばかりに、ケンジは黒い笑みを浮かべた。何気ない様子を装いエミナに近づくと、エミナはテスト用紙を見て、打ち震えていた。

「よう、え」

「あ、ケンジ、準備終わったから帰ろう。エミナとスミレさんも」

ケンジの声を遮って、コウセツが声をかけてきた。ケンジの手が所在なさ気に宙を漂う。

「あ、うん」

「そうね、帰る。どうせ見ても変わらないし、るうるる」

スミレは明るい笑顔で、エミナは暗いメロディーを口ずさみながら、コウセツへ駆け寄る。

そして、コウセツとスミレがエミナを慰めながら教室を出て行った。

ケンジは暫し伸ばした手を開閉させて居たが、教室のドアが閉まる音で我に返る。

「お、俺を置いてくなよ！」

慌ててケンジは鞆を掴むと、教室から駆け出る。

幸いエミナの足取りが重かったお陰ですぐに追いつく事が出来た。肩を落とすエミナを、両側からコウセツとスミレが慰めている。

ケンジはさりげなくスミレの隣に肩を並べた。

「お前らなあ。一緒に帰ろうとか言っておいて、置いてくなよ」

ケンジは自分を置いていった事を抗議するが、コウセツ、スミレ、エミナの反応は非常なものであった。

「あれ？ ケンジ、居なかったっけ。ごめん、気付かなかった」

「あ、一緒に帰るんだ。てっきり一人で帰ると思ってた。ごめんね」  
「うっさい。こっちはそれ所じゃないのよ」

ケンジは草葉の陰で涙を流す。慰めてくれるものはくれなかった。三人はケンジを無視して歩き去っていく。

暫く、その場でいじけていたケンジだが、階段を下りる足音が聞えた辺りで涙を拭い立ち上がる。

「ちよつとは慰めるよお」

ケンジの哀愁を帯びた呟きが、廊下に木霊した。ケンジは鞆をかつき直すと、駆け足で三人を追いつける。

生徒玄関前でケンジ達は、男女に二手に分かれた。

数年前に盗撮事件があり、げた箱が男女別に分けられたのだ。

げた箱にケンジが靴を仕舞うと、既に靴を履いたコウセツが振り向く。

「そう言えば、ケンジ、携帯変えた？ 何だか色が変わってたけど」  
ケンジは左ポケットに手を当てる。

「あ、ああ、格安で色だけ変えられるキャンペーンがあつてな、気分転換に変えてみたんだよ。キ、キャンペーン中に元に戻すけどな」  
額から流れる脂汗を鬱陶しく感じながら、ケンジは頷いた。

考える間がなかった所為で、とても嘘臭い内容だ。しかし、本当

の事を言うわけにはいかなかった。

「ふうん、変わったキャンペーンだね」

案の定、コウセツは首を傾げる。

「ま、まあ、本当は最新の携帯に変えてもらって、その使い心地を体感して欲しいという趣旨らしいぜ。

ただ、俺のはその最新式の奴だからさ。色が変わるだけなんだよ。いや、ホントは駄目なんだろうけどさ。

知り合いの店だったから特別にお願いできたんだよ。

いや、運が良かった」

背中を流れる汗に後押しされるように、ケンジはいらない事まで懇切丁寧に喋る。

コウセツは終始無言で聞いていた。

ケンジの口から言葉が出なくなっても、コウセツは無言だった。

ケンジの心臓が強く脈打つ。コウセツの一挙一動を逃さないように目に力を込める。

そして、ケンジの緊張が最高潮に達した時、コウセツは口を開いた。

「へえ、良かったね。じゃあ、行こう。二人とも待ってるよ」

コウセツはあっさりと言うと、外へ歩き出す。

「ふう」

ケンジは大きく息を吐くと、コウセツの後を追った。

校舎を出ると、既に日は傾いていた。

夕暮れの中、ケンジ達は住宅地を歩く。

隣ではスミレとエミナが不毛なやり取りを行い。コウセツが仲介に入る。いつも通りのやり取りが、行われていた。

三人の輪の中にケンジは入っていない。まるで空気のように扱われている。

輪の中心にいるコウセツは、幸せそうな顔でスミレとじゃれている。

コウセツに邪魔されているにも拘らず、スミレの顔もどこか嬉し

そうに見えた。

その光景を隅で見せられたケンジは、言いようのない気持ちと共に声を吐き出した。

「なあ、三人ともちよつといいか？」

スミレ、エミナ、コウセツの視線がケンジに集まる。

「え、なに？」

「テストと毛根が大変だから、くだらない事なら怒るわよ」

「あ、ケンジ、居たんだ。地味すぎて気付かなかった」

コウセツの口にしたNGワードに、ケンジの頬は引きつる。

「こら、最後！ 地味言うな。普通が一番なんだよ」

ケンジは至極最もな意見を叫ぶ。

それに対して、コウセツはスミレとエミナの方を振り向いた。スミレとエミナが、困った様に頷く。

「そこ、一人だけ置いて、分かり合うなよ。しかも、凄く俺に不名誉な方向で」

三人の行動の意味を正確に汲み取ったケンジは、眉をつり上げて睨みつける。

しかし、ケンジの眉はエミナの一言で垂れ下げられた。

「だって、あんたさ、特徴なさすぎ」

「なっ」

あまりにもはつきりとした言葉が、ケンジの心を抉り取る。

「まあ、学校で後姿見ても、区別できないんだよな。体格が平均的で特徴なさすぎて」

コウセツが同意するように何度も頷き、追い討ちをかける。

「そうだね。私服で人ゴミに入ったら、ナチュラルに背景化しちゃうような感じだよ」

そして、スミレが悪気のない一言で、ケンジは止めを刺された。

ケンジはその場に崩れ落ちる。しかし、慰めてくれる人はいない。ケンジは目尻の涙を拭くと、再度三人に声をかける。

「まあ、いい。それより、ちよつと面白い噂を聞いたんだ。

うちの学園でかくて人も多いだろ。だから、結構へんな部活があるのは知ってるよな？

そんな中でも、一等変な部活があるらしんだよ。

願いを何でも叶えてくれる部活、てのがさ。

その名も、悪魔部、て言うらしいぜ」

これで役目を果たしたとケンジは微かな達成感を感じると共に、何とも言えない重さを胸の内に感じた。

六月十四日

六月十四日、ケンジが鞆に教科書を詰め込み終わると同時に、左ポケットにある白い携帯が振動した。

放課後、帰ろうと言う時、携帯の位置、四日前とまったく同じシチュエーションだ。

まるで狙ったようなタイミングに、ケンジは気味悪く思いながらも、携帯を取り出す。

三日前と同じく、メールが来ていた。四日前とは違い、メールの隣にクリップのアイコンが出ている。添付ファイルがあるようだ。

ケンジは軽くボタンを押して、メールを開く。

『雪村コウセツと二人だけで、駅前のアブラカタブラの地下一階にある一八禁コーナーに行け。』

その後ゲームセンターで遊び、裏口を出た所にあるカラオケボックスで二時間歌を歌え』

メールを文面の下までスクロールさせると地図の画像が貼り付けである。

「ご丁寧に移動経路が赤く塗られていた。

ケンジはメールに従うかどうか、しばし悩む。

前回のメールから四日、特別変わった事はなかった。特筆するようないい事も悪い事も起こっていない。何時も通りの日常だ。

唯一例外は、昨日、スミレから声をかけてもらえた事ぐらいだった。悪魔部について聞かれたただけだった事は少々残念だったが、ちよっとした良い事には違いない。

しかし、ケンジの願いに向かって物事が進んでいるようには思えなかった。

「うーむ、ま、たいした事じゃないしやるか」

ケンジは軽い気持ちでメールに従う事に決める。

とりあえずコウセツを探して教室を眺めると、すぐに見つかった。

コウセツは、スミレとエミナが賃金交渉をしている様子を、一步はなれた位置で見守っている。

コウセツの目は冷め切っていて、仕方なくその場にいるように感じた。

ケンジは両手で顔を揉み、険しくなった表情を崩す。スミレとエミナのとばっちりを受けないよう、二人を大きく迂回してケンジはコウセツに近寄る。

そして肩を叩こうとしたケンジの耳に、コウセツの呟きが聞えた。「ああ、このままこっそり帰ろうか」

ケンジの眉が跳ね上がるが、すぐに元に戻る。気持ちを落ち着ける為一呼吸置いてから、コウセツの肩を叩いた。

コウセツは振り返るとにつこり笑って口を開く。

「何か用、ケンジ？ それと登場はもつと派手にやらないと、地味すぎて存在消えるよ」

「色々と話し合わなきゃいけない事があるようだな、親友。だが、今日は構わない。それより、明日、駅前に遊びに行かないか？」

ケンジはコメカミに浮いた血管を隠そうともせず、頬が引きつった笑顔を作る。

「明日かあ。どうしようかなあ」

コウセツが少し迷うような素振りを見せた後、少し人の悪い笑みを浮かべる。

「スミレさんも呼ぶの？」

スミレの名を聞いた瞬間、ケンジの頭に上った血が蒸気になった。心臓の打ち鳴らすリズムが激しくなる。からかわれいてると分かっていても、ケンジの動悸は静まらなかった。

「こ、今回は、別に誘わないさ」

ゆでたこの様に色づいたケンジは、少々どもりながら応える。

「こ、今回は、別に誘わないさ。ちょっと男二人で気兼ねなく遊びただけだ」

そっけなく言い放つ事で、ケンジは下心はない事を示す。

「うん、それなら、行くよ。でも、どこに行く気？」

あつさり頷いたコウセツの肩を抱えたケンジは、顔を寄せて耳元で囁く。近くで言い争っているスマイレに聞えない様、細心の注意を払った。

「駅前のアブラカタブラあるだろ。あそこの地下一階に、何でも”じゅうはっさいいじょうのおとな”を対象としたコーナーが出来たらしいんだよ」

ケンジはコーナーの中を夢想して、先ほど場別の理由で心臓を高鳴らせる。体中の熱気を排出するように、鼻腔を通り出る息は熱く乱れていた。

「うわあ、アブラカタブラも思い切ったことするね。小学生も来るのに、エロコーナーを作るなんて冒険だよ」

「ああ、俺もこの情報を聞いた時は驚いた。しかし、本当らしい。中に何かがあるか、今から興奮しないか親友」

「と、ともかく、明日はそう言う事で」

ケンジはだらしなく鼻を伸ばしながら同意を求めるが、コウセツは曖昧な笑みを浮かべ誤魔化そうとする。しかしコウセツの鼻も伸びていて、答えは聞かなくても分かった。

このむつつりスケベが本当は嬉しいんだろ、と言いたくなりながらも、ケンジは別の事を口にする。ここでコウセツにヘソを曲げられるわけには行かないのだ。過剰なからかいは慎むしかない。

「下はTシャツでも着て、すぐ変装できるようにしとけよ。間違っても、制服で行こうとするなよ」

「分かってるよ」

コウセツがケンジの腕の中から抜け出る。そして、去り際にいない置き土産を投下した。

「それと、こう言う、いかにも怪しい事してます、と言いたげな仕事を今するなよ。こんな時こそ、クラスの空気と呼ばれる地味さを発揮して、地味に振舞ったら？ と言うか、地味に派手にならなくていいよ」

あんまりな物言いに、ケンジの意識がブラックアウトする。  
気付くと目の前に教室の床があった。

「さすが、コウセツ、俺の心を打ち砕いていきやがった」  
未だに痛む胸を摩りつつケンジは立ち上がる。

教室を見回すが誰もいなかった。廊下から微かにスマレとその他の  
の笑い声が聞えてくる。

「……」

ケンジは指先でコメカミを叩き、現状を整理してみた。

誰もいない教室

廊下から微かに聞えるスマレの笑い声

自身の気絶

自分の地味度

コウセツの性格とエミナの非人道的な扱い

一つ一つの要素を抽出し、ケンジは一つの結論に達した。

「これは、置いていかれたんだな……」

て、おい！

だから、置いてくなよ。と言うか、ちょっと心配しろよ！」

ケンジは慌てて鞆を掴むと、教室から飛び出た。

六月一八日

六月一八日、ケンジが風呂から上がり自室に戻ると白い携帯にメールが来ていた。

ケンジは唾を飲み込む。

ここ数日、コウセツがエミナを避けているように感じられた。コウセツからエミナに話しかけたり、二人で登校する姿を見なくなったのだ。

その原因が、白い携帯の指示にあるかもしれないと、ケンジは漠然と感じていた。

特にコウセツとエミナと一緒に登校しなくなった日は六月一六日、ケンジがコウセツとアブラカタブラに行った翌日だ。そこに何か因果関係を感じてしまう。

ケンジは大きく息を吸い込み、微かに震える指先で携帯を開いた。小刻みに振動するディスプレイに写る字面に、ケンジは息を呑む。『午後九時までに、今宮エミナに雪村コウセツと日高サチエが交際している事を教える』

ケンジが枕元に置いてある時計を見ると、デジタルの液晶に八時五〇分と映し出されていた。慌てて自分の赤い携帯を取り出し、電話する。

ケンジの胸に不安がなかったと言えば嘘になる。しかし、メールの内容を吟味する時間はなかった。ただ、今更従わなくて失敗する事だけは避けたくて、携帯に飛びついたのだ。

数回のコールの後、電話はつながった。

「ケンジミ何か用？ あたし結構忙しいんだけど」

あからさまに迷惑そうな声が、携帯から聞こえてくる。

ケンジはエミナの声の調子に若干怖気づいた。

「いや、ちょっと、な」

口ごもるケンジの視界に時計の液晶が目映る。時刻は八時五三

分をさしていた。

「ん、用事ないなら切るわよ。明日やる事あるんだから」

電話越しにエミナが離れていく気配を感じたケンジは慌てて大声を出す。

「こ、コウセツッ！」

コウセツの事で聞かせたい事があるんだ」

「コウセツがどうしたの？」

くだらない事なら、潰しちゃうわよ、プチッと」

何気なく言われた一言でケンジの顔色が真っ青になった。内股になった股間を片手で抑える。

「え、エミナにとっては、すごく重要な事だと思う。コウセツの恋人に関する情報だからな」

ケンジは唇を震えさせながら、さっさと本題に入った。回りくどい話し方ではエミナに潰されてしまう。ついでに、九時まで時間がなかった。

「ふうん、それ興味あるわ」

携帯から聞こえる無機質な声に、ケンジは喉を鳴らす。首の動脈に刃物を突きつけられたように体が強張った。男性そのものを狙われる恐怖が股の間から、冷たい冷氣となって背筋を上がってくる。

「相手は誰で、どうして知ってるのかきちんと報告してね。分かる事は全部ね」

「あ、ああ、当然だろ」

ケンジは壊れた人形のように首を上下に揺すった。一つでも間違えれば容赦ない制裁が加えられる、と直感する。

ケンジは汗で濡れた手をベットのシーツでぬぐいながら、ゆっくり間違いのないように話し始めた。

「相手は、俺の姉なんだ。名前はサチエ、日高サチエ、会社勤めのOL」

携帯越しに何かが折れる音が聞こえた。軽い音質に、ケンジはシヤーパーンの芯でも折った、とあたりをつける。

ケンジは息を止めてエミナの反応を伺うが、携帯から別段反応はなかった。携帯を捨てて家に殴りこんでくるのか、と顔を青くするが、すぐに首を振って否定する。

携帯から息遣いは聞こえてくる。

エミナが携帯を持っている事は間違いないはずだ。爆発しそうになる自分を抑えているだけなのだろう。

風のざわめきやエンジン音が聞こえてこない事も、ケンジの予想を補強する材料になった。

そこまで分かった時、ケンジの口から安堵と共に息が漏る。いつの間にか体中に力が入っていた。

ケンジは首や肩を回し、体中の強張りを解きほぐして、詳細を話し始める。

「前々から、姉さんにカレシが居る事は知ってた」

電話越しに、エミナの舌打ちと歯軋り音が聞こえた。

「もちろん、相手が誰なのか知らなかったんだ。」

ほんとに、コウセツが相手だとは知らなかったんだよ」

コウセツは早口で、サチエの恋人がコウセツだと知らなかった事を強調する。

「今日、さつき、姉さんがカレシと電話で言い争ってて、そこでコウセツ、て言っただよ。」

それで気になって聞き耳立ててみると、明日のデートやクラスメイトとの遊園地とか、どこかで聞いた事のある単語がポロポロ出てきたんだ。

それでさ、こりゃコウセツの事だな、と思ってエミナに電話したんだ」

ケンジは立て板に流れる水のように理由をごまかした。

嘘は言っていない。

実際、先ほどサチエはコウセツと明日の事で言い争っていた。その時たまたま聞こえた単語を脚色して、話しているだけだ。

ケンジは急場で思いついたにしては上出来な言い訳の出来に驚き

ながら、エミナの反応を待つ。

「アッハッハッハハハハハハハハハハハ」

そして、エミナの笑い声が聞こえてきた。

「で、何であたしに教えてくれたの、そんな事をさ？

あんだ、自分の姉を売ったんだよ。

分かってる？」

ケンジの背骨に氷の針が突き刺された。今まで自分の言った内容と言った相手の危険性に、今更ながら気づく。

コウセツ関係に対するエミナの危険度を、一番近くに居る傍観者、ケンジはよく知っている。

エミナは間違いなくサチエを壊すだろう。

しかし、ケンジに姉をエミナの生贄とする気はなかった。

ケンジは何かいい方法がないか必死に頭を回転せる。

「じゃ、貴重な情報ありがと」

「そんなつもりはないさ。ちょっと取引したいだけだよ」

エミナが電話を切ろうとする気配を感じたケンジは、慌てて口を開いた。ここで引き止めなくては、明日の夕方には三面記事に自分の姉が乗るかもしれない、と言う危機感が全身を支配する。

「あんたさ、自分の立場分かってる？」

エミナがわずらわしそうに言った。

「分かってるよ。だけど、ここでエミナに短気を起こされて、警察の厄介になられたら困る」

ケンジは震えのとまらない歯が音を鳴らさないように、慎重にゆっくりと言葉を紡ぐ。

「エミナにはコウセツとくつついて欲しいんだからさ。出来れば結婚してもらいたいぐらいだよ」

「ふうん、ケンジって思ってたより、賢かったんだ。

雪村エミナ、今宮コウセツ、どちらかと言うと雪村エミナの方が語感はいいけど、どっちも素敵ね。

まるで運命に導かれてるみたい」

エミナがうつとりと互いの苗字を入れ替えた名前を呟く。

「それに比べて、雪村サチエ、日高コウセツ、どっちも似合いやしない。」

語呂が悪いとかそんなレベルじゃない。豚の糞尿にたかる蠅や蛆虫と同レベルの嫌悪感しか感じない。

そう思うでしょ？ フフ、フフフフ」

「も、もちろんさ」

不気味な含み笑いにケンジは頬を引きつらせながらも頷いた。この手の人間に理論や常識を言っても意味がない。それどころか、否定的なニュアンスの言葉を用いただけで、敵とみなされてしまう事を、ケンジは知っていた。

「だからこそさ、エミナには警察に捕まる可能性が一パーセントでもある事はして欲しくないんだ。分かるだろ？」

「分かった。じゃあ、あんたが手足となってやりなさい。それでいいでしょ」

エミナの弾むような声に、ケンジは顔を覆った。

「それじゃあ、俺が捕まるじゃないか。俺だって下心があつて、この話をしたんだぜ。」

その辺りを考えてくれないか」

ケンジは受話器に奥に神経を注ぎ、慎重に辞退の意を表す。

受話器の奥から来た返答は、笑い声だった。エミナは気を悪くしていない様だ。

第一関門突破、ケンジはガッツポーズを作る。。

「つ、ま、り、あたしがコウセツと結婚して、ようやく二人の運命に気づいた馬鹿女にハイエナみたいだったって食いつぶしたいわけね。こっちも金魚の糞みたいに付きまとわれたら迷惑だし、仕様がなからあんたの下心も上手くいくようにしてあげる」

「ああ、ありがとう。で、コウセツと姉さんを別れさせる作戦があるんだけど、聞かないか？」

ケンジはエミナの口から垂れ流される雑言を適当に聞き流し、話

を穏便な方向へ誘導しようと思いきなりばつたりに話を繋ぐ。

エミナの答えを待つ間に、脳みそは全力で回転していた。オーバーヒート寸前だ。

「つまらない策だったら抜くけど、覚悟は出来てるわよね」

何を抜くんだよ、と問いただしたくなるエミナの爽やかな台詞に、ケンジは身体を振るわせる。

「つまらないかどうかは分からないけど、損のない作戦だと思う。

コウセツがエミナとスミレさんの二人といちゃついてるシーンを撮ってさ、それを姉さんに送りつけてやるんだよ。

浮気された上に二股だと分かったら、今日の事もあるし、姉さんとコウセツの仲にヒビの二つや二つ入るさ。

後は、そのヒビを広げていってやれば、自然と破局する」

ケンジは自信たっぷり言い切り、頬を伝う冷や汗を拭い取った。

「ちょっと、気に入らないけど、悪くはないわね。それ採用してあげる」

受話器から聞こえた応えに、ケンジは小さく安堵のため息を吐く。しかし、すぐに気を引き締め、具体的な内容を考え始めた。

ケンジの脳回路が焼き切れる寸前まで働かされる。

働きすぎて回路線が何本か焼ききれたケンジに、エミナが口を開いた。

「ちょうど、あんたの姉との約束をコウセツがキャンセルしたみたいだし、明日、それやるわよ。

ちょうどスミレから遊園地に誘われてるし、ちょうどいいわ。

本当はキャンセルするつもりだったけど、たまにはスミレにも役に立ってもらわなくちゃね」

今週の水曜日、スミレがコウセツとエミナを遊園地に誘っていた様子をケンジは思い出した。

あの時、コウセツがスミレの誘いを受けていれば、その尻馬に乗ってさりげなく同行する事が出来たはずだ。そうしたら、きっと楽

しい日曜日になっていたのだ。

しかし、コウセツが誘いを断った所為で一緒に行く事は出来ず、スミレは一日元気がなく暗かった。

ケンジは悲しそうに顔を伏せたスミレの姿がフラッシュバックする。コウセツに対する怒りが燃え上がった。

同時に一緒に遊園地へ行くチャンスだ、と言う事に気づく。

「コウセツはエミナが誘うんだろうけど、俺はどうするんだ。一人で遊園地に行つて、コウセツのストーキングなんて嫌だし、大体目立つぞそんな事したら」

「大丈夫、さりげなく駅に来たら誰もおかしく思わないわよ。

あんた地味にどこにでも居るから、スミレはコウセツが呼んだ、コウセツもあたしかスミレが呼んだんだ、と思うはずね」

「な、なるほど分かった」

ケンジはベッドに突っ伏しながら頷く。

「ん、どうかした。仕事一直線で頑張つて来たお父さんが、いきなりリストラされて公園のブランコに座つてるような哀愁漂う声が聞こえたけど」

笑いを噛み殺したエミナの口調に、ケンジは一瞬殺意が湧き出したが、すぐに洩れてしまった。コウセツ関係でない限り、エミナがケンジの話に耳を傾ける事はない。

ケンジはベットから起き上がると、携帯を握りなおす。

時刻は九時三十分、明日のことを話し合うには十分な時間があった。

六月二二日

六月二二日、ケンジは人気のない校舎を歩いている。その足取りは重く、覇気がなかった。

「ああ、美化委員なんてやるんじゃないかった」

ケンジは万感の想いを込めて呟く。心の中で何度も呟いた台詞だ。口に出せば気がまぎれるかと思ったが、更に落ち込むだけだった。毎月第四水曜日の放課後に美化委員会ではミーティングを行っている。内容は、各クラスの掃除の様子や、課外活動の報告だ。

ミーティングは校舎隅の学生会議室で行われている。生徒からは、放課後の時間がつぶれる、場所が遠いと概ね不評であった。無論、平凡な美化委員であるケンジは、不評側だ。

「はあ」

これから始まるミーティングを考えて、ケンジの足取りはさらに遅くなった。手に持ったプリント類が鉛の様に重く感じる。

窓の外を見れば、雲ひとつない空があった。薄い雲がゆっくりと流れ、空にかかる。

足を止め外の景色を眺めるケンジの右ポケットが震えた。

ケンジはポケットから赤い携帯を取り出す。ケンジが自分で買った携帯だ。ミーティングの開始五分前にアラームが鳴るように設定しているのだ。

ケンジは携帯の振動を止める。

「行くか」

ケンジは名残惜しそうな視線を窓の外に向ける。

その時、校舎の隅に見慣れた人影を見つけた。遠目にも艶を感じさせる黒髪が特徴的な女生徒だ。

「スミレさん、あんな所で何やってるんだ？」

頭を抱え身をよじっている女生徒を見て、ケンジは首をひねる。

女生徒、スミレのいる辺りは、グラウンドや校門、中庭と距離が離

れており、普段は生徒の来る所ではなかった。

毎月同じ時間にこの廊下を通っているケンジだが、人影を見たのは今日が初めてだ。

ケンジはその場にしゃがみ込むと、窓枠の隅から覗き込むようにスミレの様子を伺う。

校舎の隅でスミレが胸に手を当て、肩で息をしていた。距離が離れており良く分らないが、心なしか顔色が悪いように見えた。

ケンジは一瞬、身体を浮かせるが、しゃがみ直す。

スミレがポケットからなにかを落としたのだ。そのなにかは校舎の陰からやって来た男子生徒の足元に当って、止まる。男子生徒は爪先に当たったものを拾うと、スミレに突き出した。

「コウセツ」

ケンジは男子生徒の名前を呟く。

スミレはコウセツから落としたものを受け取ると、胸元に抱きしめた。

コウセツがその様子を眺めている。

二人の样目にケンジの心臓が跳ね上がる。荒くなる息遣いを隠そうともせず、食い入るように二人の様子を観察した。

突如、スミレがコウセツに抱きついた。

つぶさに観察していたケンジの手が窓枠にきつく食い込む。唇から、赤い雫が一滴流れ落ちた。

ケンジはコウセツが優しく拒絶する事を願う。心の底から、スミレを傷つけずに断る事を祈った。

ケンジの願い通り、コウセツはスミレをやんわりと引き剥がす。

ケンジは安堵の笑みを浮かべかけて、凍りついた。

コウセツがスミレを抱きしめたのだ。

ケンジの体から力が抜ける。自分の願いが最悪な形で裏切られた事が分かってしまった。

覇氣の感じられないケンジの視線の先で、スミレとコウセツの顔が近づいていく。

それ以上見ていられなくなったケンジは二人から顔を背け、逃げ出した。

消火器を蹴り倒し、階段を飛び降り、ケンジは走り続けた。どこをどう走ったのか覚えていない。

気付いたら、ケンジは自分の家の前にいた。日は暮れており、ケンジが走り出してから随分時間が経っている。

「俺の家か」

ケンジはドアの前に戻ると、疲れた様子で家に入った。委員会をサボってしまった事を思い出したが、どうでも良かった。

家に入ると、リビングからテレビの音と女の笑い声が聞こえる。

「えー毎度、馬鹿馬鹿しい話なんですが……」

「アハハハハ」

能天気な笑い声にケンジの胸がざわついた。ケンジは無言で自分の部屋に向かう。

今は、誰とも何も話したくなかった。

しかし、そんなささやかな願いすら邪魔されてしまう。

「あれ、ケンジ、遅かったわね」

笑い声の主が、部屋に逃げ込もうとするケンジに気付いたのだ。

女の声の後ろでは、テレビから芸人の悲鳴が流れている。

「うん、まあね」

ケンジはリビングから顔を背けた。

「何、そっけない。折角、このサチエお姉さまが声をかけてるんだから、少しは嬉しそうにしたらどう」

時折、せんべいをかじる音を含みながら、サチエが言う。

悩みのないお気楽な声色に、ケンジは奥歯を強く噛みしめた。

「ごめん、ちょっと疲れてるんだ」

「疲れてる、て、どうせ遊びつかれでしょ。こんな遅くまで遊んできて、疲れてるなんて、ちょっとちゃんとしたらどう？」

この場から逃げ出そうとするケンジの背中に、サチエが追い討ちをかける。

「大体、学校なんて、大した事してないんだから、疲れる事なんてないでしょ。」

こっちはお仕事してるんだから、少しは労って欲しいわよ」

ケンジは俯き、唇をかみ締める。握り締められた拳が震えていた。「身体は貧弱、頭は平凡、その上地味、そんなんじや、彼女の一人も出来ないわよ。ちよつとおしゃれでもしてみたら？」

普段なら挨拶程度の言葉だった。しかし、今のケンジにとっては、心臓に直接杭を打たれたような衝撃を受ける。

ケンジの心が血を流したように赤黒く染まった。

「関係、ないだろ」

「はあん、何か言った？」

大げさな声で、サチエが聞き返す。

ケンジはリビングを振り向き、サチエを睨みつける。

「関係ない、言ったんだよ」

ソファに寝転びせんべいを片手に雑誌を開いているサチエの姿に、コウセツは怒りがこみ上げてくる。

「ちょ、何、その態度、人が折角声をかけてあげたのに」

サチエが眉をひそめ、恩着せがましく言った。ソファに座りなおすこともしない。自分が上位に立っていると考えている態度だ。

「だから、定時で帰ってきて、家でだらしなく寝そべってせんべい食べてる奴には関係ない、言ったんだよ」

「あ、あんたねえ。」

こっちは毎日毎日遅くまで仕事で疲れてるの。

たまの定時ぐらい、のんびりしてても罰は当らないわよ」

サチエは身を起こす。眉間にシワを作り、般若の様な形相でケンジを睨みつけた。

普段ならその迫力に押されて謝ってしまうケンジだが、今は違う。頭の中が沸騰しているケンジに、その程度の迫力は通用しなかった。

「いつも帰りが遅いのは、どうせ男といちゃついている所為だろ」

「んなわけないでしょ！ 大体、アイツとは休みの日ぐらいしかあ

えないし」

般若の様な形相だったサチエが、一転可愛らしく頬を膨らませる。恋する乙女の憂いを感じたケンジは、その幸せそうな顔を泣きっ面に変えたい衝動に駆られた。

「ああ、そうか」

ケンジの口が勝手に動く。どこか遠くから、やめると訴える自分を感じながらも、ケンジはやめなかった。

「高校生がお相手じゃ、流石に夜のラブホへしけこむわけには行かないよな」

サチエが固まった。目は大きく開かれ、口は魚の様に開閉を繰り返している。

手に持ったせんべいが滑り落ちた。

今まで見た事がない姉の様子に、ケンジは唇をつり上げる。胸のうちに小さな達成感が生まれた。

「ハハハ」

わざとらしくケンジが笑うと、サチエは頬を赤めらせ眉をつり上げる。

ソファから立ち上がったサチエは、ケンジの胸倉を掴んだ。自分より大きなケンジを軽々と持ち上げる。

「あんた、一体どこまで知ってるの」

サチエは獣の様に咽を唸らせ、ケンジを睨みつけた。殺気だった一對の瞳が、ケンジの両眼を貫き、脳を直撃する。

「あれだけ無防備にのろけ話してたら、馬鹿だって気付くよ。」

父さんも母さんも、姉さんにカレシがいることぐらいは知ってるんじゃない？

もっとも相手が、高校生だとかそれ以上のことは知らないだろうけど」

ケンジは自身の首が絞まることも構わず、鞆の中をまさぐる。先ほどまで感じていた衝動は少しずつ収まり始めている。

感情を洗い流されたケンジに残ったものは、無気力だった。この

まま、サチエに絞め殺されても構わない、とどこか達観している。

「まさか、自分の娘が高校二年生とベイトインしてるなんて知ったら、父さん達どう思うかな。それも、あんな女みたいな奴をさ」

サチエの両腕から力が抜け、床に放り出された。しきりに咽を辺りを摩るコウセツを睨みつけながら、エミナは呻くように歯と歯の隙間から声を漏らす。

「要求は何？」

「別に、ただ、これを見せたかったただだよ」

ケンジは鞆の中から一つのクリアファイルを取り出すと、サチエに投げつけた。

クリアファイルはサチエの胸に辺り、中身をぶちまける。飛び出た紙が宙を舞った。

「デジカメをプリントアウトしただけ、じゃ」

反射的に受け取ったサチエは、両手に残った分の紙に視線を落として固まる。

紙には遊園地の様子が印刷されていた。森をイメージしたオブジェと観覧車やジェットコースターを背景に、男女がベンチに座っている。男女はベンチに座り、親しげな様子だ。どちらもリラックスしたい顔をしていた。

「これが、どうかした訳」

サチエは笑いながら、紙をケンジの足元に放り投げる。しかしその笑みは固く、指先は小刻みに震えていた。

「恋人の浮気をそんな風に言ったら、本当に捨てられるよ」

「浮気って、友達と一緒に遊んでた位で目くじら立てるつもりはないわよ。大体、あんたがこれを撮ったて事は一緒に居たんでしょ」

話しているうちに余裕が出来てきたのかサチエの表情が柔らかくなる。

「キス……してた」

ケンジは血を吐くような思いで、その単語を口にする。実際に見たわけではないが、ケンジが逃げた後、コウセツとスマレが何をし

ていたか等、簡単に想像できた。

「はあ、手の込んだ嫌がらせだけどさ。取って付けたつじつま合わせの言葉じゃ、誰も騙せないわよ」

「今日、ウツ、見たんだよ。目の前で、ふ、二人がキ、グス、キスしてた。こ、校舎裏で、グス、抱き合って」

ケンジは鼻を嚙りながら、たどたどしく自分が見た事を話す。頬を流れる涙が、顎先から滴り落ちた。

サチエは地面に落ちたせんべいを拾ってかじる。何とも平和な音がリビングに木霊した。

まるで何も感じていないようなサチエの態度に、ケンジの中に溜まった鬱憤が爆発した。

「あんたがッ！」

ケンジはサチエに飛び掛り、ソファに押し倒す。

そのまま、ケンジはサチエの顔を目掛けて拳を振り下ろした。

拳はサチエの頬をかすめ、ソファにめり込む。

「あんたが、あいつを、しっかりコウセツの彼女をしてたら、ちゃんと魅力があれば、そしたら、スミレさんは、スミレさんは、ああああああッ！」

ケンジは声を上げて、泣き叫ぶ。まるで土下座するように下がってきた頭を、サチエが優しく撫でる。

「その子の事が好き、だったの」

ケンジは嗚咽を漏らすだけだ。サチエも優しく頭を撫で続ける。

気付くと、テレビではCMが流れていた。明るいCMをBGMに、ケンジは泣き続ける。

CMが終る頃になると、ケンジは立ち上がった。

「もう、気が済んだ」

「いきなり怒鳴ったりしてごめん、だけど、嘘は言っていないから」  
ケンジは小さく頭を下げると、散らばった紙をクリアファイルに集める。クリアファイルをテーブルの上に置くと、ケンジは鞆を持ってリビングから逃げ出した。

自室に駆け込んだケンジは、枕に顔を押し付ける。くぐもった泣き声が、枕の隙間から漏れ出てきた。

ケンジは、情けなかった。

自分の姉に八つ当たりをして、その上姉に慰められた。どこまで子供なんだ、と自分を呪いたくなる。

その上、逃げ口上を口にして、逃げてきた。

こんな事だから、スマレに振り向いてももらえない。こんな事だから、いつもコウセツの引き立て役なんだ、とケンジは情けない自身を罵倒する。

いつしか涙は涸れはてた。

ふと、ケンジは左ポケットに入った白い携帯を取り出す。これが来てから、良い事は何もなかった。しかし、悪い事は今日、起こってしまった。

「これを信じてもいいのかな」

ケンジは自分の願いを叶える為に必要な道具を弄ぶ。

たった数百グラムしかない、通信機器

たった十数年で爆発的な進化を遂げて、いまや日本中に広まった製品。

その繁殖性と進化速度は、ゴキブリの生命力を思い起こさせた。

「従うしかないか」

ケンジの中で、携帯電話、そのものの持つ異常とも思える浸透性と、悪魔の様な力が重なった。

「もう、欲しいものなんてないもんな」

ケンジは携帯のディスプレイを見る。時刻は、九時をまわっていた。力なく立ち上がると、白い携帯をポケットに戻す。

「風呂、入ろう」

緩慢な動きで、ケンジは箆笥から服とタオルを取り出した。

部屋の外に出ようと、ノブを回そうとして止まる。

しばしの間、ドアの反対側を伺っていたケンジだが、意を決するとドアを開けた。

テレビの音が聞こえた。内容は、最近良く名前を聞く新人芸人のコントだ。どこかで体験したようなシチュエーションに、ケンジの身体は強張る。

ケンジは極力足音を立てないように、風呂場へ向かった。その途中、リビングではソファに寝転びせんべいを食べながらテレビを見ているサチエが居た。先ほどの事が嘘だった様に、普段通りの姿だ。ケンジはサチエの視界から隠れるように、リビングを通り過ぎる。「ケンジ」

小さくなったケンジの背中に、サチエの声がかかった。

「な、何か用？」

ケンジは小動物の様に震えながら、振り返る。

サチエは相変わらず、テレビを見ていた。

「これ、貰ったから」

サチエは、先ほどのクリアファイルを掲げる。まるで、読み終わった雑誌を貰うような気安さだ。

「うん」

元々そのつもりだったケンジは、素直に頷く。

「それと、好きな子がいるならがんばって、振り向かせなさい。」

ま、草葉の陰から高みの見物ぐらいしてあげるから」

ケケケケケ、とサチエは含み笑いを漏らした。

「余計なお世話だよ」

ケンジは荒からしい足音をたてながら、脱衣所に入る。そこに先ほどまでの遠慮はなかった。

六月二九日

六月二九日、昼休み、ケンジは一人で弁当を食べていた。その顔は暗く、憂いを帯びている。

ケンジは僅か数メートル先の光景を見て、深くため息を吐いた。

「コウセツ、はい、あゝん」

「あ、うん、あゝん」

「おいしい？」

「うん、おいしいよ」

甘ったるい空気があふれ出している。

ケンジはハートの形を作りそうな桃色空間を見せつけられ、気分がドン底まで下がった。胃の辺りがムカつき、食欲がなくなる。しかし食べなければ、家に帰ってから処理に困るのだ。

ケンジは意を決して箸を掴み、弁当の中身を口に押し込む。食物を口に入れるたびに食道を逆流しようとするものを無理やり押さえ込んだ。

ここ一週間ほど続けられた食事風景だが、今日は一段と酷くなっている。

今までは、無理にでも全部食べられた弁当が、今日は三分の一も入らない。育ち盛りの男子高校生としては、不健康な状況だ。

「ちくしょう、何であいつだけ」

ケンジはコウセツを一瞥すると、小さく呟いた。コウセツの顔には大きなシップが張られていたが、それ以外に目立った傷はない。それどころか、昨日よりスマレとの距離が縮まったように見えた。

ケンジは口元を押さえて俯く。必死に吐き気を抑える彼の目に黒い染みが飛び込んできた。

昨日、エミナが流した鼻血の痕だ。

丁度のその血痕のある辺りで、修羅場があったのだ。

スマレとコウセツが付き合ってる状況に我慢できなくなったエミ

ナが、教室でコウセツを責めた。その中でエミナは、自分とコウセツに肉体関係があった事を暴露したのだ。

その場にはケンジのほかに、スミレが居た。この時、ケンジはこれでスミレはコウセツに愛想を尽かすと思った。無表情でコウセツに近づくスミレの背中に、期待と興奮で胸を躍らせていた。

しかし、スミレはケンジの期待を裏切り、エミナを殴り、コウセツをつれて出て行った。

ケンジは何も出来なかった。コウセツがどんな男でも、スミレの恋が揺るがない様に思えたケンジは、結局声一つ上げられず、空気に化していた。

その時の事を、ケンジは良く覚えている。

勝ち誇ったスミレの顔、いやらしいにやけ顔をしたコウセツ、そしてエミナの口から漏れ出る呪詛。張り詰めた空気も、血の匂いと惨めな気持ち全部覚えていた。

ケンジは、力なくため息を吐く。既に吐き気はなくなっていた。ただ、肝心なところで何もしない自分が嫌になる。

「願いが叶えば、俺だって」

そこで言葉に詰まったケンジの左ポケットが震えた。

ケンジの肩が跳ね上がる。

ケンジは一度周囲を見渡して、誰も自分に注目していない事を確認すると、左ポケットに入った白い携帯を取り出す。メールが着信していた。

メールの文面を確認して、ケンジは途方にくれる。メールには『社会準備室にある、雑誌古代日本を適当な生徒と二人で図書室に戻せ』と記されていた。

「どうしたものかな」

ケンジは今、誰かと一緒に居たくなかった。ケンジの心は傷つき、疲れきっていて、一人静かに誰にも干渉されたくない事を望んでいる。

とは言え、携帯の指示を無視する事は出来ない。

理想は、自分に構わない人間に頼む事だが、そんな奴はこちらの頼み自体聞いてくれるわけがない。

嫌がらせでコウセツを連れて行ってもいいのだが、生憎、メールが来る少し前にコウセツとスミレは何処かに行ってしまった。

誰に頼んだら最も楽か、ケンジが思案に暮れていると、ドアを開けてエミナが入ってきた。鼻につけたガーゼと目の下に出来たクマが、痛々しい雰囲気をかもし出している。

ケンジはエミナに駆け寄りながら、声をかけた。

「エミナ」

名前を呼ばれたエミナは、勝気な印象を与えるツリ目をケンジに向ける。しかし、すぐに視線は外された。

「ナイスタイミング。ちよつといいか？」

エミナは、何かを探すように教室中を見渡す。そして、にこやかに笑うケンジに背を向けた。

「用、外で聞く」

独り言の様な音量で言われたケンジは、誰に向けられた言葉か理解するのに一秒弱の時間を要した。

言葉の意味をじっくり噛み砕いたケンジは、慌ててエミナの背中を追う。廊下に出たエミナは既に教室一つ分の距離を歩いていた。

エミナと肩を並べたケンジは、顔を横に向けて言葉に詰まる。

エミナは非常に機嫌が悪いように見えた。

さらに言えば、正気には見えなかった。神経がダース単位で切れているのを誤魔化している様にしか見えない。

ここ一週間近く、毎朝洗面台で同じ表情を見ているケンジには、絶対の自信があった。

惜しむらくは、どのような神経が切れているか分析する能力がケンジには備わっていなかった事だ。

ケンジにとって、今のエミナは下手についたら爆発する爆弾である。それもマニュアルが付いていない不良品だ。

「ここは人目につくから、向こうの。そうだな、社会準備室の辺り

で話そう」

それでも、携帯の指示を達成しようと、ケンジはエミナを社会準備室に連れて行く事にする。

エミナは素直に頷き、歩くペースを上げた。

それに釣られてケンジも速度を上げる。

しかし、ケンジがいくらか早く歩こうとも、エミナと肩を並べる事は出来ない。ケンジが近づくと、まるで逃げるようにエミナが速度を上げるのだ。

社会準備室に到着する頃には、二人のペースは走っていると言っても過言ではない速さになっていた。

お互い、玉のような汗をかき、肩で息をしている。

エミナとケンジは、靴の裏からブレーキ音を響かせながら停止する。歩いて止まったと表現するには大げさすぎる摩擦音だ。

エミナが社会準備室のドアに寄りかかり、顔だけケンジの方に向ける。

「で、何の用」

「そ、それなんだが、ちょっと手伝って欲しいんだ」

ケンジは息を整えながら話し出す。その間、両手は蒸れたカッターシャツの襟元を広げ、額に浮かんだ汗を拭い取る。

「手伝うって、何を？」

エミナの目が若干細くなる。品定めするような視線に、ケンジは居心地悪そうに身をよじった。

「それは」

ケンジは途中で言葉を切った。

誰かの声が聞えたのだ。押し殺したようなくぐもった声だ。気のせいではない。

その証拠に、エミナも声のした方を振り返っている。

振り向いた先の廊下は突当りとなっていた。右手に社会準備室、左手にはトイレがある。

声はトイレから聞えた。

防犯目的で校内のいたる所に設置している監視カメラも、トイレにはない。その監視のないトイレから、明らかに排泄音とは違う音が漏れてきた。それも苦しそうな声だ。

イジメかもしれない、とケンジは考え、巻き込まれないようにしよう、と思った。

「イジメ？」

「かもね」

同じ思考をたどったのであろうエミナの発言に、ケンジは頷く。

もう一度、トイレから声が漏れ出た。意識を声に向けていた所為か、先ほどよりはつきりと聞える。

若い女の声だ。

ケンジの良く知っている女の声に似ていた。

「聞いたことある声ね」

エミナの眩きで、ケンジは自身の予想を聞き間違いとして処理する事が出来なくなる。

「そうだね」

ケンジとエミナは顔を見合わせると、足音を立てない様にトイレの入り口へ忍び寄った。

トイレの入り口に張り付いたケンジの耳に、女の声がはつきりと聞えてくる。蜂蜜の様に甘くまとわりつく声だ。

声が聞えるたびに、アンモニア臭や芳香剤とは違う第三の匂いが鼻腔をくすぐる。魚のもつ生臭さに似ていたが少々違う、ただ生臭いだけではなく引き付けられる様な甘さが含まれていた。

ケンジが今まで嗅いだ事のない匂いだ。

「コウ……い……」

「……ミレ、い……」

女がオブラートを上げ、男が苦しげに呻く。静かになったトイレから、先ほどまでより一層強く第三の匂いが溢れ出てきた。

ケンジは何となく、何が起きたのか、何が終わったのか、理解してしまっ。

不思議と衝撃はなく、また悲しみもない。

ただ、股間が痛いほど張り詰めていた。

呼吸をただし、高ぶった気持ちを抑えようとする。

「帰る。話は後で聞くから」

ケンジが呼吸を整えている最中、エミナが歩き去っていく。

ケンジはそれを止めようとはせず、必死に呼吸を整える。しかし、再び聞えてくる甘く蕩けるような声に、ケンジの身体は神経を高ぶらせていった。

自然と手が股間に伸びていく。指先がズボンのチャックに触れたところで、熱した鉄板に触った様に跳ねる。

ケンジは裏切られた様に指先を見つめていた。

女と男の声が聞こえ、先ほど同じようにトイレの中が静かになる。衣擦れの音と水の流れる音が聞こえてきた。

トイレの中から鍵の外れる音が聞こえた瞬間、ケンジは弾かれたように走り出す。事実を知る恐怖から逃げる為に、後ろを振り返らず、懸命に走り続けた。

階段を駆け上がる。爪先に感じる衝撃が、ケンジを上と運んだ。重力と言ったものから切り離された浮遊感が、ケンジの身体を更に上へと押し上げる。

ケンジは階段を登りきり、屋上へ出る鉄製の扉の前で止まる。鉄製の扉は鎖と南京錠でしっかりと封じられており、開ける事が出来ないからだ。

ケンジは鉄製の扉に身を預けると、そのまま座り込む。

大きく口を開けて、貪るように空気を吸い込んでいく。巻き上がった埃の匂いと鉄錆の臭気が鼻に付いたが、呼吸は更に大きくなるだけで一向に治まる気配がない。

「ちくしょう、ちくしょう、なんなんだよ」

左ポケットに手を入れ、携帯を取り出す。穢れを知らない白い携帯が姿を現した。

携帯は沈黙を保ち続けている。

この携帯を手に入れてから、ケンジには良いことが一つもなかった。むしろ不幸になっているとケンジは感じていた。

この携帯の通りに動いてもケンジには良いことは一つもなく、コウセツはどんどん幸せになっているようにしか思えない。

サチエはまだコウセツと付き合っている。

スミレはコウセツと付き合い始めた。

エミナはその状況を見ても何もしようとは思わない。

どこまでいってもコウセツに都合の良い世界に思える。

発作的にケンジは携帯を投げ捨てよう振りがぶる。振りがぶったままケンジの腕は動かなかった。

小刻みに震え、手の甲にいくつもの筋を作る。

まるで誰かに推し留められているように、手は動かない。

「ちくしょう、ちくしょう」

幾ら時間が経とうとも、ケンジの手から携帯が放られる事はなかった。

ケンジは携帯を胸に抱きながら悪態をつくに留まる。

ケンジにこの携帯を捨てる事は出来ない。

今までケンジに不幸を呼び込んだこの携帯の持つ魔力が破棄する事を躊躇わせる。

昼休みが終るチャイムが鳴っても、ケンジはその場を動こうとは思わない。ただ、携帯を抱きしめながら、誰にともし判別しない恨み言を唸るしかなかった。

七月二三日

七月一三日、木曜日、ケンジは病室のドアをノックすると、返答を待たずにドアを開けた。

ベットに寝ている患者が顔だけケンジに向ける。患者の顔は全て包帯で覆われており、男か女かすら分らない。しかし、その特徴的な容姿は、包帯の上からでも良く分かった。

まず、鼻がない。そして、右耳もなかった。どちらも、本来あるべきものがある位置が平らにならされている。更に頬が左だけ陥没していた。ベットの膨らみ方もおかしい。胴体から下のふくらみが無いのだ。身長が半分に縮んだのでなければ、下半身が無いのだろう。

ケンジはその異様な姿に息を呑んだ。

患者の口から掠れた声が響く。

「ケンジか」

まるで老人の様に枯れきった声色だった。

患者から漏れる気持ち悪い空気を跳ね除けようと、ケンジは殊更明るい声で返す。

「よ、コウセツ」

空いている右手を軽く上げ、ケンジは患者、コウセツへ近づいた。「いや、外は暑いな。もう夏だぜ」

ケンジは左手に持った果物の詰め合わせをベット脇の棚に置く。

そのまま包装を剥がした。

「あ、これ、見舞いの品だけど、どれ食べる？ リンゴとか梨とか柿とかあるぜ」

両手でリンゴとドリアを掲げて見せるが、コウセツから返事はない。

軽く肩をすくめたケンジは果物から手を離し、ベット横の椅子に座った。

「とりあえず、コウセツが生きてて良かったよ」

ケンジは心の底から嬉しそうに微笑む。

七月八日、この日何があったのかケンジは知らない。ただ、スミレが死んで、コウセツが入院した。その犯人がエミナである事だけ知っている。

他のクラスメートはそれすら知らない。

七月一日、月曜日の事だ。朝のホームルームで、三人とも家庭の事情で休む、とだけ連絡があった。当然、クラスメート達は何があったのか騒いだが、誰も詳しい事情を知らない。ただ噂や憶測だけが飛び回った。

警察が事情を聞きに来なければ、ケンジも他のクラスメートと同様に何も知らなかっただろう。事件関係者と親しい友人であり、姉が被害者の一人、コウセツと恋人同士、と言う極めて事件に近い位置に居たお陰で、ケンジは警察から簡単に結果だけ聞かされた。

それで十分だった。

スミレ、コウセツ、エミナの三人の関係とそれぞれの性格を考えれば、何が起きたのか察する事は難しくない。

「こんな格好だけだな」

コウセツが掠れた声で自嘲気味に笑った。乾いた笑いだが、ドロドロとした暗さはない。

ケンジは思いの他元気なコウセツに驚いた。もつと落ち込んで、自殺ぐらい考えていると思ったのだが、存外図太い様だ。

そのサバサバとした雰囲気は、どこかの漫画の主人公の様だった。だから、ケンジは遠慮なく刃を抜ける。

「スミレさんに比べれば生きてるだけでしたろ」

一刀で病室の空気が凍りついた。

「元凶の癖に、何でまだ生きてられるんだよ？」

ケンジの冷め切った瞳がコウセツの目を射抜く。コウセツの黒い眼からは感情をまったく読み取る事ができなかった。

「ちよっとは後悔しろよ。この人ごろっブツ」

人殺しと言おうとしたケンジの顔面に、コウセツが投げた枕が直撃する。顔面に当たった枕を投げ捨て、コウセツをにらみ付けた。

コウセツは枕を投げた腕を押さえながらベットに倒れている。そして、空洞のように黒い瞳でケンジを射抜いていた。

「僕の所為じゃない」

掠れた声が怨念の様に流れ出る。

「エミナが悪いんだよ。あいつの頭が可笑しかったんだ。僕は被害者だ」

「ふざけるなっ！」

ケンジは荒々しく立ち上がり、コウセツの胸倉を掴んだ。奥歯を砕きかねない程、歯を食いしばり、真っ赤に充血した目を見開く。

まだ最低限の常識があるのだろう、振り上げられたケンジの右拳は、小刻みに震えながら宙に止まっていた。

睨み付けるケンジに対し、コウセツは酷く冷めた目をしている。

暫く視線をぶつけあっていたが、ケンジは顔をそらし、コウセツの胸から手を離れた。放り投げられたコウセツの体がベットの上を跳ねる。

「まあ、いい。今更何を言っても、スミレさんは帰ってこない」

ケンジは自分に言い聞かせるように呟く。

その呟きはコウセツにも聞こえていただろうが、反応はない。ベットの上を虫のように動き、姿勢を直していた。

「用事だけ済ませて、さっさと帰らせて貰う」

「用事？」

ケンジはポケットから白い封筒を取り出し、戸惑った様子のコウセツの上に放り投げる。

封筒を摘み上げたコウセツは、封筒に書かれた一文を読んだ。

「絶縁状」

裏返しても、宛名はない。ケンジが意図してその様な様式にした。その方が、コウセツを叩き潰せるからだ。

「ケンジは思ったより古風だね。僕達の関係にこんな必要ないだ

ろっ」

鼻で笑うコウセツに、ケンジは暗い愉悦が膨らむ。今から自分がコウセツの憎たらしい余裕を叩き潰せると思うと、それだけで顔がにやけそうだった。

「宛名は日高サチエ」

「は」

コウセツの口から力のない振動が発せられる。魂を抜かれた様だ。ケンジに胸の内を喜びのさざなみがさらった。

「そりゃ、まあ、それは、確かに、なあ、あれ？」

ひょうきんな声を漏らしながら、コウセツは小刻みに震える手紙を開封する。同級生二人と浮気して、顔を潰されて、下半身がなくなっても、自分の恋人は見捨てないと思っていたのだろうか。

ケンジの口角が僅かに釣り上がる。

「用事それだけだから、じゃあな」

ケンジはあっさりと背を向けて、病室から出た。

そのまま早足で、病院を出る。ねっとりとした熱気と肌を刺す日差しがケンジを出迎えた。

一本芯が入ったように胸を張って歩いていたが、それも病院の敷居を出るまでだ。敷地を出れば、背の高い塀が視界を遮り、病室は見えなくなる。

ケンジは大きく頭を垂れた。瞳から光が消え、頬が垂れ下がっている。疲れきった老人の顔だ。

「はあ」

ポケットから白い携帯を取り出した。新着メールはない。六月二十九日のメール、『社会準備室にある、雑誌古代日本を適当な生徒と二人で図書室に戻せ』を最後に、携帯が震える事はなかった。

「結局、これはなんだったんだろっなあ」

ケンジは一番最初のメールを開く。

件名は『日高殿へ』、本文は『君はこの裏切りが許せるか？ 許せない心があるのなら、君の願いを返信願う。君の許せない心を代

償に、願いを叶えよう』とあり、写真が添付されている。写真は三枚、コウセツとサチエと一緒にホテルから出てくる写真、コウセツとエミナが裸で抱き合っている写真、そしてコウセツがスマレと仲良く手をつないでいる写真だ。

これを見た時、ケンジは顔中を憤怒の熱で燃え上がらせた。それまで心にあつた諦観が全て焼け落ちてしまった。

姉と付き合いながら、エミナとも付き合い、その上スマレに手を出そうとしている男はケンジの親友だ。どんな時でも主役になつてしまう何かを持った男だった。最初はケンジと同じ脇役だったはずが、いつの間にか皆の中心にいる、そう言う男だ。ケンジはその隣で指をくわえて見ていた。

親友だから、ケンジはそれで良いと思っていた。主役の隣にいる賑やかしでも、恩恵はある。主役が食べ尽くした残りかすのようなものだが、それで十分だと思っていた。

「返信、間違えたかな」

ケンジは返信メールを開いた。

件名は『Re：日高殿へ』、本文は『許せない。コウセツを滅茶苦茶にしたい。全員と別れさせて、二度とこんなふざけた事が出来ないようにしたい』とある。

このメールを送った時を、ケンジは良く覚えている。胸を焼き尽くす不快感と脳を爆発させるような衝撃、目じりに溜まる涙と軋み音を立てる奥歯、荒々しいタイピングと止まらない指先、隅々まで記憶に残っていた。

ケンジとつて、コウセツは嫌な奴である。平気でケンジの気にしている事を突つつき、格下として見下し、ケンジが後ろにいたことが当たり前だと言う態度を取られていた。

それでも親友だと思っていた。嫌な奴であるが、コウセツもケンジを親友だと思っていると思っていた。

「ここで、スマレさんとの願いをお願いしていれば……」

自分の予想を吹き飛ばす為に首を左右に振る。

どう考えても、こんな事が原因の訳がない。あんなちょっとした事で、三人分の人生が滅茶苦茶になるなんて信じたくなかった。

「忘れよう」

ケンジは携帯をポケットに仕舞い込み、緩慢な動作で歩き出す。

「これは不幸な事故だったんだ。悪いのは、節操のないコウセツなんだ」

ふらふら、ふらふらと風に揺れる草葉のように覚束ない様子で、ケンジが歩道を歩いていると、前方から大きな掛け声が聞こえてきた。

「……リクドーフアイツオファイツオ……」

顔を上げると、真っ黒に染まった野球部員の一団が走ってくる。

日差しが強い所為だろう、少しでも日陰に入ろうと塀側に張り付いている。

ケンジは反射的に脇に寄った。

少しだけ運が悪かった。野球部員の一人がふらつく。隣を走っていた部員と肩があたり、二人はもつれるように倒れた。蟻の行進のように隙間なく走っていた野球部員達は、玉突き事故を起こしたように倒れ、そのうちの一人がはじかれ、ケンジとぶつかった。

「わっ！」

野球部員に押し倒されたケンジは、ガードレールを乗り越え、背中からアスファルトにぶつかる。鈍い痛みと焼け付くような熱気に顔を歪ませる。

苦痛に背中を押さえたケンジは、ゆっくり起き上がろうとして、甲高いクラクションを浴びせされる。何だ、と思いい顔を横に向けると、猛スピードで走ってくる乗用車が見えた。既に双方の距離はなく、激突は回避不能である。

「は」

周囲の動きが緩慢になった世界でケンジは力を抜いた。自分の胸部に当たるであろう自動車の左前輪、そのトレッドパターンがよく見えた。

やっぱり、間違いだったんだ。

ケンジは反省する。

不幸を願ったから、不幸になるんだ。

「ごめんなさい」

誰に向けたか分からない一言は、けたたましいクラクションとブレーキ音に隠れて誰にも聞かれなかった。

七月二三日

七月一三日、この日はとても暑い。去年も一昨年も、その前もずっと暑かった。景色は波打ち、反射光が痛いぐらい眩しい。

病院前に西洋風の小洒落た喫茶店がある。店の奥には重々しい木製のカウンターがあり、窓際には組木細工で出来たテーブルが並べられ、麻と木だけで編まれた椅子が何脚も配置されていた。流れている音楽は、クラシックだろうか、静かな音楽が控えめな音量で流れている。

店内には客が一人、窓際の席に座っている。少し茶色い髪を三つ編みし、黒縁眼鏡をかけたセーラ服の女の子だ。分厚い眼鏡の奥に見えるつり上がった瞳は、獲物を追う猫のように手元の本の上を忙しなく動いていた。

クーラーのかかった店内でお気に入りの紅茶を飲みながらの読書は、三つ編みにとって数少ない楽しみの時間である。しかし、今日はその楽しみに没入できていなかった。誰か待ち人でもいるのだろう、何度も窓の外を覗いては肩を落としている。

「あ」

三つ編みが温くなった紅茶を両手に持った姿勢で固まった。

窓の外で野球部がドミノ倒しの様に倒れたのだ。イガグリ頭の白い一団の雪崩が歩道いっぱいを占有している。誰かがガードレールに当たった。上半身が車道に放り出される。

三つ編みの脳内でけたたましいクラクションが再生され、涼やかな鈴の音が店内に響いた。鈴の音の方へ首を回すと、痩せ細った男が笑顔で手を振っている。髪を茶色に染め、白いワイシャツを少しだらしない風に身に着けており、軽い感じのする男だ。

男は自然な様子で、三つ編みの対面に座る。

「御堂さん、お待たせ」

男はざらついた声で言った。

「遅い」

御堂と呼ばれた三つ編みは、目を細めて睨み付ける。

「ごめん、ちょっと手間取ってね」

男は軽い微笑で受け流し、メニューを開いた。お冷を持ってきた店員にコーヒーを頼む。

男の注文に御堂は眉をしかめる。コーヒーは匂いが強すぎて、紅茶の香りを消してしまうからだ。

御堂の気持ちを知ってか知らずか、男は朗らかな声で礼を言う。

「今日は来てくれてありがとう。最近、忙しいって聞いたから、断られたり、すっぱかされたりしたらどうしよう、て思ってたんだ」  
「最初はそうしよかな、て思ってたけど」

御堂を一瞬ためらってから、続けた。

「大切な用事なんですよ」

御堂の胸が早鐘の様になる。鐘音は次第に大きくなり、何度も反響していった。

「うん、そうなんだ」

男はそこで言葉を区切ると、顔を横にそらす。

御堂も男に釣られて横を向くと、倒れた野球部員たちが見えた。御堂の心臓が脈動した。

男は御堂に向き直ると、ゆったりとした口調で尋ねる。

「二年前、君は悪魔部に何をお願いしたのか教えてくれないか？」

「え、何を言ってるの、日高君？」

御堂はとぼけて見るが、声は震えていた。

「惚けなくてもいいよ。御堂さんが、俺、日高ケンジを助けたのは、悪魔部からの指示なんだろう？」

男、ケンジはワイシャツの胸元を開く。服の隙間から見える肌一面に、何かにすりつぶされたような痕があった。事故の痕だ。二年経っても痕は薄くなる気配すらなかった。

二年前、コウセツの病院に絶縁状を届けた帰り、ケンジは車に轢かれた。車はブレーキを掛けていたが、普通なら死んでいた。とて

も衝撃的な光景だった。この時、いち早くケンジに駆け寄った人物が、御堂だった。

至近距離で事故を見ていた御堂は、車の奏でる耳障りなスリップ音やアスファルトの匂い、日差しの作る影の濃さまで詳細に思い出せる。

ケンジが生き残れたのは三つの幸運があったからだ。一つは車がオフロード用で車高が高く、一人分位なら入り込める隙間があった事。一つはケンジが死を覚悟して体中の力を抜き、アスファルトにびったり張り付いていた事。一つは車が中途半端な位置で止まらず、通過した事。

これらの三つの幸運により、ケンジは車の前後輪に胸を押し潰されるだけすみ、手早く治療を受けることができた。

もし、車の車高が低かったり、ケンジが車から逃げようと体を起こしていたら、車のバンパーと衝突していた。良くて内臓破裂、悪ければ脳内出血で死んでいた。

もし、車が通過せず、ケンジの真上で止まっていたならば、車体の下から引きずり出す必要があった。そんな事をしていたら、手遅れになっていた可能性が高い。

「だから、何言ってるのかわからないわ。あの事故の時、私はただまあ、たまたまの場に居ただけ」

「雨粒の理論」

ケンジの一言で、御堂は言葉に詰まった。

「例えば、今、この町に雨が降ったとして、その道路に雨が降らない事はないだろ。確かに雨粒の殆どはその道路に降らないけど、雨が道路に降らないことにはならない。」

まあ、実現する確立がどれだけ低くても、試行回数が増えれば、いつか必ずそれは実現する、そう言う事だね」

例えば、ここに十個のサイコロがあったとする。この十個を転がして、すべて一が出る確率は六分の一の十乗、つまり六千四十六万六千七百七十六分の一だ。殆どおきる事はない。しかし、六千四十六

万六千百七十六回、サイコロを転がせば必ず一回は出てくる。雨粒の理論とはそういう理論だ。

「ちよつとした数学的な話……あ、ありがとうございます」

ケンジはさり気なく出されたコーヒーを手に取り、店員に頭を下げた。店員は小さく会釈すると、ゆっくり立ち去っていく。店員が十分遠くに離れたところで、ケンジは再度口を開いた。

「後、占い師の詐欺、オリエント急行殺人事件」

聞き覚えのあるフレーズが御堂の耳を叩く。唾を飲み込もうとするが、口の中がかさついて飲み込む唾がなかった。

「かなり巧妙な手口だけど、君だけは特別なんだろう？　そうでなきゃ可笑しい」

御堂は深々とため息をついてから、ティーカップに口をつける。温くなつた紅茶で口内の渴きを癒し、自嘲気味に笑った。

「凄い執念、よく調べてるよ。降参」

御堂を両手を上げて降伏する。もう、ケンジは悪魔部の手口を理解しているのだろう、これ以上誤魔化しても、不利にしかならなかった。

「何で分かったか、教えてくれる？」

「携帯、あの白い携帯が無くなってたから。あの事故のドサクサにまぎれて君が盗つたんだろう？」

御堂は失敗したなあ、と思いながら、苦笑する。あの携帯だけは回収してはいけなかった。あれは悪魔部が存在した明確な証拠になってしまふ。それだけは防がなくてはいけなかった。しかし、やり方が強引過ぎた。別のチャンスを待つべきだったのかもしれない。

呆れの混じつた声色が御堂の口から漏れた。

「よく、そんな事で気づけたね」

「色々あったからなあ。それで調べたんだ」

ケンジが過去を見つめる様に、天を仰いだ。

「二年前の野球部、大会途中の練習でエースが怪我をして三年生の

補欠が代わった。

駅前の風俗店の一斉搜索があつたのも二年前だ。

二年前の夏休みに俺の家の近くでボヤ騒ぎもあつたなあ。

他にも俺が気づいていない仕込みを沢山したんだろ？

携帯を手に入れる為に」

「うん、そう」

御堂はあっさり頷く。

「悪魔部の手口が分かっているようだから少しだけ弁解させて貰うわ。

願いを叶える為に色々と仕込みはするけど、結果を誘導させているわけじゃないの。だから、結果は本当に偶然。

誰も予想していなかった事もあつたし、悪意を持ってやったわけじゃないわ。

特に、日高君の胸の傷は痛恨のミスだった。本当なら、どれだけ運が悪くても、車道に倒れたところを私が助けてお終いだつたの」

ごめんね、と御堂は呟いた。

「だから、あの事故の時は本当にビックリした。ショックだったわ。それが原因ね。今でも日高君と友達なのは」

ケンジは視線を御堂に戻して言う。

「俺はさ。あの事件の真相にはそんなに興味はないんだ」

鋭い視線が御堂の心を打ち抜いた。

「あれは俺たち四人の問題だった。確かに悪魔部から色々な干渉はあつたけど、どれも大したものじゃない。

俺を含めて皆、他人を蹴落として幸せになろうとしたから起きた事件だ。だから、俺は誰かを責める気はないし、真相を暴く気もあまりない。答えあわせ位はしたくて、格好つけたけどさ。

知り合いに真相を突き止めようとしている奴も居るけど、そいつに協力する気はない。

ただ、御堂さんが何をお願いしたのか、知りたいだけなんだ。

二年前の事件の要素で、君は特に何か願いをかなえて貰って様に

は思えない。

この二年間調べてきた中で唯一知りたい事はそこだけなんだ。  
教えてくれないか？

大丈夫、レコーダーなんて持ってない」

ケンジは、なんならボディチェックでもしてみる、とおどけて笑  
って見せた。

御堂は首を小さく左右に振ってから、恥ずかしそうに呟く。その  
声はとても軽く、罪悪感の欠片もなかった。

「駅前にあるレトワールのデラックスジャンボパフェ」

## 七月二三日（後書き）

”悪魔部へようこそ！”はこれにて終了となります。

終わり方については色々悩みましたが、尻切れトンボとさせて頂きました。

色々言い訳はありますが、作品外で作品をあんまり語っても蛇足ですので、書きません。

現在、次の物語を構想中です。

構想完了しだい投稿していきたいと思っています。

次回もAAAにお付き合いいただければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0297v/>

---

悪魔部へようこそ！

2012年1月8日22時55分発行